ISSN1880-3881

民族植物学ノオト

Ethnobotanical Notes

in collaboration with plants

第10号　No.10

2017

植物と人々の博物館
自然文化誌研究会
Plants and People Museum
The Institute of Natural and Cultural History

民族植物学ノオト　第10号：目次

Ethnobotanical Notes No.10：contents

巻頭言——生活世界の平安保守…… 1

Preface: Peace Conservation in Living World

インドと繋がる…… 西川　至…… 2

The link with India　*Itaru NISHIKAWA*

里山資源の活用に向けた伝統的・科学的知恵体系の変化と展望 ……西村　俊…… 14

Future Innovation Effort in Traditional Acquirements and Scientific Communication Approaches for Sustainable Development with Natural Capital　*Shun Nishimura*

愛媛の山里の諸問題 …… 土井 利彦…… 25

Issues of Mountainous Villages in Ehime Prefecture, Japan　*Toshihiko DOI*

〈第35回環境学習セミナー報告〉

東京学芸大学探検部創立40周年記念セミナーを開催して……黒澤 友彦・小川 泰彦…… 36

Memorial Seminar for the 40th Anniversary of Expedition Club of Tokyo Gakugei University　*Tomohiko KUROSAWA* and *Yasuhiko OGAWA*

〈第36回環境学習セミナー報告〉

『明日の小菅村を探る』～持続可能な地域社会の再検討～

黒澤 友彦・中込 貴芳・木俣 美樹男…… 42

"Searching for Tomorrow of Kosuge Village"

— A Review on Sustainable Regional Community

Tomohiko KUROSAWA, Kiyoshi NAKAGOMI and *Mikio KIMATA*

〈第36回環境学習セミナー報告〉

人口減少時代における地域再生

～都市と農村、中央と地方の健全な関係を再建することから～ …… 山下 祐介 …… 49

Regeneration of Regional Community in the Population Decreasing Age

Yusuke YAMASHITA

欧米系諸国の雑穀見聞録 …… 木俣 美樹男…… 58
A Record on Millets in European and North American Countries based on My Experiences *Mikio KIMATA*

自分で日本国憲法を考える …… 木俣 美樹男…… 62
Thinking about the Constitution of Japan for Myself *Mikio KIMATA*

［付録 1］自然文化誌研究会が担当した雑穀関連シンポジウム・研究会の小史…… 108
Appendix 1 : A Short History of Millet Research Meetings conducted by Institute of Natural and Cultural History

［付録 2］植物と人々の博物館の活動　2015 年度の記録…… 110
Appendix 2 : A Record of Plants and People Museum in 2015

編集後記……113
Editorial postscript

巻頭言――生活世界の平安保守

Preface: Peace Conservation in Living World

人々それぞれに人生の幸せを求める生活世界がある。個人を超えて、家族、村や街の地域社会、都市、民族、国民国家、国際社会、地球にまで、生活世界の広がりはその人の現実的な暮らしの範囲から、心の中に築かれる世界観にまで拡大する。個人の人生観もこの世界観に依拠し、自ら見たことのない伝聞や学習による原子、ミクロの生物、熱帯降雨林、生態系、地球ガイアを超えて、さらに太陽系、遥か彼方の宇宙にまで広がり膨潤する。最近では、インターネットによって一瞬にして時空を越えてしまい、現実世界と仮想世界がないまぜになって、その境界が薄れてしまい、判別がつかないほどに一体化してしまったようだ。

社会を構成する個人の生活史にこだわるのなら、自らの生活世界をどの範囲と知って、それを保守点検して人生を送るのか、これが最大課題だ。生活世界を保守するためには、これを侵害する物・者からの自衛は必要だ。行政や軍事組織の一員ではなくとも、個人として正面から真摯に議論し、市民組織としても、くにを平安保守する自律的な活動を心がける必要がある。

生活基盤の環境保全こそが最重要である。科学の還元論的リアリティ、またバーチャル・リアリティを批判的に部分否定しながら、一方で、環境学の全体論的直観、また想像力ファンタジーを部分肯定することだ。ヒロシマ・ナガサキ、ビキニ（原子爆弾･水素爆弾）から、スリーマイル、チェルノブイリ、フクシマ（原子力発電）に至る科学技術の結果事実から学び、直観し、想像力を働かせれば、今から変わる準備トランジションにはいらなければ、悲惨を平安にするために必要なゆったりした時間が逃げてしまいそうだ。自然災害と人為災害に応じながら、平安保守するためには、自然に還る野外活動を一時でも心がけ、自然と寄り添う暮らしを学び続けるべきだ。

大都市に暮らしていれば、生活基盤の自然を忘れて、金銭を巡って世界が動いていると誤解してしまう。人間が自然から遠ざかり、里から街に後退し、都市に引き籠ると、自然の野生は空白になった場所に戻ってくる。里に野生動物が下りてきて作物を食害、人を襲うようになった。電気柵がないと畑は維持できない。町にも野生獣は行くようになった。ハクビシンは街中の塀の上を歩き、光ケーブルを伝って悠然と移動する。極端には福島の原子力発電所公害で、居住困難な無人の街には、数年のうちに野生獣が跋扈している。その子孫は放射性物質で汚染されていた。すでに遺伝的変異を示す昆虫などもいる。植物や微生物も同じだろう。

辺境はいつでもフロンティアである。パーマカルチャーの提唱者の一人であるホルムグレンの言う「辺境」、周縁には生活の純粋な本質と美のかけらが今でもたくさん散りばめられている。山村という辺境に暮らす山民の素のままの美しい暮らしから、都市民が学び、思い出すべき経験の蓄積は多くある。

これは過去の想い出ではなく、未来に必要な伝統的生活知識や技能である。「神は細部に宿る」から派生したBeautiful is in small（「美は細部に宿る」、建築家ミース･ファンデルローエ）は、Small is beautiful（シューマッハ1973）に相通じると思う。

自然文化誌研究会はいつも辺境にてパイオニアワークを続けることを忘れたくはない。

黍稷農季人（2016.7.16）

インドと繋がる

西川　至

The link with India

Itaru NISHIKAWA

はじめに

乞われるままに書き記すことは、一私人のインドへのアプローチである。発表誌『民族植物学ノオト』の読者対象として相応しい内容に仕上げることは難しいと思っている。しかし、発行責任者からの依頼なるが故に、今回のご縁に応える努力をしてみたい。

私は1922年7月生まれ、今年94歳を生きている。そして、初めてインドに接触した1993年2月は70歳古稀の年であった。すべてが手遅れのインドであったが、さらりとインドを通り過ぎる一般の旅行者とはかなり異なるその後の20余年があった。それらは全く個人的な思い入れであるが、そのことが木俣美樹男先生との縁を得ることにもなった。私が旅の後、収集したインド関連本（以下、インド本と書く）は小菅村にある「植物と人々の博物館」に安住の場を得ている。以下、90年のインドについて思いつくままに書き残しておきたい。

ものごころつくころ

日本はいま、かつてない長寿社会になったとはいえ、昭和初期のころのことを語り合える人は私の周辺には殆どいなくなってしまった。「昭和　昭和　昭和の子供よ僕たちは…」というフレーズの歌を実感として語れる人に出会うことは先ずない。昭和4（1929）年が就学の年で、学校生活の中で少しずつ知識を習得していく過程は、いまも昔も変わりはないとしても、私の子どものころと違って、いまはあらゆる情報が就学前の子どもの前を飛び交っている。

四国愛媛県の南西部は南予といわれている。その宇和盆地の農村で育った少年にとって、新しい知識の殆どは学校で教わることであった。いや、それにもう一つのルートとして『少年倶楽部』という雑誌があった。

私が「インド」を初めて意識したのは、小学6年生の地理（外国）の授業によってかと思う。5年生では日本の地理を習い、6年生で世界地理を学ぶ。地理の授業には教科書のほかにサイズの違う「地理付図」というのがあった。それには平野や山脈や海などを区別する地勢図のほか、国別に色分けした世界各地の地図も載っていた。

国別地図は日本を赤く、中華民國（支那とも言った）は黄色に塗られていた。いまは幻の地域となったが、満洲国もオレンジ色で位置づけられていた。世界は7大陸に分かれていたが、そのどこにもピンクに塗られた地域があった。その宗主国がイギリスで、世界各地に領土（植民地）をもっていた。一日中陽の沈むことのない国とも教わった。

アジアの地図を見るとき、目の行く先に三角形にとがったピンクの半島があった。それがインドであった。当時は現在のパキスタン、バングラディシュ、ミャンマー、スリランカも同じ英領だったので、同じ色の広大な地域が広がっていた。「インドはイギリスの植民地で、綿花とかジュートとか鉄鉱石を多く産出する」という概念が、少年のころのかすかな記憶である。

いや、インドはお釈迦さまの生まれた地ということは、学校でインドを学ぶ前に知っていたかも知れない。先に書いた『少年倶楽部』に教科書以外のインドを見たかも知れないが、いま具体的に思い出すことはできない。しかし、子どもの頃の私はインドに何があるか、どのよう

な人が住んでいるかなど、具体的に知ろうともしなかった。

下って、1993年に初めてインドの地を踏み、そこでインドの農村の子どもの姿を見たとき、直感的に連想したのは私の少年時代の暮らしであった。屋外を駆け回っていた70年前の少年時代が、いまここに残っていると直感したのは何故だろうか。

戦いの世代

青年学校の教員を養成する学校に学んでいたころは、すっぽり大東亜（太平洋）戦争と重なる。昭和17（1942）年から20（1945）年にかけてであるが、このころインドをどう見ていたか記憶がない。ただいずれ戦地に行き戦死をするだろう自分のことしか考えられない時代だった。無謀なインパール作戦がビルマに展開されていることなど、知るよしもなかったが、教員養成の学校に在籍していなかったら、彼の地で遺骨として朽ち果てた身であったかも知れない。

チャンドラ・ボースという名前はいつ知ったのだろう。多分、戦後のいつのころかと思う。戦いの時代は、インドはイギリス軍の一員として枢軸軍と戦っていたのだ。チャンドラ・ボースがシンガポールで国民軍を募って、ビルマ戦線を日本軍とともにインド解放のための行動をとったことは、かなり後になって知ったことである。

ふとこの時代に『アニリン』という本を見たことをいま思い出した。アニリンとはドイツの発明した化学染料のことだが、その影響をもろに受ける地域としてインドの農村のことが書かれていた。

パール判事の東京国際裁判における日本無罪論は、インドという国を強い印象で意識づけてくれたが、それも後づけの知識だった。

時代が転換して

ものの本によると、イギリスの干渉に抵抗していたインド（ムガル帝国）が、その力に屈してイギリス政府の植民地になったのは明治維新の10年ほど前という。その後、ガンジー等の不服従運動の成果と、あわせて第二次世界大戦の帰結としての植民地解放の流れの中で、インドが独立を勝ち得たのは1947年。昭和で言えば22年8月のことである。私にとって、その時は新制中学の国語教師として勤め始めたころであったが、それらインド、パキスタンの分離独立のことなど話題となった覚えもない。

時の経過の中でガンジーなきあと、ネルーのリードする第三世界を標榜する非同盟主義のインドを好もしく思う気持ちなどはかなりあった。しかし、私にとって直接インドという国というか地域に関心を強めるには、さらに戦後40年ほどの時間が必要だった。

好んで求めた道ではなかったが、新制中学が出来たことで郷里の中学校で教鞭を取り、昭和28（1953）年の上京以来、多摩地区の小学校に30年勤める結果となった。この期間、出版ブームと相俟って、読むこともなかった数多くの全集・叢書を含めてかなりの書籍を求めたが、初期の2、3冊を除いてインドに関心を持つようになったのは、1985年に刊行された妹尾河童『河童が覗いたインド』との出会いによったかと思う。

初期のころというのは1957年刊行の岩波新書、堀田善衛『インドで考えたこと』と、同じ岩波新書の石田保昭『インドで暮らす』1963年刊であった。いずれも普及度の高い新書版ということと、内容の妥当性からこれらの本は長く版を重ねた。堀田善衛の本は、前年デリーで開かれた第1回アジア作家会議の書記局員として数ヶ月のインド滞在の記録であるが、この当時インドに長期滞在をすることは珍しかった。そして、いままで閉ざされていたインドへの視野を日本人に広げるのに、この本は重要な役割を果たした。石田保昭の『インドで暮らす』は、ニューデリーの日本語学校の教師として1958年から60年までインドで生活して、インドの庶民生活を報告している。

後日70歳でのインド行きのあと、インド本を漁るようになってみると、藤原新也の『インド放浪』1972年刊が出るまで、かなりの人がインドに渡り、それぞれに記録を残していること

がわかった。関心が薄いものには、少部数刊行のこれらの本を手にとる機会がなかったのは自然の理であろう。

当時インドに渡るには、①留学、②新聞社・公的機関・商社などの駐在員、③仏跡巡礼、④インド政府等の招待等に限られており、バッグパッカーのような形態で若者がインドに渡るようになったのは、藤原新也以降と見てよいだろう。私にとって空白期の40年間にインドに渡り業績を残した人々の氏名を、その著書を挙げておくのも意義があることではなかろうか。

荒松雄『インドと交わる』他1952年（渡印年）
中根千枝『未開の顔・文明の顔』1953年
中村元『インド紀行』他1956年
武藤友治『今日のインド』他1957年
上野照夫『インド紀行』1958年
山崎利男『悠久のインド』他1959年
山際素男『不可触民』他1961年
辛島昇『インド入門』他1961年
小西正捷『多様性のインド』他1962年
糸川英夫『第三の道』1965年
宮坂宥勝『インド仏跡の旅』1967年
色川大吉『ユーラシア大陸思索行』1971年
松本栄一『豪華写真集印度』他1971年
渡辺建夫『インド青年群像』他1971年
伊勢崎賢治『インドスラムレポート』等
※ここに抜きだした人の経歴・業績をいちいち挙げるは煩瑣であり、その著作もかなり後年になって刊行されたものが多い。

インドに目覚める

私はいつのころ、インドを自分の目で見たいと思い始めたか？

妹尾河童の『河童が覗いたインド』を手にして、インドの多様性に目覚めたことは間違いないので、この本の刊行された1985年以降と考えれば、現職を去って自由の時間を得た後のことになる。そして、最初のインド行きは1993年2月だから､河童の本が出てから8年近くたっていた。

この間、パスポートの世話になったのは、中国ツァーに一度加わった時だけだった。語学を習得し得なかった私は、一人で海外に出ることなど考えるところでもなかったが、好奇心というのは人並み以上に持っていたかと思うし、そのことは94歳になるいまでも変わりはないようだが。最初の中国行きのカルチャーショックは大きく、その直後から中国関係の本を買い漁ったのは、インド本の収集と同様であった。中国に対する関心はいまも残っているものの、天安門事件のあと急激に熱が冷えてきた。そして、それからの30年間における中国の変容は私の語るところではない。

インドに行くとしても、仮にツァーに参加するにしても一人旅はとても出来ることでない。「誰か一緒にインドに行きませんか！」という呼びかけは機会をみて試みていた。昭和50年代の後半ころ、高度成長の爛熟期を迎える時代と重なるように自分史ブームが徐々に起こってきた。昭和が平成に変わるころ、私たちも「小金井自分史手作り同好会」なる勉強会を始め、20人余がこの会に加わって月2回の例会を開いており、私は編集アドバイザーの真似事などもしていた。その自分史仲間の1人がインド行きに手を挙げてくれたのだった。

インドと出会う日まで

通称「自分史教室」というサークルの一員に私と同年の冬木健幹という彼が居なかったら、私のインド行きは更に遅れていたであろうし、場合によってはインドとの縁が出来なかったかも知れない。よって彼の名をここに記しておきたいが、彼はもうこの世に対応することができなくなってしまった。

さて、パートナーが出来たからといって、「いざインドへ」とはいかない。やはり既成のツァーに便乗という以外にない。ツァーを探して有楽町で開かれた「朝日サンツァーズ」の説明会に初めて参加したものの、同行するだろう人たちの旅馴れた話しぶりに圧倒される有様。ともあれ、この一行に加わってのインド行きの覚悟を決めた途端にトラブルが起こった。それは私の立場でなくインド事情による。当初の出発日は1992年の10月31日かであったと思うが、思わ

ぬ宗教対立がインドに発生し、渡印自粛の勧告が国から出てしまった。

私は聞いたこともない地名だったが、宗教都市アヨーディヤーという地がある。そこにあるイスラムのモスクをヒンドゥ教徒が襲撃する事件がおこり、その騒動はボンベイとかベナレスにも波及する事態となったのでこの措置となった。それはやがて収まったということで、渡航禁止が解かれて晴れてインドに向かったのは、年の明けて2月に入ったころになった。初めてのインド行きは20名の一行となった。

初めてインドの地を踏む

1993年2月4日（木）12時56分成田離陸。珍しいものだから、後々のために移動の全てを記録して残すことを心懸けたが、その後のインド旅もその踏襲となる。21時20分「ベンガル湾を越えてインド大陸に入る。ガンジス河が見える」とメモしている。22時30分ニューデリーのインディラガンジー空港に着くも、ここのインド時間は午後7時とあった。

帰国して記録したものに、次のような文言がある。

「長年待ち続けたインド入国だった。三島由紀夫のことばによれば、人はそれぞれにインドに行くには定められた時期があるという。私は70歳でこの時期が到来したということになるだろうか。初めてデリー空港からインドの道路に車が走り出し、うす暗いインドの大地を見て、やっとインドへ来たという実感をもった。」

「牛糞かも大地煙れる匂う夜は
　　まさしく空港印度を踏める」

これは青森からやってきた一人旅の藤川富久さんが寄越してくれた歌。

見る人に煩瑣かも知れないが、往復の日数もいれて10日間で回った地名を記録しておくのも、インドを考える上で役にたつかも知れない。

★デリー、ベナレス、アグラ、ジャイプール、オーランガバード、エローラ、アジャンタ、ボンベイ（この年はまだムンバイに改名されていなかった）

その行程の感想を以下のように残している。

「デリーの朝のひととき、見るもの皆珍しいインドの人達の動き。ベナレスで最初の冒険としてリキシャで夜の街を回ったこと。ガンガーの日の出のころの沐浴見物。サールナートの静寂。タージ・マハルの優雅なたたずまい。ジャイプールの宮殿ホテルとホテル前庭での結婚式。アンベール城の威容。エローラのカイラーサナーター寺院とアジャンタの石窟群。アジャンタ石窟全景の遠望やデカン高原の大地。ボンベイのマリーンドライブを走り、インド門や沈黙の塔等々。これらはインド旅行で目立った印象だが、何を見てもすべてが驚きであり収獲であった。とにかくどこに行っても、いまインドにいるという実感を旅の間中、持ち続けた。インドにおける子どもの目が生き生きしていたのにも驚きだった。」

ぶっつけ本番のインド

ものごとが終わってからは執拗に追求する私だが、ことを起こすまでの準備というのは至っておろそかな人間である。渡印までにインドの地図上で意識していた地名は、デリー、ボンベイ、カルカッタ、マドラスくらいか。それに珍しく、コモリン岬は記憶に残る地名だった。アグラもベナレスもジャイプールも、全くツァー案内書に見るだけの土地だった。

インドはヒンドゥ教の国とは理解していたが、お釈迦さんの国だから仏教も盛んだろうと思いこんでいた。このことはインドに関心を示さない人達と同様のレベルであった。インドの仏教は鎌倉時代には既に消滅して、いま残されているのは仏跡であるということを旅の後で知るというおそまつさ。

しかし、インドの地をこの足で踏み、この目で見られる範囲を見てきたという一連のことは、私にとっては隔世の出来ごとだった。広い大地と、そこに暮らす人々。古代の遺跡も中世の建造物も現代の町並みも、一緒くたに存在する不思議な世界に私は言葉を失った。あまり使いたくない言葉だが、事実「悠久の」とか「多様性」とかいう語彙でないと表現できないものの存在を肌に感じる旅となった。

そして、とても自分の思考回路では処理しきれないこれらの事象に対して、その解明の一端でも得られるかもと思いついたことがある。それは、私以外の人達はこの得体の知れないインドをどのように感じ見ているだろうか、それを見ることによってインド理解の鏡にしたいとも思った。かくして、私の執拗なインド本探索が始まり、以後20年近く続くことになる。

インド民芸館の延原啓さんとの出会い

すべてあきらめのよいタイプと思う私の性格だが、一面粘液質の部分もあることは、インド本を探すという熱の入れようで明らかになる。インド本の収集の話の前に書き落とすことの出来ないのは、一人のインド狂なる人物との出会いである。この人との接触がなかったら、私のインド熱も発散の場を求めることが出来ず、いつしか萎んでしまったかと思う。その後、多くのインド体験者に出会う機会はあったが、北区上十条に私費で「インド民芸館」を建て、自分のコレクションを公開展示した延原啓さんを超える人は知らない。

延原さんは私より1年先輩の大正10（1921）年の生まれか。小学校の社会科の教師であったと聞くが、生涯に50回もインドに行ったと。その都度持ち帰った厖大な民芸品のコレクションを納め展示するために、自宅敷地に木造2階建ての「インド民芸館」を建てたと。都教員の退職者対象に出している「福利広報」のコーナーで、このインド博物館の記事を見た。最初のインド行きで、身体全体がインドの熱でまだほてっているときだった。

1994年10月に初めて北区のインド民芸館を訪ね、多くの目が開かれる思いだった。延原さんの収集した民芸品は、初めて目にするものがほとんどだったが、インドにぞっこん打ち込んでいる人の話には打たれるものが多く、以後のインドの関わりは延原さんなしには進まなかった。ここで更に一つの発見をする。それは『キターブ』というインド本のリスト集だった。この手づくりの本は「インドの魅力を発掘する会」の編集で、編集責任者は房州に住む今西創一郎という人だった。私がインド民芸館で得たのはその初版で、1983年から編集にかかり初版には660点のインド本が収載されていた（2003年に改定された8版には3255点の記録がある）。

再びのインド　ラジャスタン紀行

求めよ、さらば開かれん。という言葉があるように、日々日常の生活をしながらも、インドについてのアンテナは常に張っていた。その一つとして、『キターブ』に記載されている初期のころのインド本を探すことを自分に課していた。そのために、古本屋を見つけると必ず首をつっこみ、古書市開催の情報を得ると万里の道？を遠しとせず、都内はもちろん横浜までへも出かけた。これらの本は、古本としてのみ存在したからである。

一方、インド情報の多くは先達の延原さんから得ていたが、一緒にインド行きをプラン化しようという話が出て、それが形となったのは1996年11月だった。構想は延原さんが立て、小さな旅行社ジャンボリーツァーズの坂本徹さんが具体化し、私が人を集めることにした。

私にとっての2度目のインド行きは、初回のインド行きから4年近くたった1996年11月にやってきた。『インド民芸館長延原啓先生と行く　ラジャスタン民芸品紀行』という触れ出しで、私の知人で構成した7名の一行となった。ラジャスタンという土地は砂漠に直結する地名と思ったが、写真にあるようなあの砂漠を見る機会はなかった。

★デリー、マトゥラ、アグラ、ファティプル・スィークリー、ジャイプール、ジョドプール、ビカネール、マンダワ、デリーを回る11日間の旅だった。このコースは、その後の南インド行き、4度目の東インドの旅に較べて多彩ではなかったが、インドの何かを知るには十分すぎる経験となった。

私は最初のプランが示されたとき、そのコースに添って自分なりの予備資料を用意したのだったが、それを活用することは全く出来なかった。

ラジャスタンはヒンドゥ王国の繋がりのよう

な地域であるが、隔絶したそれぞれの都市に豪華な城塞があり、いまはその多くが博物館やホテルなどになっていた。ジャイプールのアンベール城、ジョドプールのメヘランガール城、ビカネールのジェナーガル城などは、豪華な王朝絵巻を見る思いだった。日本の城があまりにも素朴で比較のしようがなかった。

遙か先にタージマハルを望むアグラ城、僅か14年しか使用されなくて、いまは遺跡として残るファティプル・スィークリーの城跡も印象に残った。ハベリという言葉はご存じないかも知れないが、カルカッタの豪商達がタール砂漠を越えて西方との交易をするため、その通路にあたるこの地に建てた別荘をいうと聞いた。その壁面のフラスコ画が往時を偲ばせていた。

マトウラィの博物館に残る初期仏像群、ジャイプール郊外サンガネールにある延原さんの知人宅の夕食会招待。ジョドプールの王宮ホテルの豪華さ（泊まったホテルは別）、カルマータテンプルという鼠寺、ビカネールの街中での結婚式場に飛び入り参列、マンダワの市街と深井戸。デリーでのクトゥブミナール・デリー城、オールドデリーの喧噪の街中をリキシャ（人力車）で通り抜けたことも、一つのインド体験となった。

私はこの旅行のあと12ページに亘る細字の行程記録を作り、同行の仲間に届けた。いまここで細部の地名を記録できるのも、その資料を残したことによる。

インドの変貌

インドがそれまでの政策を変更し、国を開放して経済的に外資を受け容れることになったのは1991年ときく。それまでは国内産業の育成という建前で、タクシーなども画一的なアンバサダー一色だった。私が訪れた1993年でも、都市の道路工事にサリーを着た女性労働者が土を入れたザルを頭の上に乗せて運んでいるのを見た。まだＩＴ産業の兆しも見えていなかった。

ところが３度目のインド行きのころは、長年インドに通っていたインド通の延原さんも「インドは変わってきた」と何度か口にするように

インドの主要都市（http://indiaing.zening.info/map/ より）

なった。1970年代からインドに渡り、長い期間滞在し、体験的インド事情を『インドの大道商人』等で紹介した山田和さんも、上記の本の文庫本を出す時、この10年間にインドは様変わりをしたと書いていた。最初にインドに渡ったころは、子どもに「将来何になる？」と聞くと、「親の仕事を継ぐ」といっていた。それがいまでは「プログラマーになる」と答えるようになったと。

とはいっても、一介の旅行者にとっては、その変わりようなど細かに見分けることなどできるわけでもない。別の角度から聞きかじりのことを書くとすれば、インドにはいくつかのジンクスがあるようだ。インドを一度旅した者はその評価が２つに分かれると。再度、三度インドを訪れるようになるタイプと、インドの猥雑さに辟易となり、もうインドは懲り懲りだという類とに分かれると。

もう一つ、インドが自分(人)を呼んでくれるとも。インドに招かれる選ばれた人と、それ以外の人とにも分かれると。これも流布している言い伝えだろう。私はいくつかの本でこの事例を見た覚えがある。そのような神秘さがインドにはある。そして、70歳にして初めてインドに呼び寄せられたと自分なりの解釈を持つようになった。

ドラヴィダ文化の地を走る―3度目のインド―

ラジャスタンの半砂漠地帯を回った1996年から3年の時間を経て、3度目のインド行きのチャンスが巡ってきた。この時のメンバーは、小金井市の公民館東分館の利用者を中心にその殆どが小金井在住者であった。その前に延原さんを紹介したこともあって、小金井市の東分館主催でインドの仏跡巡礼のツァーを組んだことがあった。何らかの事情で私は参加しなかったが、その後の南インドの旅はこれらの人たちが多く加わった。

「延原啓先生と行く　南インドの遺跡とドラヴィダ文化の旅」という触れ出しで、1999年12月延べ13日間の旅となった。同行は延原さんの近くの石賀美雪さんを加えて14名。

★ムンバイ、チェンナイ、カンチープラム、マハーバリプラム、ポンデシェリー、チタンプラム・、タンジャプール、チェルチラパッリ、マドゥライ、ラーメシュワラム、マドゥライ、カニヤクマリ、トリヴバンドラム、(バックウォーター)、アレッピー、コーチン、ムンバイ。

アーリャとドラヴィダというのは、対比して考えられることのように思っていた。前2回のインド旅は北インド、主としてアーリァ系の文化を見てきたこともあって、ドラヴィダ文化は意識の外だった。今回の南インドの旅で改めて目を開かせるものがあり、この旅に加わったことで、インドの文化の本質を見る思いもあった。

チェンナイ（マドラス）において私が先ず印象に残ったのは、マリンビーチと呼ばれる途方もなく拡がる砂浜で、見慣れた日本の砂丘にくらべその広大な拡がりに目を見張った。南インドは驚きの連続だったが、それを書きあげるスペースはないのでメモ書きで残したい。

- チェンナイ郊外のカンチープラム、マハーバリプラムの寺院群
- マハーバリプラムのクリシュナのバターボール
- タンジャプールのプリハディシュワラ寺院
- マドウライのミーナークシ・スンダシュワラ寺院
- ラーメシュワラムのラーマナータスワミー寺院と沐浴
- コモリン岬のサンセット
- カニヤクマリの沖のヴェーカーナンダロック
- ケーララ州のバックウォーター
- コーチンのチャイニーズ・フィッシュング・ネット
- ムンバイのタージマハルホテルとエレファン島

カタカナ書き地名、寺院名はうろ覚えなので、きちんと表記できたかおぼつかない。インドに関係のうすい人には、ただ煩瑣な固有名詞の羅列に過ぎないがお赦しを得たい。

南インドの思いのいくつか

前記南インドの地名はほとんどが初めて聞くもので、とても覚えきれるものではない。ただ走り過ぎたにすぎない異国の地だったが、そこに展開する初見聞の風物は私の生涯の旅の中でもことさら印象的な土地であった。

この2年後の東インドの旅を加えても、南インドは特別の地であった。その一つはドラヴィダ文化といわれる石づくりの建造物で、それらのほとんどはヒンドゥの寺院であった。歴史的遺物になったものもあったが、その大部分はいま生きている人たちとの関わりの中に存在していた。マドゥライのミーナークシ寺院などはその最たるものだった。スリランカに近いラーメシュワラム島に向かって伸びているのは橋だか砂洲だかわからないが、道路と鉄道がこの伝説の島につながり、この海岸で初めてインド洋に身体を清めた。その島にある石造りの宏大な寺院には21個だかの井戸があり、求めれば沐浴できるとあったが、その冒険をしておけばよかったと後で後悔した。

インド最南端のコモリン岬は是非とも一度立ちたいところだった。アラビア海とベンガル湾とインド洋が集まり、そして分かれるところである。そこへは夕陽の沈む時間に達したが、沖合は雲がかっていた。

インドの自然の雄大さに驚いた一つは、最南端カニヤクマリの目と鼻の先の海中に一つの島があって、通いの舟が人々を渡していたことである。そこには神殿（寺院）が建てられ、そこ

へ詣でる人たちで混雑していた。そこはインドの宗教家だか哲学者のヴェーカーナンダが修行した地として、島の名がついたという。そして、驚くことに何百人も上陸できるこの島が一枚岩の岩礁ということだった。

思いに残る印象は限りなくあるが、いま一つだけあげるなら、バックウォーターといわれる水郷地帯である。アラビア海にほど近いケララ州の内陸の船着き場から船に乗った。この先何が展開するか私は予備知識が何もなかった。船は川だか運河だか尽きることのない水路をかなりの時間かけて走ったが、岸辺の向こうは水田が拡がっていた。後でこれが有名なバックウォーターということを知った。後日、民放で緒形拳が主人公の『印度漂流』という番組を見たが、それにはラーメシュワラムの沐浴も、このバックウォーターでの生活も映っていて懐かしい思いで見ることが出来た。

インド本探索

「開運　お宝何でも鑑定団」という番組がかれこれ20年くらいは続いているので、ご覧になった方は多いと思う。番組に出品するのは1点でも、その奥に何百点、何千点というコレクションが隠れていることを垣間見る。私には骨董趣味はないが、何かを集めたいという習癖はいまも残っているようだ。ひと頃は出版物のカタログを集めたことがあった。出版不況の時代がきて、全集・叢書の出版が停滞してから私の役割も終わった。

それに代わるものとして「インド本」を集めるハメになった。それは1993年に初めてインドの地を回り、予備知識の乏しかった私はただただ驚愕するだけで、インドについて正確な評価などもまともに出来ることではなかった。旅から帰って、あれは何だったかを確認できないまま、私以外の人はインドをどのように見ているかが気になってきた。そして、インドについて書かれた本を探す旅が始まった。それぞれの分野から10冊も求めればアウトラインは掴めるだろうが、それでは飽きたらず、街にでれば古本屋（インド本の大多数は古本として流通している）を覗き、古書市の情報を得ればかなり遠くまでも出かけることを厭わなかった。

求めてきたインド本はワープロ上に記載欄を作り、求めたその日に記録することにしたので、『インド世界とインド本世界（インドへ行った人々の記録）』がある区切りをもつ2006年までに1017冊の一覧が記録として残った。

インドの未知なることを深く研究するより、インド本を探すことが目的になったことも隠さないほうがよいだろう。珍しい記録を残している。1998（平成10）年の年間記録の「インド本探索」の古書市の記録である。

01/14 小田急古書市
02/03 高田馬場古書感謝市
03/11 彩の国古本まつり
04/21 中野サンプラザ古本市
06/03 高田馬場古書感謝市
06/18 彩の国古本まつり
08/03 京王古本市
08/05 高田馬場古書感謝市
08/12 小田急古書市
08/13 伊勢丹大古本市
08/29 東横古書市
09/09 彩の国古本まつり
10/02 早稲田青空古本市
11/08 彩の国古本まつり
12/03 高田馬場古書感謝市
12/14 伊勢丹大古本市

※この記録はたまたま残していたから記載できるが、この前後は毎年この程度の古本市に足を運び、その何倍かは街中の古本屋を覗いたものだった。

このころ競うようにして開かれたデパートの古本市はいつしか沈静化し、いまは京王デパートが年末に開いているだけである。現在、デパートの何倍かの規模で開催されるようになった古本市は、所沢の「彩の国古本まつり」で年に4回定期的に開かれ、私は数年前までは欠かさず通い、私を待ってくれているインド本と対面するのを楽しみとしていた。

シャンチニケータン　東インドの民芸を求めての旅

シャンチニケータンという地名は知る人ぞ知る、カルカッタのある西ベンガル州の田舎の町である。私はタゴールが作った大学の所在地として理解する前に、この地が印象づけられたのは、タゴール暎子の『嫁してインドに生きる』という著作による。その後いろいろな関わりで、この地と深い繋がりのある人を何人も知ることになった。

そのシャンチニケータンにも回るというツァーが延原さんによって企画され、私は例によって参加者を募った。旅は「延原啓先生と行く　デリーのクラフトメラと西ベンガル・オリッサ州の民芸の村を訪ねる旅」というのが触れ出しであった。期日は前回の南インドの旅の後、1年と少したった2001年2月。足かけ13日間の旅で世話役の坂本さんを加えて10名の一行。

★デリー、カルカッタ、シャンチニケータン、ビハール州マルティ村、ビシュヌプール、カルカッタ、ブバネシュワル、コナーラク、プリー、ブバネシュワル、デリーの行程。

今回の旅の目玉は初めての東インドの各地を回ることと、旅の目的が民芸品の製作現場を訪ねようという主旨だった。延原さんの知人で現地人のレイさんがスケジュールを立て、民芸品の村の訪問のほか、夜間は毎夜のようにインド特有のダンスを見物する機会を得たのだった。たとえばビシュヌプールのチョウダンスなどは、この機会でないと見ることは先ずない。

デリーに着いた翌日と翌々日の2日間は、デリー郊外のスラジクンド公園で開かれる「クラフトメラ」を見物する日程になっていた。それは野外における民芸品の大バザールであった。ここで求めたラジャスタンの壁かけは、ずっと我が家の居間にかかっている。

4日目。3時起きをして、国内線でカルカッタに向かう。とにかくインドのインドたることを象徴する街カルカッタの地が踏めるとあらばと、多くの期待をもってこの地に向かった。フライトの時間は1時間30分。8時過ぎにはもうカルカッタ空港に着いた。茫洋、混沌と言われるカルカッタの街から、空港はかなり離れたところにあった。

後に昔の名前コルカタに名称を変えたが、私にはカルカッタについての予備知識はかなりあった。さきにあげた『嫁してインドに生きる』にしても、『歓喜の街カルカッタ』にしても、タゴールや岡倉天心にしても、またマザー・テレサの活動にしても、みなカルカッタが舞台で、デリーやボンベイではない。

ここまで書き進み思い出したことがある。最初のインド行きの翌年の1994年9月、私は幻とも言える1本の映画を観た。それは『ガンガー　俵万智イン・カルカッタ』というドキュメンタリーであった。大森キネカという小さな上映館だったが、そのことでなおカルカッタの印象を深めることになった。映画『ガンガー』はその後各地に上映されるでもなく、またテレビに放映されることもなく、静かに眠っている感じだが、私の気持ちの中にはいまなお生きている。それは後日、俵万智が「ある日、カルカッタ　―人生の原点を見つめるインド紀行―」という文章で、このときのロケの経緯を詳しく述べていることにもよるのだが…。

『サラダ記念日』で爆発的な登場をして何年もたたないこの日、私は彼女のＰＲ資料のコレクションを見せて、この「時の人」と二、三話をした。彼女は、私のコレクションに日付けとサインをしてくれた。その後この人の紆余曲折は、外から聞こえるのを耳にするだけである。カルカッタを舞台にした頃20代だった彼女は、いま石垣島で子育てをしていると。

旅の話に戻す。カルカッタでは、日程上多くの事象を見ることが出来ず、花市場とか泥人形を造る街を訪ねたのがせめてもの収獲だった。『歓喜の街カルカッタ』のテーマとなった人がひくリキシャ（人力車）はもう無くなったと聞いていたが、まだそれも残っているのを見た。

翌日はバスを仕立ててシャンチニケータンに向かう。8時にカルカッタを出て、シャンチニケータンで牧野財士先生の出迎えを受けたのは2時だった。牧野先生は在印40年というキャリアがあり、シャンチニケータンにある国立大学

（通称タゴール大学）の日本語の教授と聞いた。マニプリダンスを専攻している一人娘のセツさんは、後日オリッサの旅にも同行してくれた。

民芸品を求めて私たちが回った各地は、西ベンガル州と隣のビハール州の農村地帯で、どこにも赤い大地が拡がっていた。豊かさを感じることはなかったが、人間が生きる素朴さというものを強く感じる旅となった。

オリッサ州のヒンドゥの寺院

当初、カルカッタから列車でオリッサ州に入る予定だったが、急遽変更して空路となる。フライト時間は1時間。州都ブバネシュワルには7時ころ到着。この周辺にはかつては何千という寺院があったと聞くが、イスラムの侵攻で衰退したという。それでもかなりのヒンドゥ寺院が残り、それは遺跡に近い寺院と現在の信仰対象の寺院とに分かれていることを知った。

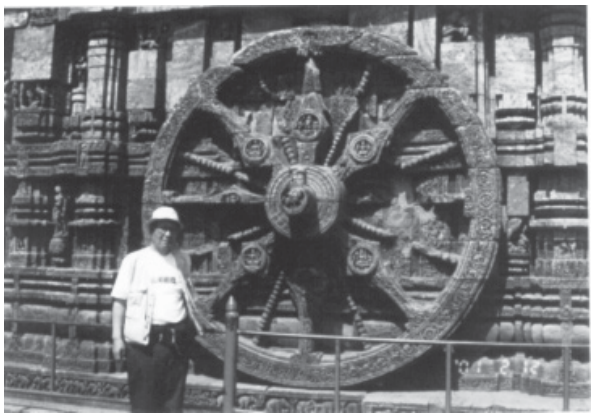
オリッサで有名なのは太陽寺院といわれるスーリャ寺院のあるコナーラクと、ジャガンナート寺院のあるプリーである。石の車輪で有名なコナーラクの寺は、いまは観光の遺跡となり、プリーの寺は盛大に現世利益の寺院となって人々の生活と密着しているようだ。ただ多くのヒンドゥ寺院と同様、この信仰の寺にはヒンドゥ教徒以外は立ち入ることが出来ないと。ジャンガナート寺院の祭りのすさまじさはテレビでも視ていた。それはとうてい日本の祭りの比ではない。

海外旅行の経験の乏しい私だが、インド本を読んでいる中で、親しく思える地名がいくつかあった。その一つがプリーである。ここは先にあげたヒンドゥの寺院の存在とヒッピーの休息地の一つだと。いそがしい旅人にはヒッピーも寺院にも直接触れることなど出来なかったが、それでもここで求めたジャガン神と兄のバララーマ神、妹のスバドラー神の素朴な面が我が家の居間のなげしにあって、私の日々の生活を見下ろしてくれている。

インドに関わる記録のあれこれ

インドの旅に限ったことはないが、何かにつけて記録を残す習慣は、いつのころからか私についてしまった。ワープロの時代は比較的簡単に文章が活字化されたので、15～20ページ程度の手作りの冊子を100冊くらいは作ったろうか。いずれも原稿料の対価となるような内容ではなかったが。

インド旅の場合も同様で、かれこれ30種くらいの資料集を編んだ。なかでも自分で満足し



上：コナーラク（オリッサ州）の太陽寺院の壁。
中：ビハール州のミティラの絵を見る。
下：ビハール州テラコッタ寺院の村で子どもたちと。

ているのは1996年から記録を始めて、2006年でキリをつけたインド本目録『インドへ行った人々』で、92ページの冊子に1017冊の詳細目録が残った。これを残していたので、後日インド本を委託する際に大いに役立った。目録を繰ってみると、どの本をどの古書市で求めたかがわかり、その時の状況を昨日のことのように思い浮かべることが出来るのである。

4度にわたるインド旅も、その都度旅のあと時間をかけてその行程を詳細な記録に残した。最後の「西ベンガル州とオリッサ州の旅」の場合は24ページの冊子として同行者に配ったものだが、2月15日に旅を終えて記録集が完了したのは5月に入っていた。しかし、この資料が残ったことで、15年の時間を経過しても往時を眼前に想起することが出来るというものである。この記録を見て少し滑稽に感じるのは、移動についての詳細な時刻の記録を残していることである。万事おおまかなインドの時間の流れのなかに、分単位の記録が何の意味をもつかとも言えるが、ちまちました生活を過ごす日本人の私にはこの移動時間は生活感覚の上で必要欠くべからざるものだったようだ。しかし、あのように感激したインド旅の感想文集の少ないのは、日程表の中にその思いをこめたが故かも知れない。

もう一つ、いまでは到底出来そうもない記録が残っている。それは1993年の初インド行きの後、インド本収集に熱をあげたことを書いたもので、3年後の1996年にまとめている。そのタイトルは『いつのころ誰がインドへ行ったか』という率直単純なものである。この年までに求めた250冊のインド本を点検して、誰がいつどのような目的でインドに行き、その記録を残したかを時代ごとに分かるようにした表である。

戦前のインドに足をいれた人については、その後に求めた本も含めて10人くらいの記録が私の手許に残ったが、戦後渡印した先駆者は東大の荒松雄氏であった。ベナレス大学の留学生として1952年に渡り、さらにデリーでの2年間の生活があり、インドを伝えるには格段の功績のあった人であった。その後、時代を区切って1996年まで90人くらいのインド経歴が残っている。

このほか、後日ささやかな活動となる「インドに親しむひとときの会」のためにいくつものインド関係資料を作ったのだった。

インドに親しむひとときの会

1971（昭和46）年に始まった小金井史談会に入会したのは1992年であった。この会の主たる活動は月毎の史跡の見学会だったが、年に1回、個人の研究発表の機会もあった。2001年に私の番になり、断って「インドに親しむひとときを」というタイトルで2時間くらいインド行きの話をした。このころ4度目の旅を終えて、インドに熱中しているころだった。話の内容はきちんと覚えていないが、話題提供した自分が一番物足りないものを感じたのだった。

そのあと、いま少しインドのことを伝えたいという気持ちが強まり、「インドに親しむひとときの会」を企画して参加者を募ることにした。小金井史談会の会員を中心に30名ほどの同調者があって、2001年9月17日に第1回の会合を東展示場で開いたが、メンバーで一度でもインドの土を踏んだ人は極くごく限られていた。

記録の中に「―資料の用意と問題提起は私の方で行い、時期が熟してくればしかるべき有識者（インド体験者）の話を聞くようにしたい―」と書き残している。この頃はまだ80歳前だったのでいくらかのエネルギーは残っており、隔月の会合には事前資料なども精力的に作ったものだった。しかし、私のインド体験など全く表面的なもので、早いうちに多くの先駆者の援助を受けるようになるが、私のアンテナにかかる人は限られていた。この会でインドの体験事情を伝えてもらった人の名を記録に残しておきたい。前記、インド民芸館の延原啓さん始め、坂本徹、伊藤顕允、鹿子木謙吉、木俣美樹男、分部庸子、岩本光司、川浪富士夫の皆さんなどにそれぞれのインド体験を披露していただいた。

いずれにしても薄謝も出せない集まりであったが、インドについての思いの深さで我々を啓蒙してもらった。この会は16年たったいまも

隔月で続いているが、「インド」を媒体とするといっても親睦の会の傾向が強くなっていることは、時の趨勢として素直に受け容れるべきだと考えるようになった。

インド本の落ち着き先

世に問うコレクターの蒐集品に較べるなら、私がちまちま集めたインド関係本（インド本）など、それほど価値のあるものと自負する気持ちなどさらさらない。ただ、この程度の本でも一端散逸したら再度集めることは至難なことと思われるので、これを一括して受け容れてもらう所があれば委託したいと常々考えていて、折を見ては受け容れ先の打診をしていたところであった。

数年前、東京学芸大学の図書館へとの斡旋もあり、全冊のリストを作ってもらうところまでいったが、諸般の事情で受け容れ不可となり振り出しに戻ることになった。そんなところ、木俣美樹男先生の「植物と人々の博物館」から引き取ってもよいとの申し出を受け、それを有難くお受けすることにした。

2013 年 3 月、その大部分を送り出すとき、せめても私のもとにひとときでも縁のあった証として【インドに親しむひとときの会　小金井】のスタンプを押して送り出した。これらのインド本は私の手許を離れたのだから、この先のことは新しい管理者に任せることは当然なことだが、これらの本がそれぞれにこの世に出たという使命がこれら後生かされることを願うのみである。

西川至氏の略歴

愛媛県東宇和郡（現西予市）にて、大正 11 年 7 月生まれ。昭和 17 年、愛媛県立青年学校教員養成所入所、昭和 20 年 5 月 陸軍重砲兵部隊二等兵、敗戦除隊後、同年 9 月に愛媛青年師範学校卒業、10 月に愛媛県高山青年学校教諭、昭和 28 年 東京都東村山化成小学校教諭などを経て、昭和 58 年 府中市立四谷小学校長で退職。
以後、育てる会編集委員など歴任、また、「書肆にしかわ」として自分史の編集アドバイザーを務めた。平成 13 年からインドに親しむひとときの会主宰。

里山資源の活用に向けた伝統的・科学的知恵体系の変化と展望

西村 俊（北陸先端科学技術大学院大学 先端科学技術研究科 助教）

Future Innovation Effort in Traditional Acquirements and Scientific Communication Approaches for Sustainable Development with Natural Capital

Shun Nishimura, Graduate School of Advanced Science and Technology, Japan Advanced Institute of Science and Technology

はじめに

自然から得られる資源を、薪や炭、繊維（麻、綿、絹など）、染料（草木、藍など）、香料などへ加工し、生活や産業の基幹資源として利活用した生活が古くから営まれてきた。その後、産業革命、海外との貿易競争、あるいは自然災害による生活再建の道のりの過程の中で、それまでの第１～２次産業を主体とした生活・産業の風景は、石油化学製品を主軸とした生活・産業へと移り変わり、現在では第３次以上の産業（第７次産業化とまで言われ始めている）を中心とした多様で、複合的かつ複雑な産業構造を基盤とする生活が営まれている。その変化に伴い、里山で生業として伝統的な知恵を鍛錬しながら天然資源を利活用してきた生活文化も徐々に遠い存在となり、特に里山資源を有する中山間部・農山漁村の生活文化圏の維持は、共同体としての体力の衰えと共に、あと10年！あと10年！と警鐘されながら年々難しさが増している状況にある[1-4]。

一方、かつての多様な天然資源を生かした基幹産業は徐々に縮小を余儀なくされ、これまでの大衆的な流通網からは離れたものも多いが、ある一定数の個人をターゲットとした高級品・贈呈品（例えば、備長炭、オーガニックコットン、民芸織物、藍染め作品等）として、ブランド力の更なる強化あるいは新しいアイデア・革新さを付与した製品へと価値を高め、新たな販路を築く動きも見られるようになってきている（ジャパンブルー〈藍〉の商品化、水引き工芸を使った新しい装飾品の創成など）。さらに、中山間地域では、古代から受け継がれている天然資源を生かした生業や生活スタイルから培われる世界観の一端を学ぶことで、時代を超えて継承されてきた知恵体系の意義とそれを活かした新しい生活様式の形成を模索する動き（情操教育の場）も広がりを見せている。

また近年では、化石資源の大量消費に伴う地球温暖化・環境負荷の拡大への懸念から、持続的な生産が可能な天然物由来資源（バイオマス）を化学変換することにより、化成品やエネルギーを生産するバイオリファイナリー技術の研究開拓が注目されている。里山に蓄積された天然資源を基盤とした次世代の産業構造への展開を指向する新たな変革の一つとして、意義深い流れである。

ここでは、里山資源の活用に関する伝統的・科学的知恵体系から紡がれる新たな取り組みについて、その動向と今後の展望に関して話題提供を行いたい。

１．バイオマス資源の活用を目指した科学技術開発

・バイオマス資源の化学変換プロセスの検討

石油由来のケミカル・高品位燃料供給プロセスからバイオマス資源を基盤とした供給プロセスへ代替することを目的に、バイオマス資源の様々な化学変換による利活用が盛んに検討されている。化学変換プロセス体系の一部を図１に示す。特に、木質バイオマスの主成分となるセルロース、ヘミセルロース、リグニンの3成分の化学変換技術の開拓は、カーボンニュートラルの概念[5]にも基づくことから、世界的に高まりを見せている研究分野である。各種有機酸の他、両末端に官能基を有するジオールやジカルボン酸へ多段階変換することで、既存のポリマー・化成品資源の

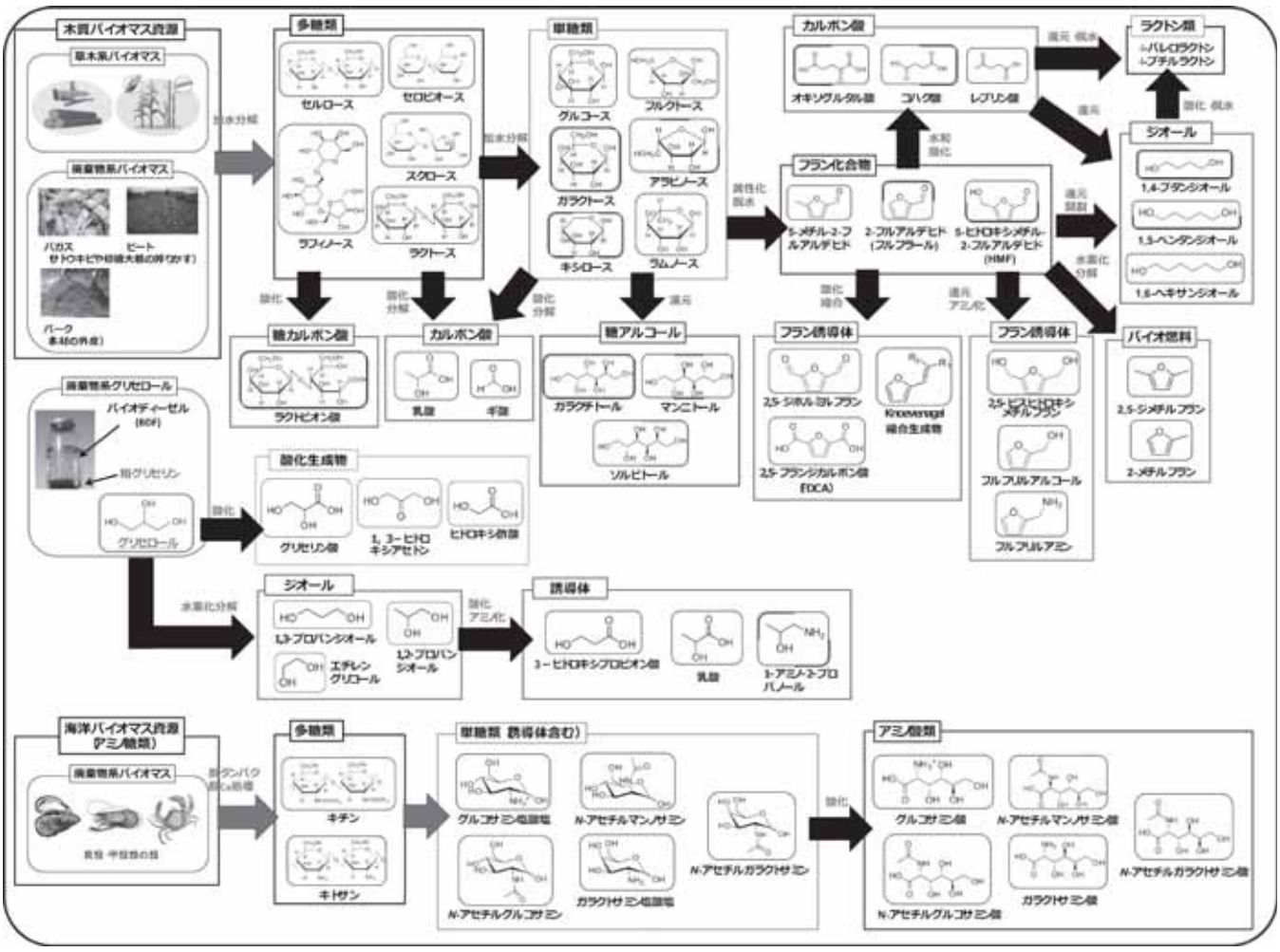


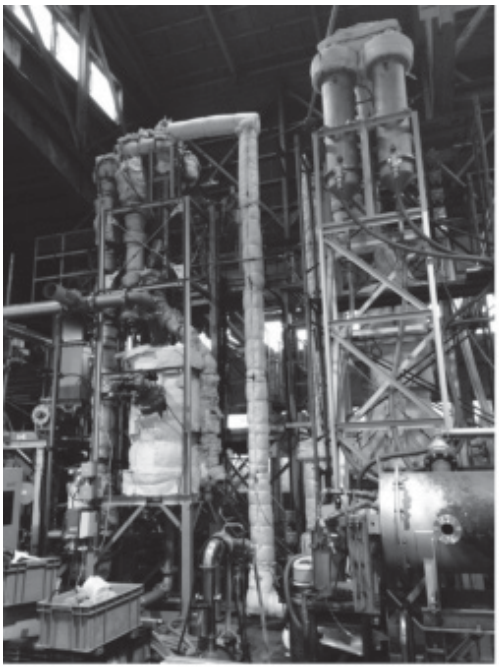
図1　バイオマス資源の化学変換プロセス体系の一例

代替としての役割が期待されている。

例えば、5-ヒドロキシメチル-2-フルアルデヒド（HMF）を酸化して得られる2,5-フランジカルボン酸（FDCA）は、従来法のポリエチレンテレフタレート（PET）の原材料の一つであるテレフタル酸の代替となるバイオマス由来資源として期待されている。また、2-フルアルデヒド（フルフラール）を多段階反応させ、石油資源から合成されているテレフタル酸自身をバイオマス由来資源から合成するプロセスの開拓も報告されている。化成品材料以外にも、フラン化合物を水素化分解してジェット燃料代替となる2,5-ジメチルフラン等のバイオ燃料を合成するアプローチ、アルドール縮合を経た水素化脱酸素反応によりアルカン類を合成するプロセスなども検討されている。

グリセロールは、石鹸や脂肪酸製造プロセスの他、近年では家庭用の食品廃油などからバイオディーゼル燃料（BDF）を生成するプロセスの副産物として生じる廃棄物多価アルコールである。例えば、BDF製造プロセスでは全体のおよそ10wt%もの量が副生するため、その用途開拓は大きな研究課題の一つである。水素化、酸化、エステル化、カーボネート化等による変換プロセスが研究されており、例えば、酸化生成物の一つであるジオール（エチレングリコール、プロパンジオール）を資源としたPET合成やプラスチック材料の開拓、乳酸へ転換し生分解性ポリマー（ポリ乳酸）の材料とするプロセスなどが提案されている。

甲殻類（カキ・エビ・カニ）などに含まれるキチン・キトサンは、アミンを骨格中に含む稀なバイオマス由来資源である。食糧との競合が起りにくい非可食部が主な原料であり、新しい



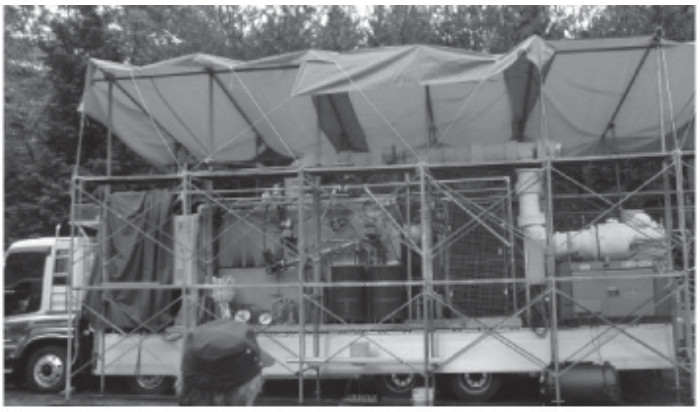


図２　バイオオイル製造プラントの開発設備：
処理能力 20kg/h の定置型流動相ベンチスケール装置（左）
処理能力 40kg/h のトラック積載可搬式 Auger 型装置（右）

海洋資源として注目されている。近年、キチンの加水分解生成物であるグルコサミンは健康食品としてのニーズも高く、その誘導体の酸化生成物は医薬品原料となる各種アミノ酸の供給源となることから、今後の更なる開拓が期待されるバイオマス資源である。

天然のバイオマスは混合成分であることから、その単離と副反応の抑制が工業化の困難さの一つであるが、最近ではセルロース、ヘミセルロース、リグニンの３成分が混合した原料から、有用な糖アルコールや芳香族化合物を抽出できる新しいプロセス研究の報告もあり[6]、触媒開発による更なるプロセスの高効率化・簡便化に向けた技術開発が進められている[7]。また、上述の原料以外にも、草本系のエリアンサス、ススキ、サトウキビ類、ソルガム等の資源活用を目指した栽培技術・新品種による収量の拡大を模索する動きも、農林分野を中心に進められている。

・マテリアル・熱源利用に向けた工業プロセスの開発

既存の石油由来資源との競争力を担保する上では、バイオマス資源でしか得られない高付加化価値の材料創生も重要な研究テーマの一つであり、セルロース等をナノファイバー状に加工する技術[8]や、木材等をバイオオイルへ変換する急速熱分解技術（図２）[9,10]の開拓も行われている。新しい材料研究では革新的な用途の開拓が今後の技術開発を支える重要な要素である。

木材を破砕し、建築ボード・肥料・燃料供給源等に利用可能な木材チップへと成形加工して販売する工業プロセスは、様々な原木（建築資材として利用できない曲りや傷がある木材）や古材、オガ等を利用可能であり[11]、木材資源の利用効率の拡大、リサイクル率の向上の観点からも興味深い技術である。しかし、木材チップ工場数は 1970 年代の 7,500 ～ 8,000 工場をピークに年々減少傾向にあり、2014 年では国内に 1,477 工場余となっている状況にある[12]。

昨今では、地域の低質な未利用材（間伐材や林地残材など）を大規模なバイオマス発電施設へ集積して、電力供給源として用いる火力発電プラントの稼働も盛んに行われている。例えば、北陸地域では、福井県内全域の森林組合の未利用材を集積し、出力 7,000kW/h（一般家庭の 1 万 4,000 世帯分の年間使用量相当を発電できる）の設備が稼働開始している（大野市、2016 年 4 月～、1 年間の稼働に必要な木材チップは約 7 万トン余りと試算されている）。

さらに、全国では、2012 年以降に稼働･建設･計画されている主な木質バイオマス発電事業所だけでも 75 事業所にも上る[13]。再生可能エネルギーの固定価格買取制度（FIT）の開始（2012 年 7 月～）により、売電収入を目的に各地で木

質バイオマス発電によるFIT発電施設の整備が進められていることが、建設を後押ししている要因の一つと言われている。しかし、その結果、FIT対応の認可バイオマス発電所の稼働拡大に伴う今後の木質バイオマス原料量の不足および調達コストの増加が危惧されている。また、これ以上の拡大による安定なベース電源との供給バランス変動の懸念もあり、FIT制度の見直しの議論が始まっている。

バイオマス資源の工業プロセスでの利用は、採算性がまかなえるだけの生産量（処理量）と持続的な稼働に見合う原料の安定供給網の確保が重要な要素である。したがって、バイオマス資源不足は深刻な課題の一つであり、地域内の限られたバイオマス資源をどのように効率よく生産・集積・分配し、最大限のポテンシャルを引き出せるかが今後の動向を大きく左右する要素である。

現在の原料ターゲットとなっている未利用の林地残材や間伐材等は、搬出・集積には多くのコストが必要であり、採算性に見合ったアクセスのよい林地残材のみを利用するだけではその規模に限界があると言われている。資源確保の観点からは、ヤシ殻や外国産材等の輸入バイオマスを発電燃料へ利用する取り組みもあるが、輸送にかかる石油資源の消費（CO_2排出量の増加）や地域のバイオマス資源の有効利用といったコンセプトからの逸脱が、議論となっている。

日本の木材自給率は55年間で約90%から30%にまで減少しており[14]、国内林業の低迷による里山の手入れ不足も深刻な状況にある[15]。地域の資源の需給バランスと生産品ニーズとのバランスを担保でき、“身近な”バイオマス資源を効率よく工業利用できるコンパクトな仕組みが、里山のリノベーションと本来の持続可能性を再循環させる上でも強く切望されている。

2．身近な里山バイオマスと伝統的な知恵を活かした新たな生業のかたち

これまでに中山間地域の活性化に向けた栽培植物の利活用や、地域住人・非地域住人の連携による新しい地域社会形成の展望について動向をまとめてきた[15-17]。

最近、白山ろく地域では、i）里山や狩猟に興味・関心がある仲間が集い、里山を知り、学び、考え、ときには創ることを目指す「白山ヤマダチ会」（2014年12月～）（図3）、ii）白峰そして白山麓の間伐材などの里山資源の有効利用から、森林の手入れの促進や地域の生業創出を目指し、薪割り・炭焼き体験などのイベントの他、薪・炭の販売等を実施する「白山しらみね薪の会」（2013年3月～）、iii）石川県内の女性ハンター同士の交流を深め、女性の視点に立って狩猟文化を活用し、その理解・普及を目指す「狩女の会」（2016年3月～）などの小規模グループの立ち上げや、iv）白山ろくで地域活性化に取り組んでいる個人・団体の情報交換の機会を設けることで、新しい事業のアイデアや協働の可能性の機会（白山ろくでの情報プラットフォーム）創出を目指し、白山ろくを中心に活動する個人・グループの集いの場となる「白山ろく里山ミーティング」（2016年2月～）（図4）を開催するなど、新たな活動の環が築かれつつある。

後半は、里山に集う人々の関心と今後の活動展開などから、里山の持続可能性の再循環への歩みについて考えてみたい。

・ジビエ料理の流通網の整備とブランド化

日本で主に市場で取引されている食肉の消費量（部分肉ベースの推定出回り量）は、牛肉で80～85万トン（うち輸入量は45～50万トン）、豚肉で164～170万トン（うち輸入量は75～80万トン）、鶏肉200～220万トン（うち輸入量は40～50万トン）である。主な輸入取引国は、牛肉は豪州と米国、豚肉は米国、カナダ、デンマーク、鶏肉はほとんどがブラジルとなっている（それぞれ加工後に輸出取引も行っている）[24]。もう少し身近な数字では、例えば東京都の芝浦屠場（とじょう）（東京都の中央卸売市場で唯一の食肉を扱う市場であり、全国一の規模）だけでも、平均して1日に牛600頭、豚1200頭が取り扱われている[25]。

一方、熊、猪、シカ、サル、野鳥類等の鳥獣肉については、江戸時代には山クジラ屋として

図３　第３回（左）および第５回（右）の白山ヤマダチ会の活動風景 [18,19]

図４　第１回の白山ろく里山ミーテイングの様子 [20-23]

猪料理が [25]、またかつての山村では熊肉や猪肉が重要なタンパク源として重宝されていたが、今ではあまり食べられなくなっている。例えば、白山ろくの中宮では昭和50年代に、10～15人で巻狩による熊猟が行われており、毛皮、肉、内臓（熊の胆）などが集落で重宝されていた。内臓を神々へ捧げる儀式（膵臓は西に向かって東へ〈背面〉へ放り、小腸は木の枝に掛けるなど）や肉の保存食（みそ漬け）もあり、生活文化圏の一部としての熊猟があった [26]。

現在、捕獲されたほとんどの鳥獣肉は、個人消費ないしは自治体により焼却処分されている状況にあり、流通量はわずかである。また、全国的に狩猟免許所持者数の減少と高齢化が進む一方で、鳥獣の捕獲数は年々増加しており [27]、里山生活での農作物被害や都市近郊での出没報道の増加からも、里山圏の環境変化が刻一刻と進行している様子を窺い知ることができる。

石川県では、このような里山環境における厄介者となってきている鳥獣の増加を“里山の恵み”として捉え、地域資源として活用する取り組みが始まっている。「いしかわジビエ」研究会の発足（2016年5月）を機に、県内で唯一の認定獣肉解体処理施設であった白山ふもと会（2011年11月～）と、次いで開設した羽咋市（2015年10月～）を中心に、県内産の鳥獣肉（主に猪）の販売や商品開発を本格化させている。おいしいジビエを目指した試食会や試作料理コンテスト、ジビエ料理教室等も準備段階から開催されており、ジビエによる地域資源の利活用を一つの重点課題と位置づけている。今後も、認定獣肉解体処理施設の新設を含め、精力的な活動が見込まれる。

県内で早くから鳥獣肉の利活用に取り組んでいる白山ふもと会では、季節や個体によりばらつきがある野生の恵みの特性を考慮し、搬入さ

図5　白山ふもと会の施設でのイノシシの解体ワークショップを開催（白山ヤマダチ会主催、2016/2/21）。

図6　新宿駅構内のBECK'S COFFEEの看板（2015年3月撮影）。[37]

れる猪・シカの販売ランク付けと解体法の厳格化および熟成による鳥獣肉の品質確保による白山ブランドの強化（ボタン鍋プロジェクト構想、白山百善などとの連携による地域の魅力創出[16,17]）をめざし、着実な普及活動を続けている（図5）。また羽咋市では、能登産のイノシシ肉を“のとしし”と命名し、イラストを作成するとともに、差別化によるブランド力の構築に動き始めている。

昨今はジビエブームと言われており、おおち山くじら（猪肉）のブランド化による町おこしと里山保全の事例（島根県美郷町）は、全国的にも有名な成功事例の一つである。また、最近では首都圏の駅構内などで運営されている飲食店でも、信州鹿肉を使ったジビエドッグの販売（図6）に遭遇できるなど、身近に試食できるジビエ商品も出ている。移動式解体処理車（NPO日本ジビエ振興協議会）によるジビエの運搬・解体処理の効率化も検討されており、2016年7月頃から運用が始められる見込みである。

家畜肉の需要が高まる中で、工場式畜産法の拡大に対する懸念や、飼育にかかる大量の穀物と水を食糧難・飢餓の国々へ配分した方がいいのではないかという議論[28]も続けられている。里山の荒廃と共に鳥獣被害が深刻化する中で、自然の恵みとしての鳥獣肉の価値を再考し、法令や規制の緩和措置等のサポート体制[29,30]と共に、地域の再形成の一端を担う源へと転換する取り組みへの理解と共感がさらに広がることを期待したい。

・地域振興の人材（マンパワー）確保への歩み

2014（平成26）年分の日本の平均給与は415万円（男性514万円、女性272万円）であり、給与階級別では300～400万円の割合が17.3%と最も多い分布となる[31]。里山資源と人的交流の活用により、都市部よりも生活にかかる資金が安価に抑えられる部分もあるが、過疎高齢化が進む中山間地域への定住人口の増加を目指す上では、安定した300～400万円の所得保障を担える事業主体の整備や行政政策の構築が必要となる。

しかし現実的には、統廃合に伴う行政のスリム化が進められる過程で身近な公共事業や地域の要望に即した行政政策が縮小し、地域共同体として支えられる力も弱まる中で、“強力な個人スキル（豊かな芸術性や多彩さ、免許や資格を活かせる人材）”に委ねる割合が強まっている（徳島県神山町のIT企業誘致策など）。「人は来てほしいが、じゃあ収入を保証できるかというと支えきれない」（山間部）と、「山村地域での生活に興味・意欲が高いが、収入と生活が心配である」（都市部）とのジレンマがある。また、「里山に住んでみたい！」と“訪れる自然”の魅力に魅せられて移住したものの、毎日の“常にそこにある自然”と向き合う限界を感じ、里山を去る事例も多いようである。新しい雇用モデルの創出や地域を知るキッカケの機会として

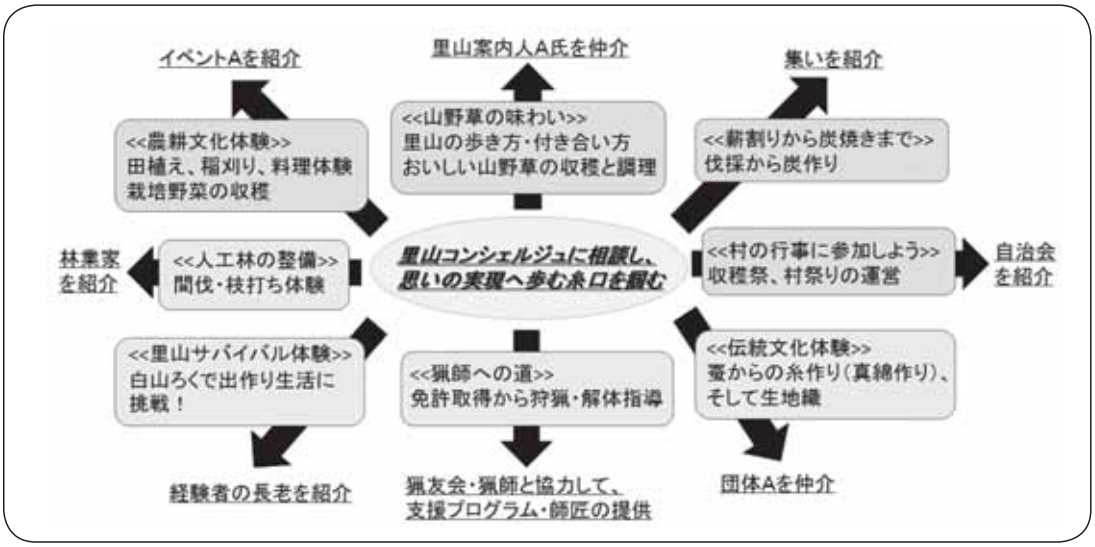


図７　里山コンシェルジュ構想：外へ向けて里山文化体験を様々な形で売る新しい仕組み作り

は、緊急雇用制度や地域おこし協力隊制度の利用が一つの方策ではあるが、有期の雇用助成であるため、その後のフォローアップを課題と感じる自治体も少なくない[23]。

前述の地域ブランドの創出による里山ファンと商品展開力の拡張の道筋は、共同体としての集客力・収入源の可能性を高め、地域の新たな雇用創出の場の開拓へとも繋がる期待から、地域おこしの主軸の一つとなっている。実際に、漁村におけるブランド魚の全国展開（大分県大分市の関サバ、青森県大間町の大間マグロなどの事例）や農産物のネームバリューの確立（北海道夕張市の夕張メロン、石川県のルビーロマンなどの事例）に向けて、多くの自治体が戦略を練って取り組んできた。また、山間部の資源活用による地域活性化策にとっても、大きなインパクトとなってきている（例えば、和歌山県北山村のじゃばら、石川県羽咋市の神子原米）。

特に里山資源の利活用では、大きな物流網に乗せられるほどの人手や資源量がなく、味も画一的にすることが難しいため、不特定多数への商業戦略というよりは特定のファンを創出し高い品質のものを提供する事業モデルは、実現性と持続性の観点からも有望視されている。

第一回里山ミーティング[21]においても、「里山資源に限定感や特別感を付与させることで差別化を図り⇒さらなる未利用資源の価値の創出⇒収入源（雇用機会の創出）・未利用資源の利用の促進と里山環境保全へ」との好循環モデルの議論もあった[32]。資源の質を高めることで、里山を知るための間口作り・行ってみよう！と思わせる動機作りにも繋がる。そのためにも、何を地域資源と捉え、どのように地域のブランド力を構築していくのか[16,17,21]が見せ所である。

里山資源としては、長年その地域で暮らしてきた年長者の知恵も大切な宝である。その地域で根ざした文化、長年培われてきた知恵や世界観から、今の都市生活では学びえない知恵の体系を感じ、時には鍛錬によりその一端を習得する機会にもできる。実際に、日常をより豊かにするための体験として、非日常に触れる機会を身近な里山文化圏へ求める動きも広がりつつある（図３～５などの活動をその一部と捉えることもできる）。里山圏での資源を集約し、ブランド化に向けた戦略を担えるコーディネーター役の需要も高まっている。

消費者（参加・活用者）の目線からは、里山圏での体験をフレキシブルにコーディネートする拠点と人材（以下、里山コンシェルジュと称す）のニーズがあるように感じる。現状、様々な団体（NPO、各集落、観光協会、行政の生涯学習事業など）が里山文化の体験イベントを主催しており、その告知を見た消費者が申し込み、参加を行うのが通常である。この場合、講座（機

能化された疑似体験）にはできないような本物の文化体験をしてみたいというニーズや、別のスケジュール・少人数での開催といった細やかな対応がしにくい。また、個人のニーズに合った自由な選択が求められる時代の中で、現状の様々な趣向を想定してイベントを多様化・多発する状況は、スタッフのイベント疲れや疲労感を増す要因ともなってしまっている。

そこで、従来は実際に居住することで形成される繋がりに基づいて、「それなら、○○さんが詳しいから聞いてごらん」という自己欲求の解決への道筋を立ててきた環境を、里山コンシェルジュ（図7）という窓口により機能化・提供できないかと考えた（ここでは、まるでその場所に疑似居住しているかのように、顔を合わせ人のネットワークを築き、余暇の一部を里山文化で楽しむ非地域住人の新しいライフスタイルの形を想定している）。

まず、その里山で受け入れ可能な体験に関する問い合わせ窓口を集約することで、ブランド力から興味を抱いて訪れた非地域住人（消費者）の自発的な要望の受け皿を明確化できる。さらに、それぞれの趣向に沿った個別プランニングにより、伝承者の保存と継承者の育成、強い里山ファンの創出の好循環にも繋がることが期待できる。特にコアメンバー向けの体験は、全国的にみても受け入れ口が少なく、「○○には興味があるが、どこに相談していいのかが分からない」や「～へ相談したが断られたので、あきらめていた」という潜在的なニーズにも対応できる可能性が広がってくる。

一般的には参加者数を多くすることで、講師謝金の確保と参加費の低減を実現できるため、集客数と採算性の担保が不透明な部分もあるが、一般向けの体験活動は、（奥能登町春蘭の里の事例のように）宿泊のオプションとして個々の希望に沿った農山村体験を選択できるプログラムを提供し、コアメンバー向けの活動は少数の講座制を取ることも考えられる。

現在、週末に里山を訪れる場合、キャンプ・BBQ場、山登り、紅葉狩り、温泉などのそこにある自然を目指して訪れるケースがほとんどで、その地域に住む人々と交流しながら、その地域に根付いた文化体験を行うには、イベントや講座等へ参加するのが一般的である。近郊に住む非地域住人が、日常の週末に目的地として、里山資源を活かした様々な里山文化体験へアプローチできる新しい仕組みとして、人的ソースをつなげ、非地域住人に発信できる“里山コンシェルジュ”のようなシステムの道筋を探っていけたらと思う。遠方からの観光客へのアプローチではなく、近郊に住む非地域住人が日常の週末に訪れる機会創出が、一つの活路になるのではないかと感じている。

図8　内モンゴル自治区での遊牧民の定住化生活の様子。（上）牛の糞の乾燥燃料、（中）小型の風力発電、（下）解体直後の羊の背油と脚肉の天日干し。

おわりに

人生初めての海外渡航は、2004年の夏（22才）、中国内モンゴル自治区への砂漠化調査（東京学芸大学留学生）への同行だった。初めて間

近に振れた異文化のセンセーショナルさを思い起こしながら、荒野に築かれた各家庭を訪問した際に、庭先には小さな風力発電用の羽が回り、牛の糞を乾燥させたものを備蓄して燃料とし、時には軒先で羊の解体をしているところに遭遇した生活風景が特に印象的だった（図8）。自らで田畑を耕し、家畜を育てその恩恵を最大限に生かし、自然の風力で発電し、できるだけ自給によりまかなっている素朴な生活風景だった。

近代化が進むにつれて、サービスや資源を貨幣と交換しながら営む生活に変わり、様々なものが大衆流通化のシステムに組み込まれ、享受されるものとして日常にあふれるようになった。日本では、肉や野菜はスーパーで買うのが当たり前の日常となっている。また、携帯電話からインターネットショッピングで購入した商品のほとんどが、翌日には自宅へ配達される時代である。このシステムを構築・維持するなかでも、たくさんの人の努力が払われているが、久しぶりに深夜に高速道路を走って、大流通網を支えているトラックの多さに驚いたときでないと、そういった人々の努力を実感しにくくもある。

その流通のなかで、規格外野菜や季節外魚の除外・売れ残りが生じ、食べ残しも含めた“食品ロス（本来食べられるのに廃棄されてしまう食品）”だけでも年間約500～800万トン（2013年には事業者330万トン、家庭302万トン）と推計され、世界全体の食糧援助量を上回る量に達している[33]。先進国と言われる日本でも、昨今“子どもの貧困”が取り沙汰されており、「子ども食堂」との連携などで活用できる仕組みを作れないかとの思いを巡らせてもいる。

本編で取り上げた食肉や天然のジビエを活かした新しい取り組みについても、生き物を捌くことに抵抗を感じ、ときには差別的な見方をする人も少なくない。実際に、芝浦屠場でも、屠場労働者への日常的な差別や偏見のまなざしが、今もなお問題となっている。流通網からの食肉需給を受けている人も、命との関わりを感じにくい状況にある。また、狩猟に携わろう！と実現へ歩みを進めるなかで、「生き物を殺生するのはかわいそうだ」という反応にも触れ、命をいただく実感と倫理観の変化を思考しながら、さらにいろいろな思いを巡らせることもある。

「今の先進国の人々の暮らしぶり（発展と消費の社会モデル）が、本当に幸せと言えるのだろうか？」（第40代ウルグアイ東方共和国大統領ホセ・ムヒカ氏）との問いかけに[34-36]、人間らしく豊かに幸せに生きることの本質と新しい社会の生き方のかたちを考えさせられたりもする。これからの持続可能な発展の歩みの中で、多くの人が利便性のよい都市や近郊へ移り住み、その傾向は今後も一層強まると言われている[2]。常識や価値観が違うなかで、それぞれを尊重しながらどういった新しい社会モデルを構想できるのだろうか。

本稿では、伝統的・科学的な知恵体系の鍛錬の中で、身近な里山資源を生かした新しい社会・生活スタイルへの歩みが進められていることを紹介した。社会の発展を目指す中で里山資源の価値の再評価が進んでいる。古くから山間部では複合的に稼ぐスタイルを生業のかたちとしての半農半業があり、様々なスキルを習得しながら厳しい自然環境の中での持続可能な生活を営んできた。その中で培われてきた経験や感性・世界観は、地域の財産となってきた。里山資源として里山文化圏の一端を学び、成人のリベラルアーツ教育に活かした都市と農山村の共生と持続可能性の新しいかたちが一つのモデルとして描けるのではないだろうか。（2016年7月）

参考文献等

[1] 総務省および国土交通省「過疎地域等における集落の状況に関する現況把握調査」（2011年3月）によると、山間地（林野率80%以上の集落）では、機能が低下または維持困難な集落の割合が30%、消滅の可能性がある集落の割合が11%と、中間地や平地に比べてもずば抜けて高い割合である。

[2]「国土のグランドデザイン2050」（国土交通省、2014年7月）においても、2010年に国土の無人地域が約53%（国土面積約38万km^2に対し、約18万km^2）から、35年後の2050年には約62%へ拡大する（出生率1.35を想定）ことが推計され、特に今の人口規模が小さい農山村での人口減少と都市部での人口増加が顕著に生じることから、結果的に「超都市の形成と無人地域の

拡大」へと繋がる見通しが示されている。

[3]「平成25年度 食料・農業・農村白書」（農林水産省、2015年5月）では、現在、中心世代として農村を支えている高齢者（65歳以上）の人口が、10年後の2025年からは減少に転じる見通しが示され、これを打破するために、若者の農業回帰による農山村の活性化への期待が述べられている。

[4] 一方、東京圏（1都3県）の介護需要の試算（日本創成会議・首都圏問題検討分科会、2015年6月）では、2015年に団塊の世代（1947～1949年生まれのおよそ800万人）のすべてが65歳以上の高齢者であり、10年後の2025年には75歳以上となることから、全国の介護需要が32%増、首都圏では45%増と見込まれている。これにより、医療・介護の受け入れ能力が低い東京圏では医療や介護の人材が25年に約80万～90万人不足するという見通しで、高齢者の都市圏以外への移住促進を推奨しており、人口の都市集中に伴う新たな課題も警鐘されている状況にある。

[5] 植物由来の炭素資源を消費して大気中に排出されるCO_2は、その植物の成長時に大気から吸収したCO_2に由来することから、植物由来資源の消費活動は大気中のCO_2濃度に大きく影響しないという概念。

[6] 山口（産総研）ら、木質バイオマスの全成分有効利用、石油学会第65回研究発表会注目発表（2016/5/24）。

[7] 例えば、海老谷・西村・高垣、固体触媒を用いたバイオマス関連物質の酸化的変換反応、触媒 2013, 55, 283など。

[8] スギノマシン（富山県魚津市）、セルロース・キチン・キトサン等のバイオマス前処理技術を開発し、各ナノファイバー「BiNFi-s（ビンフィス）」の用途開拓を進めている。

[9] 大山（東京大学）ら、戦略的次世代バイオマスエネルギー利用技術開発事業（次世代技術開発）（NEDO）、“急速接触熱分解による新たなバイオ燃料製造技術の研究開発”（平成23～26年度）。当研究グループも参画。

[10] 北野（明和工業㈱）ら、地域資源を活用した再生可能エネルギーの生産・利用のためのプロジェクト（農水省）、“林地残材を原料とするバイオ燃料の製造技術の開発”（平成24～27年度）。当研究グループも参画。

[11] 遠野興産㈱（福島県いわき市）、岩石工場視察（2016/3/24）。木質バイオマスをとことん使い切ることを目指し、カスケード型の利用システムを構想し、バイオマス資源の有効利用に取り組んでいる事業所。

[12] 農林水産省「木材需給報告書」より。

[13] NPO法人バイオマス産業社会ネットワーク、バイオマス白書2015（2015年7月）。

[14] 林野庁企画課、平成26年木材需給表（平成28年4月）。

[15] 西村、地域の再建を担う非地域住人による市民活動、民族植物学ノオト、2012、5、pp10-13。

[16] 西村、持続可能性を指向した中山間地域の活性化、民族植物学ノオト、2012、5、pp14-18。

[17] 西村、中山間地域のホームガーデンと地域活性化策から捉える地域形成の変化―石川県白山ろくの暮らしぶりと栽培植物の利活用の視点から―、環境教育学研究（特集：ホームガーデン：自給農耕と生物文化多様性），2014、23、pp71-87.

[18] 第3回～ヤマダチ会ってどうしたい？～（2015/2/15）。猪肉の部位ごとの食べ比べ（しゃぶしゃぶ）の様子。ロース、肩ロース、内バラ、外バラ、外モモ、シンタマ（前足のモモ）、内モモ、ウデ、チマキ（スネ）、ヒレの味の違いを比較したり、仔猪のリブロース、猪ほほ肉の煮込み、熊肉の煮込み等の試食を行い、里山の恩恵と現在の課題、そして今後の活動についてKJ法による意見交換を行った。

[19] 第5回～山菜をもとめて高倉山へ～（2015/5/23）。講師を招き木滑集落の入会林（高倉山）へ。ゴマナ、ウド、クズ、ワラビ、アザミ、タラの芽、オオナルコ、オオヨモギ、リョウブ、ギボウシ、モミジガサ、ソバナ、ハリエンジュ、ハンゴン草、ワサビ、ミヤマイラクサ、山椒、藤の花、ウドなど20種類以上の山菜を採集し、調理して試食。山菜を毎年楽しむための心得（株を殺さない、脇芽を残すなど）や、毒草との見分け方、昔の食べ方（リョウブ飯）を学び、KJ法による意見交換も行った。

[20] その土地に住む方からテーマに沿った話題提供の後、各グループでワールドカフェ方式の意見交換。イノシシの心臓、ヒレ、ハツなどの里山の味も議論に花を添えている。里山の資源の活用についてや、かつての姿から現代に生かせるすべを探りながら、同じ白山ろく近郊で活動する個人や団体が一堂に集うことで学びを深め、新しいアイデアの創出と協働、里山の継承の歩み方を模索している。

[21] 第1回白山ろく里山ミーテイング、ワークショップテーマ「白山麓の森林資源の活用」（2016年2月20日）。

[22] 第2回白山ろく里山ミーテイング、ワークショップテーマ「出作りで白山ろくを元気にするには」（2016年5月11日）。

[23] 第3回白山ろく里山ミーテイング、ワークショップテーマ「白山ろくにもし地域おこし協力隊が派遣されるとしたら？」（2016年7月25日、開催予定）。

[24] 農林水産省生産局畜産部食肉鶏卵課、食肉鶏卵をめぐる情勢（平成28年5月）。

[25] お肉の情報館内の展示映像資料参照（2016年1月現在）。なお、HP上の平成27年取扱い頭数は、牛141,080頭、豚219,560頭であり、2015年の平日（242日）当たりでは、およそ牛583頭／日、豚907頭／日となる。

[26] 石川県白山自然保護センター主催、白山まるごと体験教室④「猟師から聞く白山麓の動物話」（2015年11月1日）

[27] 環境省自然環境局野生生物課鳥獣保護管理室、狩猟者・捕獲数等の推移等（平成25年）。

[28] 肉1kgの生産に必要な穀物量は、牛肉で10～30kg、豚肉で4～7kg、鶏肉で2～3kgともいわれている（穀物栽培および飼育に必要な水も多い）。また、牛のゲップ（メタン）による温室効果も懸念されている。

[29] 例えば、鳥獣肉の新製品開発において、肉の割合が

50％を境に「食肉製品」と「惣菜」の区分が異なり、食肉製品を製造・販売する場合には、対応する法令の求める免許（惣菜製造業の許可など）が必要となる。また、肉のみを使った発酵食品（生ハムやドライソーセージなど）の開発にも、別の免許・許可が必要となる。各開発商品の種類により対策が必要な状況であり、足かせの一つとなっている。

[30] かつての山村では、熊の胆（胆汁）や猿の脳（炭化物の粉末）は民間薬（前者は万能薬、後者は精神疾患の妙薬）として重宝されていた歴史がある。しかし、現在は薬事法の規制もあり、販売等の利用は難しい。

[31] 平成26年分民間給与実態統計調査―調査結果報告―（国税庁長官官房企画課、平成27年9月）。1年を通じて勤務した給与所得者の給与階級分布は、300～400万円（17.3%）、200～300万円（16.9%）、100～200万円（15.2%）、400～500万円（13.9%）と続き、100万円超～400万円以下が約半数を占める。

[32] 燃料代や掃除の手間がかかるにもかかわらず、家に薪ストーブを設置することに需要があり、"特別な体験"と思える体験や物にお金を払う例として、取り上げられた。

[33] 農林水産省食料産業局バイオマス循環資源課食品産業環境地策室、食品ロス削減に向けて～「もったいない」を取り戻そう！～（平成25年9月）。

[34] フジテレビ、『“世界でいちばん貧しい大統領”ムヒカ来日緊急特番～日本人は本当に幸せですか？～』（2016/4/8放送）。

[35] くさばよしみ編、世界でいちばん貧しい大統領のスピーチ、汐文社（2014年3月発行）。

[36] 佐藤美由紀著、世界でもっとも貧しい大統領　ホセ・ムヒカの言葉、双葉社（2015年7月発行）。

[37] BECK’S COFFEEは、今夏に「長野県で獲れた夏鹿を使用したカレー」や「千葉県の猪を使用したスパイシーピタポケット」の販売を始めており、2011年から鳥獣被害対策への一助として、首都圏でのジビエメニューの販売を行っている。

愛媛の山里の諸問題

土井利彦

Issues of Mountainous Villages in Ehime Prefecture, Japan

Toshihiko DOI

はじめに

2010 年に東京小金井市から、愛媛県大洲市宇和川の「大貸（おおかし）」という集落に居を移し、6 年になる。

この大貸集落は、愛媛県大洲市内の中心部（市役所）から肱川に沿って 12km ほど遡った大川地区森山から、さらに 5km 弱の人家のない山道を上って行くと、忽然と現れる。標高は約 300m、全部で 8 戸 17 人の小さな集落で、半数が 65 歳以上である。

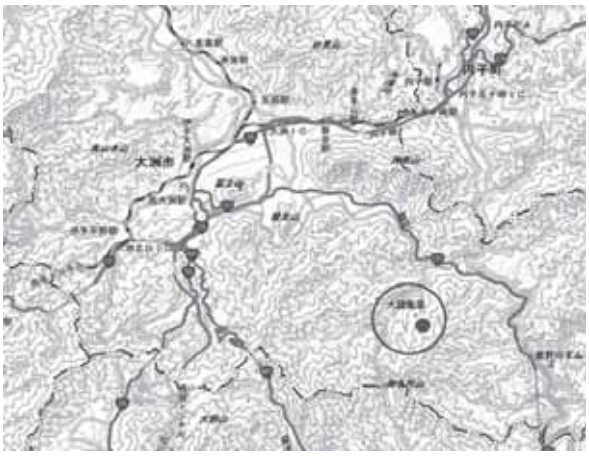


図 1　大貸集落位置図

と書くと、山奥の孤立した高齢者集落というイメージが浮かぶだろうが、じつは四国（中国地方も）には山の中腹から上に、多数の小さな高齢者集落が点在している。これは、かつての生活道は流域ではなく尾根道と峠道が中心であり、山の中腹の沢を利用して水管理がしやすい耕作を行っていた（じつは段々畑や棚田の多くは、脇に沢が流れていて、そこから導水するのは比較的簡単だった）時代の名残なのである。

大貸集落も下の集落からは離れているが、さらに 1.5km ほど山道をたどると、後期高齢者独居世帯 6 人の集落がある。この隣の集落とは、毎月一回、合同の常会（おもに行政的な連絡事項を住民に伝えることが目的の会議）をもち、情報交換を行っている。

この 6 人の集落に、独居の 94 歳の男性がいるのだけれど、驚いたことにいまだに木に登るし、刈り払い機やチェーンソーもつかう。家の

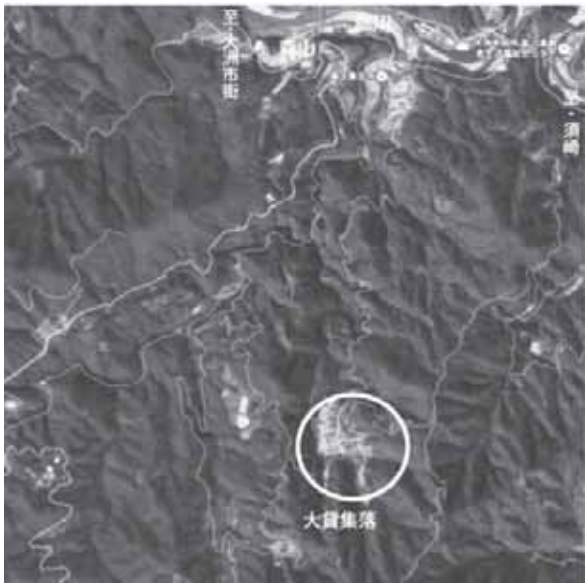


図 2　山の中の大貸集落（Google Earth より）

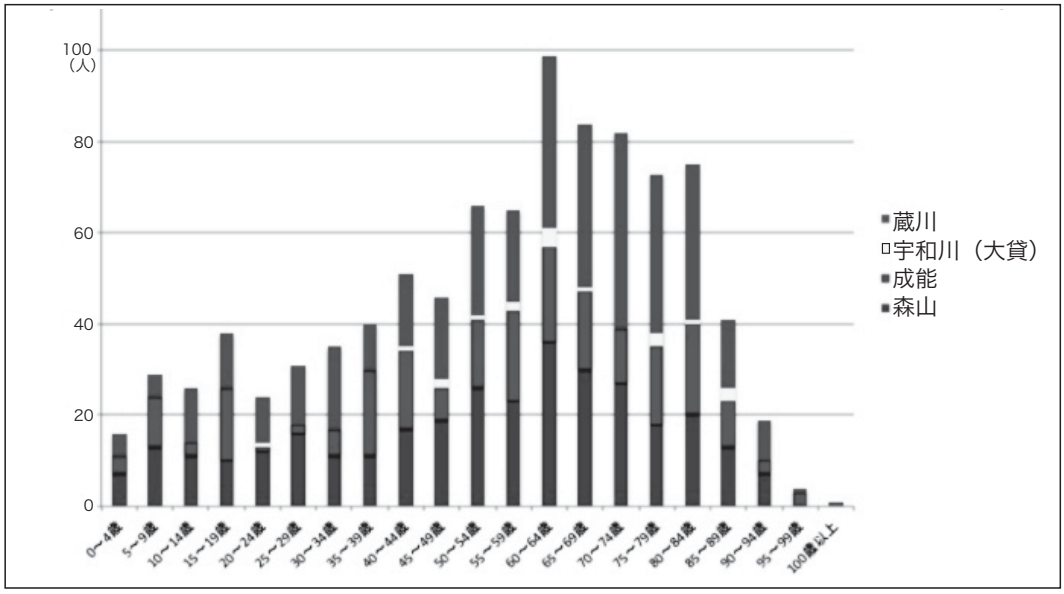


図３　大洲市大川地区年齢階層別人口（2010年国勢調査より）

周りに小さな畑と田を持ち、夕方からは10数キロの道を町のパチンコ屋まで軽トラで出かける。本人曰く、パチンコ屋は知り合いと情報交換をするとともに、勝ち負けを計算するから、ボケないためにはいいという。彼は50代で連れ合いをなくし、一時は町に下りていたけれど、一人暮らしのほうが気ままでいいと、山に戻ってきたのである。料理もそこそこつくれるし、家事一般も苦にしない。地域の行事や役目にも積極的に関わり、人気者である（90歳を過ぎた「老人」が、交通安全員という役目を果たしていることは、都市では考えられないだろう）。一人暮らしの老人には、男女ともこのようなタイプの人が少なくない。

さて、わたしたちの集落だが、このへんの地域の中ではまとまりがあると評判のところだ。年の暮れの集落入り口の大きな門松づくり、立春の大草鞋（わらじ）づくり（集落の入り口に吊るす）。年数回の「道刈り」（5kmの山道の雑草を刈り、道崩れや溝の補修をしながら、ブロワーで刈り取った雑草を谷に吹き飛ばして、道をきれいにする）、年２回の念仏講（念仏講を行うお堂、集落の氏神様の社、それぞれに年ごとの当番があり、清掃などを行う）、その他放棄農地の草刈や林道・農道の補修等を集落総出で行う。ただしこれは「強制」ではなく、当日他の用事などが入れば、参加しなくてもいい。

とはいえ、ここでは「農業」で生計を立てている世帯はない。農地や水田で何らかの野菜やコメを栽培していて、出荷もしないわけではないが、生計のために出荷しているのではない。他に何らかの現金収入の道があることを前提に、これらの農耕はいわばちょっと規模の大きい「家庭菜園」として機能しているのである。

減っていく人口

ここからが、第１の問題点である。図３は、わが集落（宇和川地区に相当）を含む大川地区全体の年齢階層別人口をグラフにしたものであるが、わが大貸集落には実質的に若者も子どももいない。実質的に、というのは籍だけ残して、大洲市内で暮らし、子育てしている世帯が１戸だけあるからだ。

それでは、都市に出て行った人たちが、こういう山間地の集落に戻ってくるものだろうか。残っている人たち、ことに出て行った人の親世代は「戻ってこない」と考えている。

それにはいくつかの理由がある。ひとつはもちろん経済的な問題だが、これは多くの人が強調するけれど、むしろそれ以上に人間関係の問題の方が大きい。

山間地に暮らす子どもたちの場合、保育所か

図４　明治28（1895）年の現大洲市相当部（点線囲み）地図

ら高校、少なくとも中学校までは同じところに通うのが大半である。子どもたちの、とくに男の子たちの小さなグループは、大人のグループ以上に閉鎖的になりがちで、この過程でつくられた男の序列—これは成績よりも腕力によってつくられるものがほとんど—は大人になっても、変わらない。

小さいころからこの序列の中でずっと抑えられてきた頭のいい子にとって、大学進学あるいは就職は、そのような序列構造を抜けるほとんど唯一のチャンスなのである。序列の高い男性は、たいていは大学進学しない（できない？）ことから、地元に残っていることが多い。都会に出た男性が集落に戻るということは、この序列の下位に再び組み込まれるということでもあり、なおかつその上に保守的な高齢者がいて地域を仕切っている。経済的にはもちろん、人間関係的にも厳しいとなると、曲がりなりにも都市で自由を味わってきた人は、そういう地域に戻っていくだろうか。

残っていた親世代は、先祖代々の土地があることから簡単に外に出ることもままならず、さらに上の高齢者世代に抑えられながら暮らしてきたのである。だから、集落のしがらみについては熟知している。かといって、地域に暮らす限り、自分がそういった殻を破るわけにもいかない。そこで、自分たちの子どもが戻らないであろうことが理解できるし、自分の世代で終わりという意識も強い。たしかに、まったく戻ってこないというわけではないが、それはきわめて珍しいケースといえる。地方に戻る場合も、大半は地元ではなくその地域の大きな都市どまり、いわゆるＪターンが大半である。

さらに、相変わらず男社会である山間地では、女性は序列外であることから、比較的気楽に地元を離れることができる。親も地元には就職先も望む嫁ぎ先もないことから、「外に出た方が幸せになる」「盆暮れに顔を見せてくれればいい」と思っている。

ある意味では「身から出た錆」でもあるが、必然的に地域人口はどんどん減って行く。

人口減少と人口の偏在

しかしながら、明治初期以来、暴発とも言える形で増えた日本の人口が減少に転じたのは、遅きに失したとはいえ、ある意味で当然だろう。江戸末期に3,000万人ほどであった日本の人口が、ピーク時に1億2,000万人にもなったのは、異常であったといえる。とはいえ、人口減少しているものの、相変わらず大都市への人口集中という人口分布の偏りは、変化していない。

図４を見ると分かるように、かつては愛媛の山間部でも人口はけっして少なくなかったのである。この地図を見ると、現在「中山間地」とされる地区にも人口1,000人以上のところが少なくない。そのため、この当時の大洲市相当地

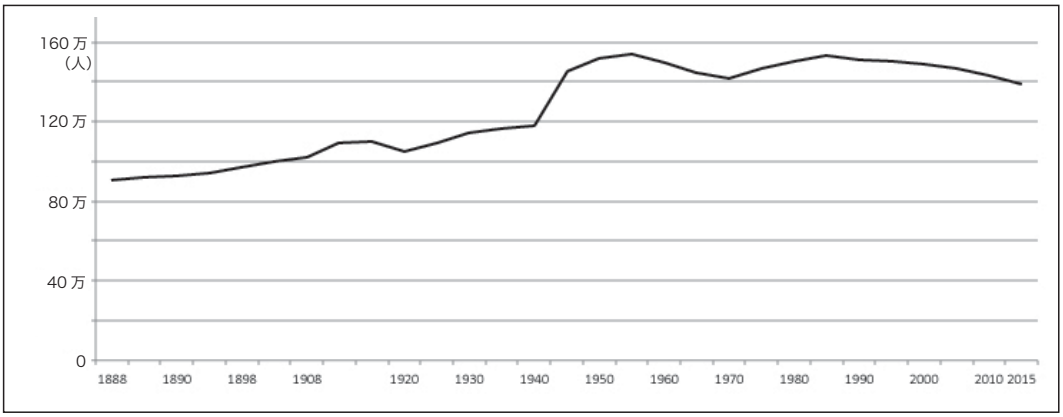


図５　愛媛県の人口推移

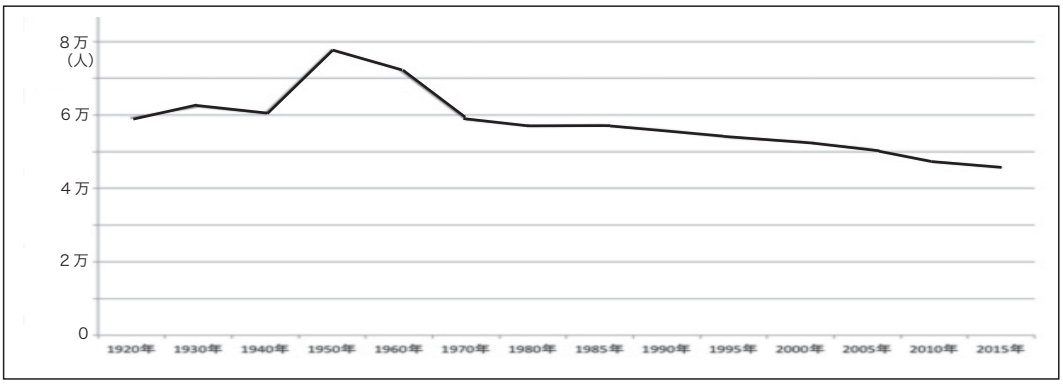


図６　大洲市域の人口推移

域の地域人口そのものも、現在の大洲市の人口を上回っている。

大洲市の明治期の記録は入手できないけれど、愛媛県の明治21（1888）年の人口は約90万5,100人とされていて、平成27（2015）年の138万5,840とは48万人の差がある。図4の地図が作成された明治28（1895）年でも、現在より45万人ほど少なく（図5参照）、都市域人口は少なかったと考えられる。

それでは、この明治28年の地図上で、人口が1,000人以上とされているところは現在どのようになっているだろうか。これらの集落では、大洲市街地周辺の地域（緑部分）以外は、いずれも大幅に人口が減少し高齢化が著しい（表1）。市域全体としても、1950年ころをピークに人口が減少しているとはいえ、小さな集落の人口流出は極端である。

ましてや、明治28年に人口1,000人未満であった集落では、その大半が年齢構成で50歳以上が70％以上となっている。早晩、これらの集落は維持不能になるだろう（表2）。他方で、松山市はこの数年横ばいとはいうものの、昭和47（1972）年に33万3,259人であったものが、平成25（2013）年末には51万6,643人。平成17（2005）年の市町合併で3万3,818人増加があったものを勘案しても、14万9,566人の増加を示している（松山市「人口動態集計」平成25年）。

このことは、愛媛県内でも大都市域への人口集中が起こっていたことを示している。そればかりでなく、全体として人口が減少するなか、周辺の山間部から、より都市的な地域に人口が移動しているのである。山間部に暮らした人たちは、山間部で暮らせる経済的基盤がなくなると、いやでも山から下りざるを得ない。

農地はどうなっているか

ここで、農地がどうなっているかを振り返っておきたい。

愛媛県全体を見ると、1990年の農林業センサスから2010年の農林業センサスまでの間に、耕地面積そのものが64,309haから47,458haへと26.2%減少しており、その減少した耕地のう

集落(町)名	総人口	～14歳	%	15～64歳	%	50～64歳	%	65歳～	%	50歳～%
若宮	2,083	304	14.6%	1,221	58.6%	415	19.9%	558	26.8%	46.7%
平野町野田	1,565	203	13.0%	936	59.8%	423	27.0%	426	27.2%	54.2%
上須戒	534	38	7.1%	266	49.8%	125	23.4%	230	43.1%	66.5%
八多喜町	1,542	224	14.5%	851	55.2%	351	22.8%	467	30.3%	53.0%
新谷	2,674	398	14.9%	1,592	59.5%	575	21.5%	684	25.6%	47.1%
菅田町菅田	2,695	397	14.7%	1,720	63.8%	663	24.6%	578	21.4%	46.0%
菅田町宇津	578	57	9.9%	316	54.7%	142	24.6%	205	35.5%	60.0%
蔵川	375	22	5.9%	179	47.7%	82	21.9%	174	46.4%	68.3%
長浜町櫛生	516	34	6.6%	245	47.5%	135	26.2%	237	45.9%	72.1%
長浜町出海	493	45	9.1%	241	48.9%	120	24.3%	207	42.0%	66.3%
長浜町下須戒	887	126	14.2%	532	60.0%	224	25.3%	229	25.8%	51.1%
豊茂	464	29	6.3%	226	48.7%	121	26.1%	209	45.0%	71.1%
宇和川	582	67	11.5%	318	54.6%	132	22.7%	197	33.8%	56.5%
大洲市宇和川	19	0	0.0%	11	57.9%	7	36.8%	8	42.1%	78.9%
肱川町宇和川	563	67	11.9%	307	54.5%	125	22.2%	189	33.6%	55.8%
山鳥坂	767	85	11.1%	360	46.9%	173	22.6%	322	42.0%	64.5%
肱川町山鳥坂	680	76	11.2%	317	46.6%	145	21.3%	287	42.2%	63.5%
河辺町山鳥坂	87	9	10.3%	43	49.4%	28	32.2%	35	40.2%	72.4%
肱川町大谷	407	43	10.6%	180	44.2%	83	20.4%	184	45.2%	65.6%

表 1　大洲市域の集落の現状 1（人口は 2010 年国勢調査）

集落(村)名	総人口	～14歳	%	15～64歳	%	50～64歳	%	65歳～	%	50歳～%
柚木	1,485	202	13.6%	835	56.2%	306	20.6%	448	30.2%	50.8%
阿蔵	1,525	223	14.6%	944	61.9%	385	25.2%	358	23.5%	48.7%
五郎	979	150	15.3%	556	56.8%	106	10.8%	273	27.9%	38.7%
多田	247	27	10.9%	175	70.9%	76	30.8%	45	18.2%	49.0%
北只	617	131	21.2%	374	60.6%	114	18.5%	112	18.2%	36.6%
松尾	268	29	10.8%	140	52.2%	71	26.5%	99	36.9%	63.4%
黒木	56	5	8.9%	29	51.8%	11	19.6%	22	39.3%	58.9%
稲積	154	16	10.4%	72	46.8%	34	22.1%	66	42.9%	64.9%
長谷	64	3	4.7%	36	56.3%	21	32.8%	25	39.1%	71.9%
梅川	82	6	7.3%	41	50.0%	16	19.5%	35	42.7%	62.2%
平地	546	45	8.2%	264	48.4%	113	20.7%	237	43.4%	64.1%
米津	182	19	10.4%	106	58.2%	47	25.8%	57	31.3%	57.1%
手成	167	15	9.0%	82	49.1%	48	28.7%	70	41.9%	70.7%
春賀	703	94	13.4%	428	60.9%	186	26.5%	181	25.7%	52.2%
田処(處)	172	11	6.4%	66	38.4%	43	25.0%	95	55.2%	80.2%
藤縄	129	8	6.2%	60	46.5%	36	27.9%	61	47.3%	75.2%
柳沢	291	20	6.9%	146	50.2%	63	21.6%	125	43.0%	64.6%
喜多山	235	24	10.2%	123	52.3%	61	26.0%	88	37.4%	63.4%
菅田町　大竹	362	41	11.3%	192	53.0%	85	23.5%	129	35.6%	59.1%
森山	327	31	9.5%	181	55.4%	85	26.0%	115	35.2%	61.2%
成能	224	18	8.0%	124	55.4%	56	25.0%	82	36.6%	61.6%
大洲市　宇和川	19	0	0.0%	11	57.9%	7	36.8%	8	42.1%	78.9%
長浜町　黒田	221	19	8.6%	112	50.7%	51	23.1%	90	40.7%	63.8%
長浜町　沖浦	779	81	10.4%	461	59.2%	208	26.7%	237	30.4%	57.1%
長浜町　今坊	432	42	9.7%	231	53.5%	102	23.6%	159	36.8%	60.4%
長浜町　須沢	110	7	6.4%	57	51.8%	30	27.3%	46	41.8%	69.1%
長浜町　穂積	92	7	7.6%	44	47.8%	27	29.3%	41	44.6%	73.9%
戒川	137	1	0.7%	63	46.0%	35	25.5%	73	53.3%	78.8%
柴	571	37	6.5%	229	40.1%	102	17.9%	305	53.4%	71.3%
肱川町　名荷谷	428	48	11.2%	266	62.1%	111	25.9%	114	26.6%	52.6%
肱川町　中津	39	1	2.6%	14	35.9%	10	25.6%	24	61.5%	87.2%
河辺町　山鳥坂	87	9	10.3%	43	49.4%	28	32.2%	35	40.2%	72.4%
河辺町　植松	185	23	12.4%	75	40.5%	35	18.9%	87	47.0%	65.9%
河辺町　川崎	104	1	1.0%	49	47.1%	34	32.7%	54	51.9%	84.6%
河辺町　横山	64	4	6.3%	26	40.6%	10	15.6%	34	53.1%	68.8%
河辺町　川上	80	4	5.0%	29	36.3%	15	18.8%	47	58.8%	77.5%

表 2　大洲市域で 1895 年に 1,000 人未満であった集落の現状（人口は 2010 年国勢調査）

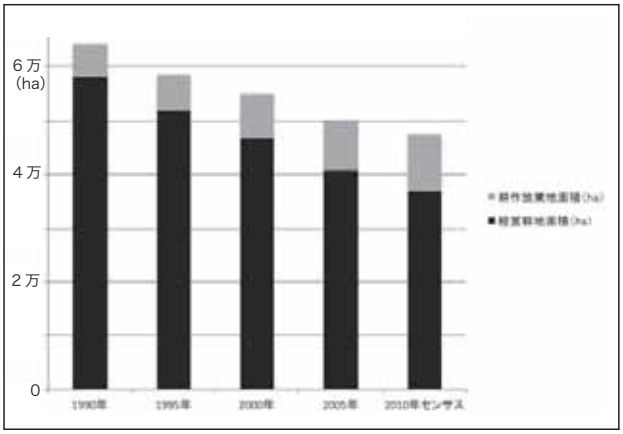


図４　愛媛県の耕作地の現状

ち21.9%が耕作放棄地となっている。

そのうち、大洲市では耕地面積が2,636ha、耕作放棄面積が702ha、耕作放棄地率が26.6%、4分の1以上が耕作放棄地となっている（2010年農林業センサス）。

全体として農地が減るなかで、さらに耕作放棄地が増加の一途をたどっていることが分かるが、愛媛県のように中山間地の耕作地が多いところでは、ある意味で当然と言えよう。中山間地では1戸あたりの耕作面積は狭く、田畑が50アール以上あるのは珍しい（果樹園でも1ヘクタール規模は少ない）。

先に述べたように、このような規模では「農業」を営むレベルにはない。他からの収入（林業、シイタケ栽培、給与等々）がなければ、家計も成立しないのである。他の収入がしぼめば、人は暮らしのために山を下りる。そのときには、それまでの農地は、最初は耕作放棄地となり、やがては原野へと戻って行く。図4は、その経過を如実に示している。

移住者と地域

一方、最近は「就農」を目指す都市からの移住希望者も少なくないようにみえる。しかし愛媛県では、「新規移住希望者」のうち、じっさいに「就農」を目指しているのは多くても年間数十人程度である。

愛媛県には「不耕起農法」の元祖とも言える福岡正信さんがいた。そのためか、「就農」を目指す移住者たちの多くは、「不耕起農法（自然農法）」や有機農法の「農業」を幻想している。けれども、そのような「農」では暮らしが成立しないのも事実であるし、人口減少の著しい地域にとっては、わずかな人口増は焼け石に水でしかない。しかも、多くの地域では「慣行農法」が主流であり、そのような地域に新参者が入って有機農法や自然栽培を行うのはほとんど不可能といっていい。

たとえば、積極的に移住者を受け入れている内子町でも、2014年12月現在で受け入れ者総数は108人と当初目標200人のほぼ半数にとどまっている反面、社会減は年間150～200人である。基本的には、人口は自然増減・社会増減ともにマイナスとなり、人口減がつづいている。愛媛県では、社会増のあった地域も、それを上回る自然減によって、結果、どの市町も人口減となっている（2015年1月1日現在）。

内子町のように移住促進に熱心なところでも、必ずしも「農業移住」は成功していないのである。移住して定住している人たちも「農業」で暮らしを成立させるというより、「農」を通じた新たなライフスタイルを模索しているようにみえる。それはそれで勇気ある挑戦であるかもしれないが、もともとの地域住民とは、日常的な作業は共同しても、基本的な農に取り組むための問題意識がかけ離れており、結局は意識を同じゅうする者たち同士がネットワークを作るかたちになる。このような暮らしのあり方に「バラ色の未来」を妄想する論調も少なくないが、少なくとも山里でそれを喧伝するのは、無責任の誹りを免れない。

しかし、さはさりとて、山間地やそれに近いところで農以外の仕事を主とする移住者も少なくない。和紙作家や木工作家、デザイナー、編集者など、どちらかといえば都市的な職業をひっさげて移住しており、多くは「５分の１農５分の４Ｘ」（半農半Ｘではない）くらいの農も行っている。いわば「家庭菜園」的農といえる。

がしかし、よく見れば、この姿こそ中山間地の暮らしの原点に近いのである。経済的にも、この場合は「農」に頼るわけではない。炭焼きや林業、シイタケ栽培などが、新たな職業に置

き換えられたものだといっていい。「農」は趣味的でもあるから、生産性にはこだわらず、無農薬でも可能である。家や畑が隣接していない山里なら、無農薬でも他にあまり迷惑にはならない（農地が隣接している地域では、無農薬栽培地は作物を食う虫が多く発生する可能性があり、結果、他の慣行栽培地での農薬使用量を増加させる可能性が大きい）。

むしろ、このような移住者のほうが、今後の山間地には必要なのかもしれない。その数はわずかではあり、まだどうなるかは分からないが、そのような若者たちが山里を元気づける状況も生まれてはいる。

集落を閉じる

「集落を閉じる」というと、あたかもすべてが終わりかのように議論する人も少なくない。すでに、中山間地の小さな集落では住む人がいなくなり、放棄されたところも少なくない。

けれども、人が集落を離れるとき、それまでの農耕地に杉や檜を植栽して、あとは放置してしまうことが多い。そのようなところは結果として手入れ不足の人工林になったり、荒れた山になったりしてしまう。放置された家はやがて朽ちて崩壊する。集落を閉めることをもっと真剣に考えることが必要になっているのである。

集落を閉めることはけっして「故郷」を失うことではない。わたしたちの多くは、自分たちは定住民であると思っていることから、いま住んでいるところが、あたかも先祖代々からつづく「故郷」だと考えている。けれども、ごく一部を除いて、同じところに1000年間住み続けている家系はない。長くても数百年、江戸っ子の場合、江戸住まいが三代つづけば「江戸っ子」と言っていたわけだから、50年がいいところだろう。山を下りるのは、山を元の自然にお返しするだけのことなのである。

先にもふれたように、四国や中国地方でよく見られる風景だが、昔からの集落はたいていが山の上の方にある。ところが基幹道路は、大河川に沿った山裾を走る。昔の集落から数kmは離れている。もちろん、中核の町は城下町であったり商業都市であったりと、性格はさまざまだが、多くは平地に立地し、しかも河川の辺であることが多い。これらの中核都市同士をなるべく短い距離で結べば、河川沿いの道路になる。

昔からの集落は、自分たちが自動車で移動する以外に交通手段はない。週に1～2本のコミュニティバスでは、緊急のときにはまったく役に立たない。集落から数km離れた基幹道路のバス停を通るバスですら、日に2本か3本。

小さな集落であっても、たとえ道幅が片道一車線ギリギリの細いものであれ、市道や町道は通っている。人が暮らしていれば、最低限の補修はしなければならない。市民あるいは町民が暮らしていれば、行政サービスも放棄するわけにはいかない。小さな集落を残すというのは、単にそこに人が住みつづけるというだけではないのである。高齢者集落であればあるほど、ハード、ソフト両面でのさまざまな行政サービスも不可欠になる。しかし、小さな山里を多数抱える地方自治体は、それでなくても財政的に非常に厳しく、小さな集落が点在すればするほど、行政サービスも疎かになっていく。

むりに山奥の集落を存続させるのではなく、集落の有機的つながりを維持したまま、集落ごと里に下りることを考えなければならない。

生活インフラと情報インフラと

さて、現在の暮らしの条件には、最低どういうものが必要なのだろうか。「暮らしの条件」が時代や地域によって異なってくることは当然であるが、いま都市に普通に暮らしている人にとっての「暮らしの条件」が、おそらく山里でも必要といえるだろう。

日本国憲法第25条では、「1 すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。2 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない。」とされていることを忘れてはならない。地域政策を立てる際のもっとも肝要なことは、この条文を前提にするということである。この条文に基づいて、中山間地の生活インフラ・情報インフラも都市並み

にすれば、そこにはじめて「零細な農業」以外の就業機会も生まれる可能性がある。

くどいようだが、山里で暮らすには「農業」以外の仕事こそが重要なのである。かつては、山里の暮らしは、さまざまな山里の生産複合（林業、製炭、シイタケ生産など、それぞれの生産行為が複合的に絡みあっていた）ができて成立していたけれど、すでに指摘したように、いまはその複合の相手が林業・製炭・シイタケ生産などでは、暮らしに足る収入が得られなくなっている。だから人は出て行くのである。

だがそれ以前に、生活インフラや情報インフラに欠ける、つまり「暮らしの条件」に欠けることが少なくない。生活インフラ（要するに上下水道のことで、山里でも浄化施設の整った水洗トイレが必要といえる）、情報インフラ（本当に人に住んでもらいたいなら、道路造りより光ケーブルが優先されなければならない）の整備があってはじめて、都市からの移住を誘う最低条件ができるのである。

もし大都市近郊であっても、上下水道がなく、近くの井戸から水を汲み、トイレは汲み取り、もちろんインターネット環境もないといった分譲地が売りに出されたとしたら、だれがそんな条件の土地を選択するだろうか。だから「田舎に暮らすのだから、そんなものはいらない」というのは、明らかな地域差別以外の何ものでもないことに気づかなければならない。同じ愛媛県の他市某地区ではこれらが整備されていて、その地区に通じる道は「嫁の来る道」と呼ばれているくらいである。「暮らしの条件」に欠ければ、当然嫁は来ない（こう言うと女性差別に違いないが、愛媛県南予の「男社会」の意識はこんなものである）。

これまでの暮らしに慣れている高齢者は、そのような暮らしの条件整備は必要ないというけれど、それは山里の安楽死につながるのである。

農業政策から地域政策へ

愛媛県では、定年退職者を移住者として求める松山市など一部の地域を除き、多くは「移住者＝就農者」というイメージで対策をとろうとしているが、おそらくこれはまちがいだ。

愛媛県の南部の地域は、これまでの基幹産業（？）といえば、それでも平地の小規模農家による農業が中心であり、小規模農家の補助的な現金収入の道を確保するための雇用対策として企業誘致に走っていた。そのような政策担当者が、中山間地の耕地が次々に放棄耕作地となるのを見て、短絡的に「農業振興」をイメージしているに過ぎないように思える。

しかし、愛媛県の農地の現状から見て、農地の集約化が可能で一定規模の農業が成立しうる平地の地域ではともかくも、中山間地では「農業」は根本的に不可能といえる。そのような地域で特色ある「特産物」を生みだそうとも、それは極端にニッチ性が高いものであり、一時的な成功はあってもけっして持続的なものではないだろう。

ちなみに愛媛県では、ある地域が「ゆずこしょう」をつくり特産品にしようとすると、「ゆずこしょう」の市場性などにおかまいなく、他の山間地でもわれもわれもと追随しているのである。いずれの中山間地にあっても、農業生産物そのものは、ほとんど差がないから当たり前といえば当たり前といえる。もっとも、これは「農業６次産業化プランナー」なる怪しげな人びとが暗躍しているせいでもあるが…。

先に指摘したように、中山間地の「暮らし」は「農業」ではなく、さまざまな生業を複合化することによって、はじめて成立していたのである。たしかに狭隘ではあるが農耕地があり、そこからなにがしかの収穫を得ている。けれどもそれはほとんど自家消費用の収穫物であり、家計は林業、シイタケ栽培、木炭生産、ユズ栽培、出稼ぎ、町での給与所得などを組み合わせて成立していた。それを耕作地があるからというだけで、「農業政策」の対象としてしまったところにボタンの掛けまちがいが始まる。

人は暮らすことで、結果としてそれぞれの地域を維持している。「農をしなければならない」といういわれは何もない。山間地の集落をこれからも残していくというなら、そこに対する政策は「農業政策」ではなく、「地域政策」でな

	1920年人口（人）	1920年人口密度（人／㎢）	2010年人口（人）	2010年人口密度（人／㎢）	人口 2010/1920	人口密度 2010/1920
東京都	3,699,428	1,726.8	13,159,388	6,015.7	3.56	3.48
愛媛県	1,046,720	183.7	1,431,493	252.1	1.37	1.37
松山市	181,496	423.0	517,231	1,205.5	2.85	5.70
大洲市	59,252	137.1	47,157	109.1	0.80	0.80

表３　人口はどう変わったか

ければならない。愛媛県南予地域が典型かもしれないが、農業が経済的に成立し得ない地域であるにもかかわらず、新たな地域政策を立てることのないまま、これまでの惰性でしかない「農業政策」が展開されている。だから、基本的な「暮らしのためのインフラ」整備もないがしろにされる。

都市と山間地の人口バランス

現在、日本の人口は減少期に入ったとされる。けれども大都市部（ことに首都圏）と、中国・四国地方の山里のそれを比較すると、大都市圏への人口集中は相変わらずであり、山間地は消滅寸前になっているのは事実である。中山間地では第二次大戦後の引き上げ等で人口が急増した1950年代半ばの人口ピーク時から、高度経済成長期に入るや人口の流出がつづき、いまや社会を維持するに足る人口に欠けるところも少なくない。

人口流出の一端にはかつて、きだみのるが第二次大戦後間もない東京郊外八王子の恩方を舞台に著した『気違い部落周遊紀行』（冨山房百科文庫）で揶揄されているような、特有の閉鎖的な社会構造など自業自得の部分ももちろんある。しかしこの状況は、燃料革命、自由化による木材市況の低迷など、山里が経済的に立ち行かなくなる一方で、戦後復興はじめ朝鮮戦争の特需などで、人手不足に陥った大都市や産業が「労働力」を求めた結果でもあった。

このときの問題点は、その後さまざまな矛盾を生むことになるが、それはここでの主題ではないので、別の機会に改めて述べることにする。

表３を見てほしい。すでに明治時代が終わり大正の半ばであった1920年（大正９年）に初めて行われた国勢調査と、2010年の国勢調査の結果を比較したものである。ただし、松山市も大洲市も1920年当時と2010年では、繰り返しの合併により市域が大きくなっているので、2010年の市域に相当する地域の人口で比較している。

大洲市の人口密度は、2010年国勢調査では、市全体で109.1人/㎢、山間地である旧河辺村では16.4人/㎢でしかない。東京都豊島区では２万1,881.5人/㎢、住宅地とされる世田谷区でも１万5,102.2人/㎢となっている（もっとも、東京都の御蔵島は16.9人/㎢）。ちなみに愛媛県庁所在地である松山市の人口密度は1,205.5人/㎢。

これだけでも、都市への人口集中は何となく分かるけれど、表を見ると東京都は1920年の人口369万9,428人が2010年には1,315万9,388人に増加し、3.56倍にふくらんでいる。一方、愛媛県は104万6,720人が143万1,493人と、1.37倍である。1920年の日本の総人口は5,596万3,053人、それが2010年では１億2,805万7,352人（2015年は１億2,711万47人で減少に転じている）で2.29倍だから、東京都は全人口の伸びを大きく上回っている。

松山市は日本の人口の伸びとほぼ同じだけれど、愛媛県は1.37倍とかなり下回っており、大洲市に至っては、2010年時点ですでにかなりの縮小となっている。

このことは、日本の人口が大都市に集中しているだけでなく、愛媛県でも明らかに中核都市である松山市に人口が集中していることを示している。日本全体での人口格差だけではなく、地方においても中核都市と小都市、さらには中山間地との間で大きな人口格差が進行しているのである。

このことは、こと日本のように自然の力が旺

盛なところでは、さまざまな問題を引き起こすことにもなる。高齢化して人口も減少する中山間地では、旺盛な自然に対抗するため除草剤をはじめ農薬に頼る農が当たり前になる。年間数度に及ぶ農用地法面（中山間地では農耕地は狭隘でも、農耕地に付随する法面はかなり広い）の草刈りは、若者でもかなりな重労働なのに、高齢化すれば対応できなくなってくる。このような農薬や化学肥料に頼らざるを得ない現実に直視することなく、それを批判することはできない。

かつては、人口は比較的広く分散していた。大都市部に集中してしまった人口を、地方に分散できる施策が、いま求められているのである。地域の硬直した閉鎖的な社会構造も、このままでは地域消滅になることが肌で感じられるようになって、ようやく少し変化してきている（もちろん、まだまだではあるが）。そのような社会構造の改革と、さらには「暮らしの条件整備」が、おそらくこれからの人口分散化には不可欠な施策といえよう。

資本主義で対応できるのか

いま一見、グローバルな自由市場至上主義がまかり通り、時代を過去に揺り戻すかのような状況にある。資本主義による民主主義の破壊がそれである。グローバルな資本は国家の法制をすり抜ける一方、市民（国民）は国家に縛りつけられている。民主的に選ばれたはずの政府は、経済政策の名の下に資本のための政策を臆面もなく推進する。それは、98%を切り捨てた２%のための政策でしかない。いわば、資本主義が民主主義を破壊する状況になっているのだ。

しかし、ことに人口が停滞ないし減少する「産業社会型先進国」は、これから定常社会を目指すことになるだろう。環境はじめさまざまな資源制約（人口の減少はその前ぶれといえよう）により、つねに増殖拡大を求める資本の論理は通用しなくなる。

だが、過去を振り返ったとき、新しい時代が生まれる前には、ほとんど必ずと言ってよいほど、極端な反動の時期を経験してきた。新しい時代の到来は、若干の期待はあるにせよ、それ以上の不安を大半の人びとに抱かせる。

多くの人はそれゆえに、古い価値観にしがみつき、不安を忘れようとする。殴られ足蹴にされても、圧倒的多数の人びとは、殴り足蹴にする権力に抵抗するのではなく、すり寄っていく。もちろん、これまでの価値観の中で権力や富を持っていた、あるいは持っていると錯覚させられてきた人びとが反動に走るのは当たり前であるが、本来は犠牲者であるはずの者も率先して反動へと向かうのである。そのことが、さらに民主主義を破壊に追い込む。

残念ながら、愛媛の山里の状況は、殴り足蹴にする権力に抵抗するのではなく、すり寄って行くようにみえる。いや、そうしないと縮小する山里では、生き残れないのではないかという強迫観念からの、あるいは諦念からの行動なのかもしれない。だが、そのような対応が、ますます山里を窮地に追い込んで行く。国家と結託した自由市場至上の資本主義*のもとでは、生産性の向上などには縁のない「農」に頼る山里は、生き残れるはずもないからだ。

現在の山里の状況は、生産性という尺度による格差によって成立している現在の資本主義のあり方が端的に反映されたものといえる。もともと生産性という観点からは、山里の「ものづくり」はけっして高いものではなかった。農は自家消費用だけれど、木炭にしても木工品にしても、生産性という観点からは問題にもならないほど厳しい労働によって生産され、現金収入につなげていた。その現金収入によって、山里ではまかなうことのできない各種の生活財を購入していた。山里は資本主義以前から「交換経済」なくしては成立しなかったのである。けっして自給自足ではなかった。

そのような厳しさのなかでも山里での暮らしが成り立ったのは、現在と比べて圧倒的に小さく、かつ社会に埋め込まれていた市場（いちば）の中で、山里が生み出すさまざまな商品が取り引きされていたからである。その小さな市場がなくなれば、山里でのこれまでのような暮らしは立ち行かなくなる。

では、山里での暮らしが成り立ち、資本主義がなくなっても継続可能なあり方はあるのだろうか。

いくつかのアイデアはある。

これまでの山里では、意外なことに「多様性」はなかった。個々人は山暮らしの達人が多いが、たとえば作物でもみんなが一斉に同じようなものを栽培するから、収穫時には地域として同じものが有り余ってしまう。すでに指摘したようにそれを里で販売すれば、当然のことに大規模農業での収穫物と同じ市場価格でしか売れないから、労賃にもならない価格ということになる。

「山里の暮らし＝農」という既成概念を捨て、多様な職業の人が暮らす場として組み立て直すことで、人びとは互いの異なった能力を直接交換することができるようになる。多様な職業、それは「ものづくり」だけを指すのではなく、「ことづくり」も含むことになる。

もちろん、そのような構造が可能になるには一定程度の人口が前提になるが、このように脱皮できれば、山里の「農」でもやりくりが可能になるだろう。

その前段階として、これまで述べた「暮らしの条件」整備や都市的職業の人びとの移住が考えられるのである。もちろん、山里の側もこれまでの硬直した社会構造からの脱皮が要請されるのはいうまでもない。

＊国家と結託した自由市場至上の資本主義

自由市場至上といいながら国家と結託した資本主義とはどういうことか。それは、「潰すには大きすぎる資本」については、国家が税金を以て救済する措置が、いずれにおいても行われていることを指す。バブル経済時の金融機関の救済のみならず、福島の原発事故において本来は私企業である東京電力の救済のために多額の税が投入されていることなどをみれば、理解できるはずである。好況期には利益は企業のものであり、破綻しそうになると税による救済（国による救済）ということになれば、どこに「自由競争」の資本主義があるのだろうか。

〈第35回環境学習セミナー報告〉

東京学芸大学探検部創立40周年記念セミナーを開催して

黒澤友彦・小川泰彦

Memorial Seminar for the 40th Anniversary of Expedition Club of Tokyo Gakugei University

Tomohiko KUROSAWA and *Yasuhiko OGAWA,*
Institute for Natural and Cultural History

1．はじめに

1975年に自然文化誌研究会が大学のサークルとしてスタートし、冒険探検部との合併を経て、NGO（任意団体）からNPO（特定非営利活動法人）となって現在に至るまでに、実に40年以上の年月が流れました。その間に東京都小金井市、東京都五日市、埼玉県大滝村、山梨県小菅村を活動拠点として、北は北海道から南は沖縄、海外のタイと東奔西走、あっちに行ったりこっちに行ったりと、自然・文化・冒険をキーワードに活動してきました。

「未来を担う子供たちのために」「かけがえのない自然」と「先人たちが培ってきた文化」を生きたまま手渡しできるようにという副題をつけて、「自分たちの知的好奇心を満足させ」つつ、「フロンティアワーク」を目指して試みを続けてきました。今でこそ環境・自然・文化というキーワードは巷にあふれ、手垢まみれとなっていますが、こちとら誰も見向きもしなかった時代から自然や文化にこだわって関わり続けてきた身なので、自然と文化をテーマにした私たちの活動に自負がないといえば、うそになります。

しかし、とにかく過去を振り返ったり、反省したりすることが苦手でしたし、自分の足元のちょっと前あたりを見つめて、ただただ前に進んできた感のある本会です。関わる時期や時間に違いはあるにせよ、いろいろな人たちが40年の間活躍してきましたが、これまで先のことは考えても、過去のことはほとんど顧みたことがありませんでした。誰一人として……。創設40年を記念して、ここらでいったん自分たちのやってきたことを振り返って、未来へ向けた糧としようではないかという意見から、今回のセミナーの開催となりました（こういう意見が出され、しかも開催されること自体、本会のメンバーが年をとった証拠なのかもしれませんね）。

当日は懐かしいメンバーが集まりました。セミナーの中では、それぞれの活動がスライドや写真を交えて紹介され、当時の考え方や思いを振り返ってもらいました。本会の誕生秘話やこぼれ話をふまえて、木俣先生には「自然･文化」、塚原氏には「冒険」という切り口から、本会の活動の背景を解説していただきました。そして小菅村の亀井氏とともに、「小菅村の中で自然文化誌研究会が今後どのような活動ができるか」が話し合われました。

充実した時間のなか「おー久しぶり！」「元気にしてた？」と、久方ぶりの再会にみんな興奮気味でした。目が血走った青年が、目が血走ったおじ様となり、ちょっといかれたお兄ちゃんが、いかれた中年となり、ちょっと変わった女の子が、ちょっと変わったおばちゃんとなっておりました。ここで一つ気づいたことは、姿かたちは変われども中身はあまり変わらないということです。年に応じて責任やしがらみは増し、行動の制限なども増えたでしょうが、基本的な心根の部分は老いないということがわかりました。つまり、「私たちの会は心根の部分はちっとも変わらないし、これからも変わらんのだろうな」という思いを強くしたセミナーでした。

また、切れかかった人と人をつなげる糸が再びつながり、さらに強く結びつくことができたようなセミナーでもありました。忙しいなか参加してくださった方々、ありがとうございました。特に遠くから来てくださった方、感謝感激です。

2．最近の活動

1975年に「自然文化誌研究会（学大探検部）」の創設、1981年に「東京学芸大学冒険探検部」の創設、両者が1985年に合併し「自然文化誌研究会冒険探検部」となったのは、今回聞いて知った。私個人は、1996年に東京学芸大学へ入学。ちょうど20周年記念誌『らぞう』が発行された翌年で、40周年記念の現在、ちょうど中間世代と呼べようか。実際に、初期の冒険学校の参加者たちが同年齢の40歳となっている。

1996年の入学以降、現役学生の「冒険探検部」と卒業生及び関係者が関わる任意団体「自然文化誌研究会」は、ちょっと距離が出てきて、私自身も若いころは現役学生の「冒険探検部」一色だった。

東京学芸大学卒業後は、自然文化誌研究会の事務局長になり、今現在も「冒険探検部」や「サークルちえのわ（ちえのわ農学校主催）」と協力しながら、子どもたちの環境学習事業を進めているので、今となれば深く関係し、歴史も共有する仲間たちでうまく事業を進めていこう～という立場で生きている。「子どものための冒険学校」が大きな事業だが、それを創設したメンバーの目的や行動を聞きながら、やはり自分自身の「冒険」「探検」という関わりが問われる。

自然文化誌研究会は2004年にNPO法人化するとともに、現在の拠点となる山梨県小菅村に移住。私個人の移住ではなく、自然文化誌研究会の移住であった。この考えや行動のバックボーンは当時の理事や運営委員の面々であり、若かった私自身は、移住担当のような形で非自発的に小菅村へ向かったのである。私自身は深く考えることなく、小菅村の方々に指導を受けながら受け入れていただき、子どもたちの環境学習事業をはじめ、現在も進めている「植物と人々の博物館事業」などにも取り組んでいる。

私自身はたまたま小菅村に馴染み、たまたま実家を継ぐなどとは無縁だったので、小菅村に永住する目的で家も建てちゃったりして（この家造りについては、この10年間で本会が開催しているログビルダー養成講座の関係による）の現状である。

さて、40周年後の今後、自然文化誌研究会はどのように進んでいくのか。NPO法人であり、子どもたちの環境学習事業、博物館事業などを主催する団体としては、常に参加者のご案内や協力する（主に）学生スタッフの育成など、事業に必要な業務が存在する。なかなか「冒険」「探検」する暇がないかもしれないな、と感じる。この15年関わってきた学生たちも、「冒険学校」であるけれども、「冒険」「探検」を目指しているわけではないかな、と。

現在の「小菅村（だけでなく、そこから広がるフィールド）」は農山村で、まだまだ本物の事物があるので、そこで丁寧に活動を継続していくことが「冒険」「探検」になると、団体としてはよいのかな、と考える。

「冒険」：本物を知ることで、現在のおかしなことから考えや行動を変えられるかどうか。
「探検」：本物を知るための行動。

40年たった現在、こんな形でしょうか？
個々人が「冒険」「探検」することは大いに歓迎ということで。

〈資料〉
自然文化誌研究会冒険探検部創設 40 周年記念
『第 35 回環境学習セミナー』～環境学習の源流から未来へ～

【プログラム】
日時：2015 年 10 月 10 日（土）
会場：植物と人々の博物館
（山梨県小菅村中央公民館）

13：00 ～
［第 1 部］源流を探る・ふりかえる
（司会進行：中込卓男）
・探検部草創期（1975 年頃）：中込卓男、柴田一
・子どものための冒険学校・五日市時代（1988 年頃）：佐藤雅彦
・大滝村・エコミュージアム（1990 年代）：小川泰彦
・タイ環境学習キャンプ（1990 年代）：中込貴芳
・ぬくい少年少女農学校～ちえのわ農学校（2001 年頃）：菱井優介
・小菅村～現在（2004 年頃）：黒澤友彦

16：00 ～
［第 2 部］どのような未来へ行くか？
（司会進行：中込貴芳）
基調講演
・亀井雄次氏（小菅村商工会・観光協会・自然文化誌研究会理事）
・塚原東吾氏（冒険探検部創設者）
・木俣美樹男（自然文化誌研究会 学芸大学探検部創設者）

19：00 ～
朝まで宴会（小菅村の舩木民宿にて）

【案内文】
関係各位
本会が設立されて 40 年になります。そこで、40 周年記念企画として「環境学習の源流から未来へ」と題し、第 35 回環境学習セミナーを開催します。懐かしさも交えながら、ぜひご参加していただきたく、案内を送らせていただきます。
約 40 年前、1975 年に東京学芸大学内で創設された「自然文化誌研究会（学大探検部）」と、1981 年に創設された「東京学芸大学冒険探検部」は、1985 年に合併し、「自然文化誌研究会冒険探検部」となりました。その後、五日市や大滝村を経て、2004 年に「NPO 法人自然文化誌研究会」として NPO 法人となり、山梨県小菅村に拠点を持ち、現在に至ります。
その間に、現役学生を中心とした学大冒険探検部は継続し、子どものための冒険学校～ぬくい少年少女農学校を経て「サークルちえのわ」も誕生しました。
今回のセミナーでは、40 年間の軌跡をたどり未来を展望していきます。

【当日の出席者（順不同・敬称略）】
木俣美樹男、中込卓男、中込貴芳、小川泰彦、黒澤友彦、立川信史、岩谷美苗、塚原東吾、佐藤雅彦、大窪青樹、菱井優介、宮本透、鈴木英雄、柴田一、横山緑、塙拓真、井上典昭、日比野真士、山中進、由本圭、佐川勝史、吉澤武史、木下稔、亀井雄次、間瀬貴久、杠駿平、小川高宏
※東京学芸大学関係者のほかに、小菅村関係者、「子どものための冒険学校」の当時参加者などが集まった。

写真集

探検部草創期（中込卓男）

探検部草創期（柴田一）

子どものための冒険学校・五日市時代（佐藤雅彦）

大滝村・エコミュージアム時代（小川泰彦と大滝村の民宿中津屋の山中進）

冒険学校のころ（中央男性は小川泰彦）

冒険学校のころ（中込卓男）

写真集

小菅村～現在（鈴木英雄）

タイ環境学習キャンプ（中込貴芳）

基調講演（亀井雄次）

基調講演（塚原東吾）

基調講演（木俣美樹男）

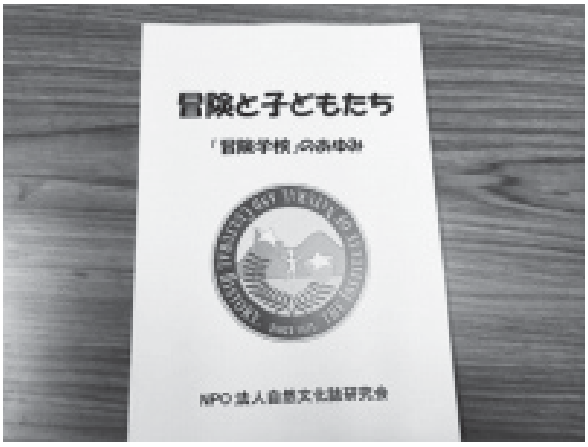
宴会　小菅村舩木民宿にて

最初に発行した『自然と文化』

1983 年ころの『野外学習』ほか

1990 年以降に入ってからの『冒探王』

「環境教育報告」「大滝村のマップ」など



40 周年記念に発行された『冒険学校のあゆみ』

最近発行を続けている『民族植物学ノオト』

〈第36回環境学習セミナー報告〉

『明日の小菅村を探る』～持続可能な地域社会の再検討～

黒澤友彦・中込貴芳・木俣美樹男（自然文化誌研究会）

“Searching for Tomorrow of Kosuge Village” — A Review on Sustainable Regional Community

Tomohiko KUROSAWA, Kiyoshi NAKAGOMI and Mikio KIMATA
Institute of Natural and Cultural History

1．はじめに

過疎高齢化や限界集落などの悲観的な用語が世間を飛び交うなかで、日本の山村は多くの課題を抱えながらも、素のままの美しい暮らしを、今に継承してきた。現在、人口700人余の小菅村でも、「源流の郷」や「エコミュージアム日本村」など、以前から多くの村づくりの取り組みがなされている。源流の郷（小菅村発）、エコミュージアム（フランス発）、トランジションタウン（イギリス発）、美しい村連合（フランス発）の４つの代表的事例から、その活動経験を学び、地方消滅論を再検討し、これを克服する方策を探ることにした。

2．地域社会づくりの経験

1）趣旨説明と挨拶

－－青柳諭（ミューゼス研究会代表）－－

第36回環境学習セミナー「明日の小菅を探る」～持続可能な地域社会の再検討～にご参加いただき感謝申し上げる。ミューゼス研究会は、日本の山村に伝承されてきた知識を調査し、伝統的知識・技能を学び、環境保全・創造する活動を通じて、持続可能な地域社会をめざす「エコミュージアム日本村」づくりを平成18年から行っている。成果を活かして８集落の散策マップを制作し、道の駅などにおいて来訪者に提供している。

今回のセミナーは、「源流」をキーワードにして地域づくり、村づくりを行っている小菅村において、源流の郷、トランジションタウン、美しい村連合の３代表から報告と、全国的に話題になっている地域消滅論についての講演をいただき、全国の山村が直面している課題等を検討する機会となればと思っている。

2）源流の郷小菅村

－－佐藤英敏（小菅村教育長）－－

小菅村は、昭和62年の「多摩源流まつり」の開催を機に『源流の郷』を意識したむらづくりを展開してきた。それは、小菅村が首都圏を流れる多摩川の源流域に位置するという現実からであった。

多摩川流域には、400万人を超える住民が暮らし、その流域と交流と連携を深めようというものであった。山々を源とする清流は、山郷を潤し、そのあちこちに生業が広がり、豊かな源流文化を育んできた。源流には、先人から受け継がれた「技」や「知恵」が存在している。こうした人間社会の源こそ、源流にほかならない。21世紀は、源流が輝き源流が大切にされる環境の時代だと思う。小菅村は、源流の価値や魅力を前面に出し、源流にこだわり源流を活かした村づくりを展開している。

環境の時代、持続可能な社会へのヒントは源流にある。便利さに依存しすぎてはいけない。源流という用語は1986年から使い始め、源流そば、源流の郷協議会、源流大学などの活動を進めてきた。また、東京都狛江市いかだレースなど、多摩川流域住民と交流を進めてきた。

3）全国のトランジションタウン活動と藤野の例

－－小山宮佳江（NPO法人トランジション・ジャパン共同代表／トランジション藤野メンバー）－－

トランジション活動は、持続可能な暮らしを

地域の仲間たちとともに創り出す活動。地域の資源を見直し、身の丈にあった「できること、やりたいこと」をしながら、人と人が楽しくつながることで息の長い活動を行い、シフトした地域を増やすことで、持続可能な社会の実現を目指している。

丁寧な暮らしと、環境とひとりひとりが尊重される社会の創造。世界をはじめ日本各地にこのトランジションタウンという活動のしくみが広がっている。相模原市旧藤野町では、知恵、心、実践、また自発性、内発性を大事に、無理をしないで人々をつなぐボランタリーな活動をしている。リーダーを固定していない。やりたい気持ちを大切に、自発性だけでもなんとか活動を続けることができている。

4）「日本で最も美しい村」連合が目指す地域社会の未来

－－杉 一浩（NPO法人「日本で最も美しい村」連合　常務理事）－－

NPO法人「日本で最も美しい村」連合は本年設立10周年を迎え、6月には北海道美瑛町での総会・戦略会議の開催に合わせて、「世界で最も美しい村」連合会の総会を開いた。連合組織の原点は、入会合否の資格審査があることと相互に学び合う場を提供することで、自立の村づくりを目標に据えて、成熟社会の持続的地域モデル構築を目指している。加盟町村の人口減を食い止めて持続的な美しい村を実現、地域資源を未来に継承するためには、経済的な自立と住民自治が2本柱。54の加盟町村には多様な分野ですぐれた先進事例を持った町村も多く、さらには仏、伊、独への学びの旅から自立の村作りの多くのヒントを得て来た。連合が継続的な学習活動で展開している自立の村作りへの先進事例を紹介する。

人々の営みがあって、多様性のある美しい村が維持される。自分たちのことは自分たちで決める、自立した村づくり。資格審査は日本・世界の先進事例を相互に学び合う場でもある。自給・循環型経済、地域経済の自立と住民自治で、地域にお金が残るようにする。リピーターは人々の交流と多彩な料理の味が魅力で増える。若者の雇用ビジョンが必要で、特色を出し、真の豊かさを探ることだ。

3．地方消滅から地方創生へ

－－山下祐介（首都大学准教授）－－

基調講演の詳細は別（48ページ～）に掲載した。人口減少は「選択と集中」という人々の心の問題である。都市化したところでも出生、子育てできるようにすることが先にある課題だ。今は東北地方でも出生率が急減している。都市の人々は農山村への支援を自覚し、住民と行政は相互依存的に協働しながら、自立をめざすべきだ。

4．地域（場）の伝統知に学び、暮らす～ムラを開いて広くつながる社会へ～

1）総合討論

①序列意識／価値から外れるという考え方

A：やりたい人がやりたいことをするので、固定的にリーダーはいない。ボトムアップ的な仕組みでチーム作りし、序列はない。トランジションで世界とつながるが、具体的な活動で地域をつなげる。

B：序列社会で生きてきて、疑問ももったので、美しい村の活動に加わり、別の人生の満足感を求めた。「村のエスプリ」、地域を守るために、住民によるコンビニ、地元で買い物をし、よそでお金を使わないようにする。

C：住民と行政のコミュニケーションが少ない。助成金は必要だが、依存してはいけない。

②小菅村と都市との交流の現状

A：多摩源流まつりを行う中で、ビジョンを策定した。源流親子事業（教育再生）で、8世帯20名が移入してきた。

③学校がなくなると、若い人が来なくなる

A：村を変えるのはIターン女性だ。地域おこし協力隊員は3年後にどうするのか。職場を作る必要がある。コンサルタントへの丸投げはよくない。住民が参画して構想を練るべきだが、役場職員が住民に協力を求めない。

B：小菅村では都市との交流はできている。未

表　事例の比較　　2015-11-14木俣

	エコミュージアム	最も美しい村	源流の郷	トランジション・タウン
発祥				
いつ	1971	1982	2005	2005
どこで	フランス、ウェッサン島エコミュゼ	フランス	日本、小菅村	イギリス、トットネス
目的・定義	ある一定の地域において、住民の参加によって、その地域で受け継がれてきた環境と生活様式をあらわす自然・文化財産を総体にして、恒久的な方法で、研究・保存・展示・活用する機能を保障する文化機関である。	田舎の小さなコミューン（基礎自治体）の存続と広域連携。特性ある歴史的財産など（社会的共通資本）をもとに観光内容の質を高め、価値づけたプログラムと観光情報を提案する。協会への加盟は規程の選定基準に即す。	日本の源流域は、国土保全や環境保全の最前線に位置しており、河川の流域だけでなく、我が国にとっても非常に重要な地域。会員一同その責任を自覚し、源流域の環境などを保全に務めている、源流の恵を共有する流域の皆さんと一緒に活動していくことが必要。源流地域の重要性を多くの方々に理解していただき、協力が広がるよう「源流白書」を作成し、源流域が存続していけるよう源流基本法の制定などを提案し、その実現に取り組んでいる。	復元力resilienceを再構築し、CO2排出を減らす活動を創り出しながら、移行モデルをめぐって、自己形成するような共同体を発奮させ、励まし、つなげ、支援し、養成する慈善団体。・・・市民が自らの想像力を発揮しながら、地域の底力を発揮し、これを高めるための実践的な活動。暮らし方を少し変えるだけで、楽しく豊かに、自由になれる。コミュニティの中で、変化を作り出し、実践、共有する。
活動内容	動産・不動産遺産の目録作成、資料保存・展示、催しの企画、コレクションの充実、調査研究・普及、報告、など	最も美しい村の呼称とロゴ使用の審査・管理。観光情報の提供。景観保存、都市計画・政策、文化・自然遺産の保全。	源流域の持つ豊かな自然環境の保全に務めるとともに、源流資源の役割と機能を広く国民に訴え、国民的な理解を広げながら、流域のシンボルとして源流域の安定した生活が持続できるように全国の源流の郷が心を一つにして「参加・連携・協働の源流の郷づくり運動」を推進すること。	健康的な人間文化を創造する。イベント、会議、研修、出版、などを行う。いろいろな手法で、世界をつなぐ。・・・エネルギーや食料の自給、心身の健康、環境変化への対応、社会的課題の共有、解決努力。伝統技術の継承、学びの場づくり。
組織基盤	地方自治体、公的機関、合同組合、アソシアシオン、財団、市民	州・県、町村の行政	町村の行政	市民、市町村の行政
規模	国際的に広がる 約90（フランス60、ベルギー3、カナダ1ほか、日本含まず） 1996	国際的に広がる フランス157（2014）、日本54(2015)、ほかベルギー24、カナダ36、イタリア208(2011)。	日本国内に限定 22 （2015）	国際的に広がる イギリス、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランド、イタリア、カナダ、フィンランド、ドイツ、デンマーク、ベルギー、オランダ、フランス、スペイン、アイルランド、ラトビア、チリ、ハンガリー、ギリシャ、ノルウェー、南アフリカ、イスラエルなど、公式登録は現在479、うち、日本　3（国内47、2015）
ネットワーク	MINOM　新博物館学のための国際運動 1983	世界で最も美しい村連合会、「日本で最も美しい村」連合（2005）	全国源流の郷協議会、全国源流ネットワーク	トランジション・ネットワーク、トランジション・ジャパン
関連研究組織	日本エコミュージアム研究会　1995			
小菅村での活動	エコミュージアム日本村　2000～		提唱	トランジション小菅　2015～

参考文献: 新井重三、1995、実践エコミュージアム入門、牧野出版。大原一興、1999、エコミュージアムへの旅、鹿島出版会。
R. Hopkins. 2008. The Transition Handbook~From oil dependency to local resilience. トランジション・ハンドブック―地域レジリエンスで脱石油社会へ―、第三書館。
Guide officiel de l'association. 2012. Les plus beaux villages de France, Selection Reader's Digest.

来思考、幸せと思えること、教育が大事だ。地域おこし協力隊員が自立できるか。

④村の一員として、排除の論理が働かないように、どの段階で受け入れを認知するのか。Ｉターンだけではなく、Ｕターンの在り方も考えるべきだ。

⑤共通する考え方「依存し過ぎない、自立する」、「自発性、内発性」：ボランタリーな活動が個性、多様性のある地域の在り方を形成する。自立というのは適当な妥協はするということで、反抗的ということではない。「序列」：たとえば、大学も序列社会である。その中にいて、個人として信条に従い、意見を述べ、必要があれば抵抗もし、行動する。心を閉じるのではなく、半開きにしておき、柔軟に対応する。学びの場を維持し、生涯学習の機会を拡大する。「学びの観光」、エコスタディ・ツーリズム。

2）まとめ

都市民は、健康で幸せであるために、自然の一員としてのヒトの暮らし方、素のままの美しい暮らしを農山村民から学ぶのがよい。地域（場）で長老たちから暮らしの技能を体験的に学び、手間暇かけて、自給の不便から学び、暮らしのあり方をゆっくりと自分で納得しながら、より良く変える。このためには、農山村民はムラ社会（実は都市も含めて、日本の社会組織の一般性質）をより開放的にせねばならない。こうして、農山村民と都市民の確かな連携、協働ができれば、永続する暮らしのあり方を探りながら新たな文明へと向かう可能性が開ける。この可能性を具体化する実践事例が、世界各地で行われている地域（場）で学ぶ活動において展開されている。

紹介された４事例を比較して、表１に特色を示した。エコミュージアムは、フランス発祥の

活動概念（1973）で、新博物館学のための国際運動（1983）というネットワークにより、主にフランス語圏に普及し、日本エコミュージアム研究会（1995）もある。小菅村でも同研究会大会を開催したことがある。

同様に、フランスで最も美しい村（1982）の活動が始まり、協会加盟には基準が厳しい。世界で最も美しい村連合会というネットワークがあるが、大方がフランス語圏に普及、日本は例外的で、日本で最も美しい村連合（2005）がある。源流の郷協議会（2005）は、小菅村役場から発祥した活動であり、日本国内に限定されている。

トランジション・タウン（2005）は、イギリスのトットネスで発祥した。市民活動であるので、前三者のように研究機関や行政機関の発想によらないので、日本を含めて急速に世界中に広まっている。エコミュージアム日本村はトランジション小菅を兼ねて、新たな市民活動概念を学び、吸収することにした。

自然文化誌研究会が提唱している「やあ山村、雑穀街道」は、湘南新宿ラインおよび中央ライン沿いに東西方向に都市をつないで普及しているトランジション・タウンを、南北方向に両ラインを横切って、すなわち山村と都市をつなごうと志向するものである。

事後の反省会の議論により、次回開催の「第37回環境学習セミナー」では、再度、首都大学東京の山下佑介さんに、さらにじっくりとお話ししていただくことにした。

〈資料〉
第36回環境学習セミナー
『明日の小菅村を探る』～持続可能な地域社会の再検討～

過疎高齢化や限界集落などの悲観的な用語が世間を飛び交うなかで、日本の山村は多くの課題を抱えながらも、素のままの美しい暮らしを、今に継承してきた。源流の郷（日本小菅村発）、エコミュージアム（フランス発）、トランジションタウン（イギリス発）、美しい村連合（フランス発）の４つの代表的事例から、その活動経験を学び、地方消滅論を再検討し、これを克服する方策を探る。

現在、人口700人余の小菅村でも、源流の郷やエコミュージアム日本村など、以前から多く村づくりの取り組みがなされている。これらの経験を自ら学び直し、また、他村の経験をともに学ぶためのセミナーにしたい。

日時：2015年11月14日（土）～15日（日）
場所：山梨県小菅村　役場および中央公民館
主催：NPO法人自然文化誌研究会、エコミュージアム日本村／ミューゼス研究会
共催：NPO法人ECOPLUS
協力：東京学芸大学環境教育研究センター
後援：小菅村

【プログラム】

11月14日（土）

『明日の小菅村を探る』
～持続可能な地域社会の再検討～

12:30～　受け付け開始（小菅村役場新庁舎）
13:00～13:20　趣旨案内と挨拶：青柳諭（ミューゼス研究会代表）
13:20～13:50　源流の郷小菅村：佐藤英敏（小菅村教育長）
13:50～14:20　全国のトランジションタウン活動と藤野の例：小山宮佳江（NPO法人トランジション・ジャパン共同代表）
14:20～14:30　休憩
14:30～15:00　「日本で最も美しい村」連合が目指す地域社会の未来：杉一浩（NPO法人「日本で最も美しい村」連合常務理事）
15:00～15:30　講演「地方消滅論の再検討」：山下祐介（首都大学准教授）
15:30～15:40　休憩
15:40～16:30　質疑応答など
16:30～16:45　まとめ：木俣美樹男（東京学芸大学名誉教授）
夜の部の会場は小菅村中央公民館、植物と人々の博物館の展示案内
18:30～20:30　懇親会（フリートーク・立食）
歓迎の挨拶：舩木直美（小菅村村長）

11月15日（日）

『小菅村を楽しむ』

＊トレイルマップをもとに希望者は各自散策可
9:00～　集合・説明
9:30～　体験へ出発
①こんにゃく体験と掛け軸畑
（橋立地区：木下新造）
②養殖業と天神山（川池地区：小菅一芳）
11:30　そのまま集合せずに解散（昼食は各自）

写真集

会場は小菅村役場新庁舎。司会進行はミューゼス研究会代表幹事の青柳諭さん。

各講演者の関係する資料を用意した。

小菅村教育長の佐藤英敏さんによる「源流の郷 小菅村」の紹介。

小山宮佳江さんによるトランジションタウンの紹介。

杉一浩さんより、「日本で最も美しい村」連合について。

首都大学東京の山下佑介さんによる基調講演。

写真集

総合討論では活発な質疑応答があった

懇親会では小菅村食生活改善推進委員会の皆様に郷土食を用意していただいた。

小菅村橋立地区の通称「掛け軸畑」。小菅村の面積の95%は森林であり、こういった南向きの斜面も少ない耕地の一つとして活用されている。主な栽培品種はこんにゃく（芋）で、かつては、こんにゃく（芋）の販売による「こんにゃく御殿」と呼ばれる家も建ったらしい。この掛け軸畑の特徴は、石積みによる段々畑ではなく、まさに掛け軸のごとく（スキー場のような）畑である。なお、小菅村では平成 26 年より「小菅村源流景観条例」が施行されている。

今回のコーディネーターは、小菅村在住 5 年目の岡本良太さん。小菅村での「地域おこし協力隊」3 年間を経て、そのまま小菅村に在住。今回のフィールドとなった橋立地区の古民家に住んでいる。現在は、一般社団法人を立ち上げ、地域物産の販売、環境教育事業などを行っている。

講師の木下新造（きのしたしんぞう）さん。橋立地区で生まれ育つ。現在、屋号の「日喜屋（ひきや）」ブランドで、（刺身）こんにゃくや漬物などの生産と販売を行っている。こんにゃくづくりの説明をうかがった。

橋立地区の散策。最近、小菅村に移住した一家も参加した。写真左上の柵は、イノシシ・シカ避けの柵で 2 年ほど前に設置された。今回訪れた「掛け軸畑」全体は現在、この獣避け柵に囲まれている。

〈第36回環境学習セミナー報告〉

人口減少時代における地域再生
～都市と農村、中央と地方の健全な関係を再建することから～

山下祐介（首都大学東京）

Regeneration of Regional Community in the Population Decreasing Age

Yusuke YAMASHITA, Metropolitan University Tokyo

1．地方消滅から地方創生へ

平成26年5月、日本創成会議による人口減少問題への警告に対して、政府は地方創生本部を設置し、現在、各自治体でその総合戦略の策定が急がれている。もっとも、そもそもの人口減少自体がいったいどういう理由で生じているのか不明確なまま対策が進んでおり、場合によってはかえって事態をこじらせることを危惧する。本稿ではあらためて人口減少とは何か、そのなかで地方は、また農山漁村はいかなる形で再生し、その存続をはかるべきか、検討を行いたい。

2．人口減少社会の正体

（1）人口減少と東京一極集中―都市化要因説

まず、政府が平成26年12月に策定した「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」で検討されている人口減少問題発生の問題認識について、確認したい。長期ビジョンでは明確に、東京一極集中が人口減少を引き起こしたという論理が展開されている。

東京一極集中が人口減少を引き起こす――この見解について筆者も異論はない。一般に、都市は農山漁村に比して出生力の弱い社会であるというのは、歴史人口学などの成果にも則った科学的常識であり、最も人口出生力の低い首都圏に出生を控えた若い世代が集まりすぎていることを問題視したものと考えられる。

そして、実際に都道府県別の合計特殊出生率を見れば、東京都で極端に低く（1.13：平成25年）、市町村別に見ても都市化（人口量および人口密度の増大）と人口再生産能力が反比例することは法則といってよいもののようである。また、人口を増やす側の農山村の人口割合が、すでに昭和の大合併期までに都市部のそれよりも小さくなっているので、その後のプロセスの進行が法則通りに人口減少を招いたと見ることができる。最も子どもが産まれにくい東京に若い人びとが吸収され、集住している。逆に、子どもが産まれやすいはずの農山村に若者はおらず、高齢者のみになっている。これでは人口減少に陥るのは当然である。

そして、この人口減少都市化要因説に基づくのなら、その対策は、①都市化が進んでも出生力を落とさないようにする対策と、②そもそもの都市部への人口吸収要因を除外することが中心的な対策になるはずである。そして、①はすでに農山村でも合計特殊出生率2を下回っているところがほとんどなので、都市農村双方に必要だとしても、②については人口集中する都市や首都圏側に焦点をあてたものになるはずであるが、実際の地方創生はそうした対策には展開せず、むしろ地方の側での仕事づくりや地方移住に集中して事業が進められている。そこには自治体間の人口の奪い合いも生じており、人口減少対策はより正確に、何が問題の核心なのかをしっかり見据えて追求していく必要がある。

（2）地方経済が弱いから人口は減るのか―低経済要因説

地方創生本部の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」は、対策の論理の軸を、まち・ひと・しごとの好循環を作ることにおいている。筆者もこの方針に同意する。しかし、その実際は「まずは仕事づくり」になっており、地方における雇用の創出が地方創生事業の骨格となってい

て、本来求められているはずの、まち・ひと・しごとのバランスを欠く構成となりつつある。この地方における仕事づくりに焦点をおいた対策は、人口減少の原因を「仕事がないこと」ととらえたものと考えられる。人口減少の地方低経済要因説である。地方に仕事がないから若者が残らない。だから少子化が進んでいる。まずは「仕事を作れ」というわけである。

だが、出生率の低下を経済で処理することには問題がある。むろん、ある地域に雇用が増え、若い人びとが増えれば出生数は増えるだろう。しかし、それは移動による効果であって出生力(率)が回復したかどうかは別問題である[1)]。そもそも、人口減少問題は高開発国に生じるものであり、低開発国は人口増社会なのだから、経済成長は出生力と相反関係にあるものとしてまずは考えなければならない。そして、最も仕事が集まっている東京都で人口再生産能力が最も低いという現実を直視するところからこの話も始まっていたはずで、地方に仕事を作れば人口減が止まるという論理には整合性がない。

もっとも、たしかに地方で人口減少の理由をきくと、しばしば「仕事がないから」である。今回の「地方しごと創生」は、そうした声にただ応えたものということもできる。ある意味では人口減少地域自身の常識を転換させる必要もある。

その際、さらに深めておくべき論点は次の二つである。多くの人が子どもが増えない理由を仕事がないからだとするが、では、①なぜ首都圏では仕事があるのにもかかわらず、低出生率なのか。他方で、②地方は仕事がないというが、本当にないのか。そもそも「仕事がない」とは何を表しているのか、である。

3．大都市圏の暮らしと地方の仕事

（1）都市化と出生力

なぜ首都圏では、仕事があるのにもかかわらず低出生率なのか。こちらから考えてみよう。

大都市には仕事はあるが、その仕事と家族や地域社会との関係が、出生というプロセスにとって悪条件になっている可能性がある。職住分離による長距離通勤、男女共働き、過剰残業など、仕事中心の働き方や、その働き方を優先した都市の社会構成は、家庭や地域での関係形成やそこに必要な時間を奪うので、当然ながら子どもを産んだり育てたりすることの障害になっているはずである。

つまりは、都市化（人口量の増大と高密度化）が進めば進むほど経済効率性は高まるが、家族や地域における暮らしの合理性は低まるので、生活問題の解決力は低下するから、このことによって家族と地域がもつ出生力は抑えられるということのようである。そもそも出生や子育ては（さらにはその前の結婚も）経済で行うものではなく、人間関係であり、家族や地域で行うものである。だから都市においても、家族や地域、あるいは職域の人間関係が豊富で、夫婦が子育て支援をインフォーマルに得やすい環境が整っているところでは、出生率は高いはずである[2)]。実際、大都市圏でも地域コミュニティが発達している下町や、企業社会が発達している企業城下町などでは出生率は高めに出る傾向がある[3)]。

なおその際、都市化との関係ではさらに次の点を付け加えたい。都市社会学では都市化の結果として、さらに「生活の社会化」（鈴木栄太郎、倉沢進など）を重視する議論がある。都市化はその社会の生活様式を、村落型の家族や共同体による問題解決方式から、公的サービスや市場利用による問題解決方式へと移行させるが、この生活様式の変化こそがまさに都市化のもたらす変化の本質なのだというものである。都市的生活様式への移行は、だから農山村でも生じる。そしてまさにこの変化が、本来豊かであったはずの農山村の出生力さえ減退させてしまった可能性がある。

そしてこの見方に従えばさらに、今回展開されているフォーマルな出生支援サービスの強化は、農村部を含め、国民のさらなる都市化＝生活の社会化を進めるものであり、家族や地域のもつ自立的な問題解決力を削ぐことになるので、人口減少都市化要因説に立つ限り、子育て支援サービスの提供が地域の出生力の上昇に本

当に寄与するのかどうかについては慎重であるべきだということになる[4]。

さて、このように考察すれば、都市化は高経済と相関し、それはさらに一方で人間関係を弱め、家族・地域の能力を低め、他方で行政・市場サービスへの依存を帰結して、本来持っているはずの人間の自己再生産能力を減退させるものだと説明できる。そして、こうしたことが人口減少の説明として妥当なのだとすれば、人口減少の都市化要因説と低経済要因説は相容れず、二律背反であって、そのどちらかをとるとすれば、現段階の我々の知見では都市化要因説を採用することになるはずである[5]。そもそも都市化要因説をとることから地方創生は始まったのであるから、背反する低経済要因説に則った現行の地方創生事業の方向性には大きな論理的欠陥（自己矛盾）があるといわざるをえない。早急にこれを改める必要がある。

（2）地方にない仕事とは何か

次に、地方、農村で「仕事がない」というのはどういうことか。このことについて考えてみよう。

先に述べたように、地方の人口減少の原因をたずねると、その最初にあがるのが「仕事がない」である。だが本当に仕事はないのか。ここでいう「仕事がない」とは、いったいいかなる意味なのかは十分に検討する必要がある。

「地方には仕事がない」という表現は、地方の実情を考えたとき、むろん正確ではない。仕事はある。いわゆる３Ｋ労働は人手不足であり、そもそも農業では耕作放棄地が増えている。農業後継者問題はとくに深刻で、産地化して高収益を実現していても担い手がなく、そこに海外からの農業研修員を入れてしのいでいるところも少なくない。内容にこだわらなければ仕事は地方にもあるし、むしろなり手がなくて困ってさえいる。

要するに、「仕事がない」のではなく、「つきたいと若い人びとが考える仕事がない」のであって、地域にある仕事と若者の就業意向とがミスマッチを起こしているのである。問題は、このミスマッチが何によって生じているのか、それをどう解消すべきかである。筆者は少なくともこうしたことが起きる要因について、これを職業威信の序列化という観点から説明できると考える。

仕事には序列がある。社会学ではこれを職業威信の配列によって分析する。職業はただ職種の違いや収入の多寡によって分かれるのでなく、その威信によっても配置され、認識されている。そして、そうした職業威信がその人の社会的地位や役割を決め、その威信に沿って人びとは行為し、また様々な決定を行っている。

農林漁業の威信は低い。それに対してサラリーマンが中間にあるとすれば、その管理職の威信は高く、学者、医者、弁護士などがその上にいる。公務員の威信はかつては低かったが、2000年代以降相対的に高くなってきた。そして念のために付け加えれば、こうした威信と収入とは必ずしも相関せず、むしろ威信の高い方が所得は低いということも多い。

では職業威信と、中央と地方、都市と農村の関係はどうなっているか。

ここにははっきりとした序列があり、同じ仕事でも首都圏の仕事の方が上であり、地方の仕事は威信が低いという関係がある。同様に地方の内部でも、農村の仕事より都市の仕事の方が威信が上で、大都市にある仕事ほどその威信は高まっていく。このことが修学・就業時の若者の移動を方向付けているのであり、首都圏や大都市に近づく移動は上昇だが、逆に首都圏から地方へ、都市から農村への移動は下降移動となる。「都落ち」という言葉がこのことを端的に表している。

首都圏＝中央に人びとが向かうのは、中央の仕事の格が地方よりも高いからである[6]。若い人に限らず、多くの人が各位の高いところへ移動しようと努力し、また一度高位をえた人間は、落ちぶれまいとしてそこにとどまろうとする。場合によっては、地方へと流れた方が、経済的社会的に有利になる条件があったとしても、この序列観に従って無理にでも大都市にいつづけようとするのである。

要するに、地方にない仕事とは威信の高い仕事であり、そして首都圏が頂上で大都市がその次、地方都市、農山漁村はさらに劣位に序列されている関係上、地方には威信の高い仕事は構造上ないということになる。そして2000年代以降における市町村・農協合併をはじめとする末端地域での職域のスリム化は、この序列意識をさらに推し進め、戦時期や高度経済成長期以上にこの上下関係は強まっているようであるから、この傾向が変わらない限り、地方にいくら産業をおこしても、「つきたい仕事」とのミスマッチは解消されないということになる[7)]。

4．東京一極集中の展開

（1）地方・中央の序列形成と国家威信

では、こうした序列化はどうやってできているのか。

まずはこの国の政治行政の仕組みがそうなっているというべきである。とくに政府・省庁と自治体との関係に色濃く表れている。

町村よりも市が、単なる市よりも中核市や政令指定都市が、そして都道府県が上位にあり、さらにその上に国がある。例えば国から県に出向する際、どんなに若くてもしばしば「長」がつく仕事になる一方、市や県から国に出向く場合には、年齢階梯を飛び越えた人事はない。なぜそうなるのかといえば、本来対等であるべきはずの国と地方自治体の関係が、制度面や実際の運用面でそうなっていないからである。

また、東京に主要企業の本社の大半が集まっているのもこうした序列に従っているからであり、その元をたどれば中央に主要官庁が集中しているからに他ならない。小さな企業でも東京23区内（とくにその一部）にわざわざ本社をおくのは、その地におくことが会社に威信を与えるからであり、威信が欲しいからこそ東京で会社を設立するのだということができる。そしてこうした政府・官庁、企業の動向に沿いながら、国民も様々な選択を行い、日々の活動が決定される。その結果が、東京一極集中なのである。

では、この威信はいったい誰が与えているのか。それはむろん国家である。国家の中枢が東京に集中し、その威信が周りを序列化し、末端まで行き渡るかたちで東京一極集中は構成されている。そしてこうした序列がさらに中央に威信を与え、さらなる一極集中化を強めてきた。

もっとも、威信は信じられてはじめて威信となるのであって、諸外国の例を見ても、政府が望んだからといって国家威信はそうたやすく確立されるものではない。威信は文化的なものであり、その成立には教育やメディアの効果も大きく、いわば国民との結託によって立ち現れるのである。他方で、威信のない国家は無秩序だから、威信序列は国家である限り必要なものでもある。しかし、現在の序列は何かが行き過ぎており、その行き過ぎがどこでどのように生じたのかが問題となる。

（2）戦後世代による職業・地域選択と威信序列

日本の国家威信の確立は明治維新以後、日清日露戦争を経て太平洋戦争時がその一つのピークといえる。しかし、現在のような東京を一極とした序列化は、高度経済成長期でもバブル期でもなく、むしろ2000年代以降に貫徹したものといえそうである。ここでとくにそのように分析する理由は、戦前社会から戦後社会への完全移行が、その担い手の世代交代によってこの時期にようやく達成されたという事実をふまえるからである[8)]。

2010年代の最高年齢世代は、大正末から昭和一桁生まれ世代である。この世代は戦前教育を受けた最後の世代であり、またこれが人口転換期の移行期世代とも言われている。多産多死期から少産少子期への転換期としての多産少子期を担ったのがこの世代であった。そしてこの戦前生まれの世代までは、その多くが農林漁業を中心に家業をそのまま親から継承し、中央－地方の威信序列はあっても、それが人びとの職業選択には直接結びつかない形で自分たちの暮らしを維持してきた。

これに対し、戦後生まれの団塊世代に至ると、農村から都市、地方から中央、そして農林漁業から工業・商業・サービス業への序列に基づいた社会移動が常態化し、その子世代・団塊ジュ

ニアまでには子育て場所が都市部へと移され、学歴主義が固定化し、就労先の大半が高度産業へと引き上げられてしまった。こうして世代間での広域にわたる地域住み分けと仕事の分業化が展開したわけだが、この世代転換は、職業威信の配列においては、次のような帰結を生んだ。すなわち、高齢世代ほど低い威信の仕事につき、若い世代ほどより高い威信の仕事につくという展開である。

さらに2000年代以降は新自由主義が政策としても実行されるなか、競争主義、効率主義、数値至上主義が浸透するようになり、農林漁業や土木業などの低次産業の価値（絶対的な価値ではなく、認識される価値）はますます低下した。加えて、様々な改革のなかで賃金は低下し、労働条件は悪化し、非正規雇用という形態も現れたので、この競争にとくにさらされた若い人びとほど下へと落ちぬように努力するようになり、序列はますます強く意識されるようになった。そして実際に最下層へと落ち込む人も相次いだのである。むろんこの間、セーフティネットも用意されたが、まさにそのネットに引っかかりたくないがために序列意識はますます強化された。

そして2010年代には、戦前生まれ世代が平均寿命に到達し、ここにきてようやく戦前生まれ世代から戦後生まれ世代への人員交替が完了することとなる（昭和10年代生まれから戦後教育世代になる）。それにともない、戦前世代が担ってきた仕事を新しい世代で埋める必要がでてくるわけだが、ここまで半世紀にわたって確立されてきた威信序列が、これまで安定してきた国民の職業分担に穴を空けることになる。というのもすでに、より若い世代ほど出身地の大都市化が進み、また高学歴化が進んでしまっており、そのため地方で本来担い手がいなければ困る類いの仕事についても「地方／農村を知らない」「大学／大学院を出てこの仕事にはつけない」「そんな仕事について何になる」という形の敬遠が生じたのである。しかも大学・大学院出身者は多数存在するため、人材のインフレが起きているので、高職域では人手が余り、低職域では人手が足りないという矛盾までおきた。威信の序列がここにきてついに、社会を維持するのに必要な仕事の再配置を妨げるまでに貫徹したということができる。

（3）過剰序列化の帰結としての少子化

威信の序列はこうして、本来多くの子どもを生み育てたはずの地域や職業に対する国民自身の忌避をもたらしたわけだが、序列の過剰化がもたらした少子化への効果についてはさらに、2000年代改革の効果を無視することはできないだろう。2000年代の改革は、その目的（行財政再建）はどうあれ、結果として国民心理に行き過ぎた切迫感を与え、このことが現在の過剰序列化につながった。が、問題はとくにそのタイミングである。2000年代が、いわゆる団塊ジュニア世代の結婚・子育て期と重なっており、ここで生じた過剰な競争が、巡りめぐってそこで生じるはずの第三次ベビーブームを抑止してしまったことが、今振り返ると、少子化対策として最大の失敗となったといわねばならない。

もっとも、2000年代改革の少子化への影響を過大評価するのもまた正当ではない。むしろ21世紀の子育て世代には、そもそも少子化に陥りやすい条件がそろっているからこそ、改革の心理効果が強く働いたと見るべきだろう。団塊世代から団塊ジュニア世代への展開を念頭に、大都市出身者（とくにその郊外）の増大と高学歴化がもたらした少子化への影響をさらに詳述してみたい。

農山村から大都市への生活の場の移行は、これまでの日本社会の基層にあった共同体型の問題解決機構を解消し、都市的な個人主義・私化を広く展開してしまった。少子化にとって、まずはこのことが大きいはずである。さらに、高学歴志向は晩婚化につながり、戦前までの大家族共同の総稼ぎとは違う、核家族・職場分離型の夫婦共働きへと移行して（この間には、転轍機としての専業主婦型核家族があった）、家族の持つ問題解決力も低下させてしまった。しかも大都市で働き、家族形成をするためには、郊外に居宅を構えねばならず、職住分離が極端な

形で進み、遠距離通勤も常態化した。そこで生まれた郊外出身者たちは、さらに脱地方化・高学歴化の志向を強めることになる。またその中で格位の高い仕事をえた人びとも、格位が高い職はそれだけの貢献を求められるものであるから、その地位を保持するためには期待に応え、滅私奉公を強いられることにもなった。

こうして脱共同体・脱地方・私化・学歴主義・仕事への滅私奉公が複雑に絡み合いながら競争社会・格差社会を生みだし、「この競争に勝たないと生き残れない」という強迫感がさらに職場の地位への固執（「大きいものにすがっておけば大丈夫」でもある）につながって、仕事と家族・地域との間に強い軋轢を生み、結婚・子育てという、昭和前半には放っておいても国民で勝手に実践していたことが非常に難しいものとなってしまったのである。

この事態はむろん、国民自身がこの競争ゲームから離脱した場合には逃れられる（脱サラ就農や専業主婦化など）。しかし、離脱は国家の否定、社会の否定でもあるので、個人としても国家としても望ましいものではなく、この国に所属し、貢献し、誇りを持って生きていたいと願う限り、国民はこのゲームから逃れられないし、逃れるべきではない。しかしまた、このゲームに参加する限り、国民はゲームの中で勝ち残る方法を、それもしばしば裏道や詐術をも探りながら画策するようになるので、ここではお互いの協調関係や共同意識は芽生えにくくなり、疑心暗鬼に陥っていくこととなる。しかもゲームに勝つのは少数なので、ますます勝者敗者の意識差が大きく開き、国民の分断も決定的となっていく。結果としては、国家共同体の崩壊を帰結することになるはずである。

本来、脱地域は、封建的共同体的社会構成からの個人の自由を確立し、主体的に参加する共同利益社会を生み出す条件として求められたものであった。また高学歴化も、豊かな教養と高度なスキルを多くの国民が吸収し、活き活きとした社会を作りだしていくためのものだったはずである。しかしそれもこれも、競争主義が介入したことで、他人を出し抜く手段に転化し、利己主義的思考法をますます助長するものになってしまった。

この競争ゲームのあり方そのものに手を入れ、持続可能なものへと調整しなければ、国民社会の分断はますます進み、その分断は国家の持続可能性をも危うくするものになるだろう。その表れが極端な出生率の低下であり、人口減少社会の到来なのである。夫婦という二者の共同関係すらきわめて困難なものにするほどの競争ゲームを（国家が、市場が）強いた結果が、子どもが生まれない社会である。国民一人一人ではこの事態を打開できない。ゲームのルールの変革そのものが必要である。人口減少社会の警告は、そのようなものとして受け止めねばならない。では、どのようにその軌道修正を図れるのだろうか。

5．地方自治の推進と様々な回帰

以上で明らかなように、地方創生本部が分析したとおり、人口減少（とくに止まらない出生数の低下）の正体はたしかに東京一極集中に由来するものである。だが、その影響効果の連鎖については慎重に精査する必要があり、今回各地で策定される地方版人口ビジョンや総合戦略の結果を元に、より周到な議論が重ねられる必要がある。とくに、創生本部も、また各自治体も、人口減少についてはそれを経済的要因に引き寄せて曲解してしまっている傾向があり、誤解に基づく事業は人口維持政策に悪影響を及ぼす可能性が高いので、早急にこれを反省し修正を施す必要がある。いずれにしても各自治体に義務づけているＰＤＣＡサイクルを、創生本部自身で総合的に実施していくことが絶対不可欠だろう。まずはこれからあがってくる各地の人口ビジョン／地方版総合戦略の積み上げ／精査からはじめる必要がある。

その際、人口対策を進める際の方向性として、ここで行った議論から拾い出せる論点を抽出し、この論考を終わりたい。

必要なことは首都圏への過集中を止めることである。その過集中の原因には中央集権構造があり、国の権限の過集中があるのだから、まず

はその過集中を止めなければならない。その意味では、この数十年来の懸案である地方分権改革をこの際一気に進めることが、人口対策に直結する可能性が非常に高いといえるだろう。一見、「風が吹けば桶屋が儲かる」ようだが、東京一極集中が人口減少の正体であると見据えた以上、地方分権は必ず進めねばならないものである。

もっとも東京一極集中の正体はまた、国民の政府・行政依存の結果でもある。中央集権・一極集中の裏側には依存がある。それゆえ、単に国から地方自治体への権限委譲だけが必要なのではなく、国民一人一人の社会への主体的参加や共同形成を促すことが必要でもある。そこでは、経済至上主義からゆとりある暮らしへの転換も不可欠となる。これらをふまえれば、依存＝集権国家から、自立を伴う地方分権国家への移行が、今回こそ本気で求められているということになろう。

そのために必要なことを、2000年代改革の結果に対する様々な反省をこめて、次のような多局面の回帰という形で示しておきたい。地方分権は、中央集権からの地方への権力・権限の回帰・分散であるが、それとともにさらに次のような回帰・分散を見通し、設計実現していくことが人口維持社会の実現のために必要である。

A．中央集権からの分散回帰

①［地方分権］政府・省庁への集権化からの回帰。都道府県、市町村、さらには各地域へと公共に関わる権限と責任を下ろしていくこと。

②［地方自治］国民一人一人が地域に参加し、自治体に参与して、多様なレベルで様々な共同連携を図り、自治を行っていくこと。

そのために必要な序列構成の再編において、次のような回帰・分散が必要となる。

B．就業と移動、人の流れの分散回帰

③［低次産業・小規模経営の生成維持］産業の比重を、高次から低次へと帰し、低次産業の存在意義を再評価し、その持続可能性を今一度確立していくこと。農業内においては小規模兼業の見直しとともに、その連携化をはかり（協同の見直し）、効率性とは別の角度で評価し支える仕組みを作っていくこと。工業についても、基礎的なものづくりの見直しと中小企業の再構成、またサービス・文化産業に関しても、高次化への偏重を抑制し、小規模かつ伝統的で基礎的な形態の業務・経営の再評価を図る。そもそも高次産業は、低次産業の豊かさがあってはじめて成長発展可能なものであり、低次産業が衰退すれば存続しえない。高次産業を維持するためにも、低次産業の持つ豊かな素地を維持・再生するという発想に切り替える。

④［田園回帰、ふるさと回帰、地方移住、定住対策］こうした地域間の序列、職業観の序列を、中央を中心とした一元的価値によるものから、多様な価値が並立できるよう配列し直し、人の移動を、周辺から中心への一方向から、周辺から中心への逆方向をも含めた多様性を作りだしていく。

またその際の政策論理として、次のような対立軸を意識し、社会の持続可能性を強く方向付ける必要がある。これは一方をいったん諦め、持続に特化するということである。

C．成長と持続の二律背反からの脱却

⑤［経済優先 対 暮らし優先］経済重視から暮らし重視へ。

⑥［成長優先 対 持続優先］成長発展から循環持続へ。働き過ぎからゆとりの創出へ。

⑦［開発主義 対 環境主義］豊かな自然環境の取り戻し。資源収奪型の発展政策から、資源管理や持続可能性を重視した政策への転換。

⑧［スケールメリット 対 スモールメリット］スケールメリット（規模拡大）から、小スケールの見直し・評価・存続へ。

グローバル経済競争にさらされているなかで、経済成長を諦めることには勇気がいるかもしれないが、人口減少社会に向き合うこととはそういうことである。働き過ぎが人の生まれな

い社会を作っているというのは日常的な国民実感でもあり、経済成長と人口維持とは二律背反であって、どちらかをとらねばならず、しかもこのまま人口減少が止まらなければ経済の現状維持すらおぼつかないのだから、本来とるべき道は一つしかない。そこまで追い詰められているという危機感が必要であり、人口問題研究所の掲げる将来人口予測はそういうものとして受け止めなければならない。

もっとも、経済成長をあきらめても、社会の成長、人間の成長は進めるべきであって、すべての成長を否定する必要はない。また健全な経済の維持を否定するものではなく、必要なことは人口減少に見合った適度な経済規模を見出すことである。

そして、こうしたことを優先するために、国民自身の価値判断の論理軸を、以下の方向へと傾けていく必要がある。

D．価値判断のウェイトを移行する

⑨［自由・平等・競争の論理から、共同・協同の論理へ］行き過ぎた競争主義、自由主義が結果として「自分さえよければよい」「今さえよければよい」という私化・現在主義を生み出した。しかし、本来の日本社会の形成原理は共同体主義・他者志向であり、また祖先崇拝と後進世代へ向けた自己犠牲（先達主義）であって、むろんこれらが行き過ぎれば問題も生じるが、あまりにも解消しすぎたことを反省し、日本的論理への回帰を果たし、地域自立の柱としていく必要がある。

⑩［画一性による秩序形成から、多様性の共生へ。より具体的には経済至上主義から、分業・貢献の多元的評価へ］他方で、「右へならえ」的な画一主義が日本社会の行動原理にはあり、それが過剰に発動して中央集権を強めてしまったことが東京一極集中の正体でもある。全国画一的な論理（とくに経済至上主義・効率主義）から、多様な地域、多様な生き方を認める多様な論理の尊重、多様なものの共生や分業の原理が、⑨とともに追求される必要がある。

以上のような社会の方向付けは、止まらない人口減少という緊急事態を迎えたなかだからこそ必要なものである。二者択一も、近年の政策論理や社会構成原理があまりにも一方向へと偏重したために強調されたものであり、逆に言えば、一定の人口維持が達成された時点で、論理軸のウェイト付けは再設定されねばならないということでもある。

とはいえ現時点では、日本創成会議が示し、地方創生本部が提示したように、人口減少問題はもはや対応せずにはおけない事態にまで進行しており、今後とも「平常が持続する」という幻想を払拭し、何らかの変化がなければ国家の危機が生じる可能性があるというリスクを認めることから始めなければならない。

E．来たるべき人口減少リスクへの対処にむけた危機感の醸成とその態勢づくり［リスク対応社会の創出］

そして、そうしたリスク対応社会の創出においてこそ、中央集権ではなく、分権型の小単位自立・協働型が望ましいのであり、①から⑩に掲げたような東京一極集中からの脱却・回帰・分散にむけた改良・改善が具体的に必要だということでもあるのである。

そもそも集中統合態勢による経済成長は、あくまで平常が持続するなかでこそ追求可能だったのであり、逆にリスク社会に入ったとされる現時点においては、この集中統合態勢そのものが国家のリスクとなっている可能性が高い。都市と農村が、中央と地方が、そして経済と暮らしが、相反せず両立し、多様な人びとが互いに連携し、共存しうる状態を、いかなる形で導き出せるのか。このことが、人口減少という事実に向き合って政治・行政が目指すべき目標であり、国民を適切に誘う道すじである。そして、こうして立て直された社会こそが、さらなる成長に向けて新たな歩みをはじめることができるのである。

註

1）反対に、人口を流出しても移動先で子どもを生んでいれば全体としては人口減少にはならないので、その限りで人口流出も問題にはならないはずである。地方での仕事づくりを少子化対策にするというのならば、「子どもを作りやすい仕事づくり」でなければならず、ただ仕事を作れば人口が増えるというのは短絡的といえる。事実、出生力の低下は程度の差はあれ、地方においても見られる全国的な現象である。これを改善するのが、今回の事業の本来の目的なのである。

2）専業主婦を選択している家庭は、こうしたインフォーマルな子育て力の確保を自前で行っているということになる。この場合、経済力を犠牲にして子育て力を保持しているのだから、やはりここでも仕事づくりは出生力回復には何ら関係を持たない（仕事が増えてもこの夫婦の子ども数は増えない）。他方で、共働きでも家政婦などを導入できる富裕層の場合は、金銭で子育て力を確保しているといえ、そしてこの場合にのみ、経済力のさらなる強化は出生力を回復させる可能性があるといえるだろう（家政婦雇用までできる富裕層でのみ、経済成長は出生数を引き上げる効果を持ちうる）。

3）以上の分析は、まだ一定の地域の数値データを一瞥した限りでの印象論ではある。詳細な検討は後日に譲りたい。

4）同様に出生支援金提供策なども、これによって子どもを持った親を集めてはいても、その出生力を強化したかは明確ではなく、むしろフォーマルな子育て支援の提供は「もらわねば損」という形で、家族の行政依存を強化している可能性もあることに注意したい。行政依存は財政負担を増大させるので、たとえそれが出生力をいくらか促進していたとしても、対策としてその方向でよいのかについては再検討が必要だろう。現行の少子化対策メニューは、行き過ぎた行政依存へと展開する可能性がある。そこで、こうした方向性を改めて、家庭育児重視の政策に転換しようという地域も一部に出てきている。

5）念のため付け加えれば、この二律背反は、人口量は小さいが高い経済力と出生力を持った社会を実現した場合には避けることができる。だがそれは、よほど特殊な産業か、不労所得を確立した地域においてのみ可能なものだろう。そうでなければ、高度な経済力を実現する小規模社会は、その具体像をどう考えてみても家庭や地域を顧みない過剰労働＝低出生力社会でしかないはずである。

6）同様に、大学の序列も一般にこのことによって決まっており、それゆえ若者は大都市への進学を目指すことになる。しかしながら大学については、国立・公立・私立の間の格位関係の中で一般に国立大学の威信は高いので、これが地方での人材流出の砦となってきた。近年取り沙汰されている国立大学の職業訓練校化は、こうした面から見て若い人びとのさらなる東京一極集中化を招く可能性が高く、地方創生の意図とは逆行するものになろう。

7）さらにいえば、この序列化を解消しないまま、地方の仕事づくりで若者を地方に帰そうという議論は、「地方にいる人間はこの程度の仕事でよいだろう」という地方への蔑視観を反映し、かつまたそれを助長するものである。序列は差別と排除に容易に転換し、また地方忌避や逃散にも発展するものなので、序列に関わる地方政策はこうした社会心理に十分に配慮して選択される必要がある。地方創生自身が地方差別や地方蔑視につながらないという保障は全くないのである。

8）正確には、移行はまだ現在進行形なので、「達成されつつある」である。拙著（2012）参照。

関連文献

増田寛也編，2014，『地方消滅』中公新書.

山下祐介，2008，『リスク・コミュニティ論　環境社会史序説』弘文堂.

————，2012，『限界集落の真実　過疎の村は消えるか？』ちくま新書.

————，2014，『地方消滅の罠　「増田レポート」と人口減少社会の正体』ちくま新書.

山下祐介・金井利之，2015，『地方創生の正体　なぜ地域政策は失敗するのか』ちくま新書.

欧米系諸国の雑穀見聞録

木俣美樹男（植物と人々の博物館）

A Record on Millets in European and North American Countries based on My Experiences

Mikio KIMATA, Plants and People Museum

1．はじめに

大方の日本人は雑穀を遅れた作物、貧しい人々の作物、最近では健康食品などと、昔の「日本の貧農民」がやむなく食べていた穀物という偏見をもって見ているようだ。しかし、夏作の雑穀類は縄文文化の系譜を継承し、冬作の麦類とともに、第２次世界大戦後までは、山村では多くの家族の主要な食糧であった。雑穀と称されるイネ科穀物は世界各地に多く栽培されており、地域によっては決してマイナー穀物ではない。しょせん、日本は極東の島国で、ほとんどのものを大陸からの伝播に頼ってきた。栽培植物でも、日本起源のものは蕗や山葵（わさび）など、ほんの少ししかない。

意外ではあろうが、キビやアワはヨーロッパでは、8500年ほど前から栽培があった。もちろん、日本に伝播するよりも古い時代のことである。ドイツからスイス、イタリア、ウクライナ、ロシア、ルーマニア、ギリシアに至るヨーロッパの主要雑穀はキビとアワであった。南部ではトウモロコシ、北部ではジャガイモが新大陸から伝播して以降、雑穀はこの500年ほどで急激に栽培が減少したようだ（Jones 2004, Werth 1937）。

それならば、現代の栽培状況はどうなっているのか、知りたいところである。欧米諸国では雑穀調査を主目的に行ったことはない。環境学習の調査、国際学会への参加、研究専念期間や観光旅行などで訪れた際に、博物館、美術館、大学、植物園、市場などを巡って、片手間ながら雑穀を観察してきた。したがって、雑穀栽培農家を訪れる機会には恵まれなかったが、このささやかな観察記録を書きとどめておきたい。

なお、おおよその記憶では、訪問先はイギリス（3回、約10か月）、デンマーク（2回、約2週間）、ドイツ（3回、約3週間）、フランス（2回、約2週間）、オーストリア（1回、約1週間）、オランダ（2回、約2週間）、スペイン（1回、約1週間）、ベルギー（1回、約1週間）、ロシア（2回、約2週間）、およびカナダ（3回、約2週間）、アメリカ（約10回、約3か月）、オーストラリア（2回、約2週間）である。

ヨーロッパで栽培されてきた雑穀は、イネ科のキビ、アワおよびマナグラス、タデ科のソバである。また、新大陸で起源した雑穀はイネ科のサウイ、マンゴ、ヒユ科のセンニンコク、アカザ科のキノアである。

2．植物園巡り

1）ドイツ

ドイツには、環境教育・学習調査（1996年6月）および観光旅行（2013年8月、2015年6月）で訪問している。

①ボン大学植物園：イネ科栽培植物20種ほどが近縁野生種とともに栽培展示されていた。キビ、アワ、ヒエはそれぞれ2系統ずつ栽植してあった。伝統的なコムギ畑が再現してあり、ヒナゲシやムギセンノウなどの随伴雑草も混在していた。

②ベルリン自由大学植物園：ボン大学植物園以上の広い敷地を有し、多くのイネ科栽培植物の栽植展示があった（写真1）。キビやアワも見られ、特にキビは15cmほどで開花し始めている個体と、25cm以上に生育しながら未開花の個体が混在していた（6月、木俣1996）。

③ハイデルベルグ大学植物園：キャンパス内の

写真１：ドイツ、ベルリン自由大学植物園の麦畑の生態展示、畑の中にはヒナゲシなど多くの随伴雑草が混ざっている。

写真２：イギリス、キュー植物園イネ科の庭に植えられている南米起源のイネ科雑穀マンゴ。

写真３：イギリス、エデンプロジェクトのイネ科穀物の生態展示、ヒエ、アワ、サマイ、コドラなど各地の雑穀が植えられている。

写真４：フランス、ルーアンのホテルの飾り、花瓶にはアワが活けてある。

写真５：カナダ、バンクーバーの花壇、紫色のトウジンビエが植栽してある。欧米ではイネ科植物が装飾に使用されることも多い。

植物園の規模は小さく、その一角にイネ科栽培植物の植栽された区画があった。雑穀類は見られなかった。

④フランクフルトのパルメンガルテン：アマランサスが花壇に植栽されていた。

2）イギリス

①キュー植物園：イネ科庭園の種まく人像の足元には世界中の麦・雑穀が植えてある。イギリスでは雑穀類は食べてこなかったが、植物学的な公正さで世界中のイネ科穀物が展示してある。南米のイネ科穀物マンゴは絶滅寸前である(写真 2)。東京学芸大学で保存していた雑穀種子は、東日本大震災後の計画停電および放射性物質による汚染を回避するためにキュー植物園に移管した。

②エデンプロジェクト：イギリス南西部のコーンウォールにミレニアムプロジェクトとして2001 年に創設された。面積 15ha、熱帯降雨林と温帯のバイオームがあった。3000 種以上の植

物が植えられている。来訪者は年間200万人以上（2004年）。現在はさらに砂漠のバイオームなども充実している。観光施設として見せる植物園であるが、植物の保存もしている。世界の雑穀類の展示、インド起源のコドラなども植栽されている（写真3）。国際イネ年の展示では、注連縄と日本のイネが大きなモニュメントとして展示されていた。アワ穀粒を成型した小鳥の巣箱も販売していた。

3．市場巡り

1）ドイツ

①ベルリン：市内の路上観察をしていた際に、自然食レストランの窓辺に、1穂のキビがコムギやエンバクの穂に混ざって飾ってあったので、翌日の夕食をここで取り、穂の入手経路やキビ料理について聞いてみたが、何ら情報は得られなかった。

②フランクフルト：飲食物に関する本を専門に扱っている書店があり、雑穀料理に関する小さな本が一冊あった（Hertling 1988）。栽培史や栄養学の記述の後に、多くの種類の料理法が掲載されていた。特にかゆ料理が多かったので、ユーラシア全域におけるつながりを示唆していると思った（木俣1996）。スーパーマーケットWESEでは、ウクライナ産とドイツ産のキビGold millet, Hirseを販売していた。カフェのテーブルの花飾りには、野生のキビ属の穂が活けてあった（2015）。

③ミュンヘン：キビの畑らしいものを1か所、非耕作地にキビらしい1個体を見た。

④ビュルツブルク：スーパーマーケットではイタリア産のキビや中国産のアワを販売していた。イタリア産のキビには精白ができていない30粒ほどの種子が混ざっていたので、小金井市と小菅村で播種したところ、よく発芽し、生育した。

2）フランス

ルーアン：ホテルのレストランの活け花にアワを使用していた（写真4）。

3）スペイン

①バルセロナ：高級スーパーマーケットに行くと、雑穀類ではキビ、ソバ、アマランサス、キノアが販売されていた。

②グラナダのスーパーマーケットでは雑穀は見られなかった。

4）アメリカ

①ヨセミテ国立公園：ミュージアムショップでは、アメリカマコモ（ワイルドライス）を売っていた。先住民に採集特権があるようだ。

②ホノルル：カイルアのスーパーマーケットではキビを売っていた（2014）、カハラのスーパーマーケットではキビやテフを販売していた（2015）。

5）カナダ

バンクーバー：スーパーマーケットではキビやキノアなどを販売していた（2014）。市内の植え込みには装飾用のトウジンビエが植栽されていた（写真5）。

6）オーストラリア

大学に研究用としてアワとキビを送った。

4．保存団体

1）ネイティヴ・シーズ・サーチ（Native Seeds/SEARCH）はアメリカ合衆国アリゾナ州のツーソンにあるNPO団体である。メキシコなどの先住民の在来栽培植物在来品種の現地保全と施設保全を行い、販売もしているが、イネ科雑穀ではサウイの保存を行っていた。これらをめぐる生物文化多様性の保全に努力している

2）オーストラリアのファントン夫妻の活動Seed Saversで種子保存の研修を受けた日本人も多い。

5．おわりに

欧米においては、雑穀に関するフィールド調査を行う機会がもてなかった。考古学文献の調査のために、イギリスのケント大学で研究専念期間を取り、ケンブリッジ大学、ロンドン大学、

キュー植物園、カンタベリー大聖堂図書館などを訪問した。幾人かの雑穀研究者に直接話を聞くことができて、考古学分野の視野が広がった。これにより、キビの起源と伝播の研究に関して一応のまとめを得ることができた（Kimata 2016）。

稲作単一民族説のような偏狭さにとらわれないで、植物学の立場から公正に雑穀の研究を進めていきたいものだ。縄文時代終晩期以来、雑穀によって命をつないできた日本民族がなぜ雑穀を軽視するのか。とりわけ、第二次世界大戦中やその後の食糧難の時に雑穀栽培は増加し、どれほどの人々が飢えから救われたことか。

現代の健康食ブームとしてではなく、民族の歴史からも、広く世界の見聞をふまえて、考え直したい。

引用文献

Hertling, W. 1988, Kochen mit Hirse, para-verlag, Darmstadt.

Jones, M. 2004, Traces of ancestry: studies in honour of Colin Renfrew, McDonald Institute for Archaeological Research, University of Cambridge, Cambridge.

木俣美樹男 1996、ドイツの雑穀、雑穀研究 9：6-7.

木俣美樹男 2015、ドイツ散訪、http://www.milletimplic.net/

Kimata, M. 2016. Domestication and dispersal of Panicum miliaceum L. (Poaceae) in Eurasia. Ethnobotanical Notes No.9：52-65.Werth, E. 1937, Zur Geograhie und Geschiche der Hirsen. (Zur Geograhie und Geschiche der Kulturpflanzen und Haustiere. XIII), Angewandte Botanik 19:42-88.

自分で日本国憲法を考える

木俣美樹男（植物と人々の博物館／日本村塾）

Thinking about the Constitution of Japan for Myself

Mikio KIMATA, Nihonmura College for Environmental Studies, Plants and People Museum

世界の現状では、菩薩の理想こそ、われわれ人類が生きのびる唯一の希望である。
いやそれは、どの生物の存続にとっても唯一の希望だろう。
貪欲と憎しみと無知の三毒が、われわれの受け継いできた自然と文化を破壊しつつある。
地球市民としてラディカルな菩薩の立場に立てないかぎり、
われわれは真っ当な死さえ迎えられないだろう（ロバート・エイトキン禅師[注1]）。

真理省の白い壁面に掲げられた三つのスローガンが再び目に飛び込んできた。
戦争は平和なり、自由は隷従なり、無知は力なり（ジョージ・オーウェル『一九八四年』）。

はじめに

70年安保反対・ベトナム反戦運動や水俣病被害者支援活動を学生として直接経験した。1968年に大学生になってすぐに「安保粉砕」と叫んで街頭デモをしてから、すでに久しく48年も経た現在、いわゆる「安保法案」に関わる論議を見聞きするにつけ、日本国憲法を読み直して、自分で考えてみようと思い立った。このくに（國、国）の今を決めるのは、将来を生きる若い市民たちだ。今や私は、郷愁に駆られて微力を尽くそうと国会周辺に出かけ、実際には若い人々の迷惑になるような「冷や水」も「老害」もする気はない。私は、M.K.ガンディーが暗殺され、また世界人権宣言が出された1948年に生を受け、学生時代と社会人時代（研究者）を送り、今はもう第3の個人的人生を送っている。私の分相応の役割は、調査研究や環境保全・学習活動において経験した事実を記録して、考え、随想することだろう。

解釈改憲はアンフェアである。憲法改正のための議論を広く起こすのが筋だ。もちろん、憲法は必要があれば、十分な議論によって改定・補足してよいのだ。私はいくつかの点で、憲法を改定・補足してよいと考えている。国会議員よりもむしろ市民が広く憲法学習会を各地で催して、じっくり時間をかけて考え、納得できるようにしっかりと話し合いたい。国会でも今から始めて、年月をかけてゆっくりと議論を充分に尽くし、その後、国民投票をする。しかし、「美しい日本国」（櫻井よしこ）という改憲論のパンフレットの標語の「美しい日本」には共感するが、「国」についての内容がまるで記述されておらず、この標語の空っぽの情緒と隠れた悪意に欺かれたくはない。

今次の「安保関連法案」は、明治維新の際に薩長同盟が策謀した「勝てば官軍」の政治手法がいまだに用いられて、民主主義を前提とする現憲法下の国会で、平然とした虚飾の弁論により、かりそめに成立したものだ。政権与党の明らかな詭弁・欺瞞の弁舌に、真に悲しいことに打ち勝つだけの弁論を展開できる野党の国会議員がいなかったのだ。多くの日本人の拝金主義や刹那主義の果てに、理よりも利を求め続ける不条理が、精神性の劣化、教養の低さ、心情の薄さを招き、市民の選良であるはずの弁舌さわやかな国会議員もいなくなったのだ。

1）若気の図書

いつの世も、名利を異常に求める人は、人々の欲望を煽り、恐怖で縛れば、人々は容易に支配できると考えるのだろう。書庫から古い本を探し出してきた。出版年から思い出すに、1968年に大学生になってすぐに、大学紛争のただなかで、自分が人生で何を成すかと考えるために求めたものだろう。おそらく見栄を張って購入し、書架に並べてみたが、当時、社会体験も少なく、難しくて読み熟せもせず、積読していた蔵書を、埃を払いながら改めて読んだ。プレハーノフ（1898、木原正雄訳1958）『歴史における個人の役割』と、カント（1795、高坂正顕訳1949）『永遠平和の為に』などである。今では、目に触れることの少ない図書なので、これらを探すための不便を避けるために、本随筆では文節の引用を多くしておいた。

大学生の頃には、映画『戦艦ポチョムキン』を見て、「一人は万民のために、万民は一人のために」などというスローガンによって、マルクス主義にもひと時魅かれたが、しばらくして共産主義という人たちやその国家の権力争いや蓄財の実態を見聞きし、内実が著しく異なることにひどく裏切られた。人は社会の中で自らの実体験から学びながら、思想的遍歴をして、人生観や世界観を形成する。学生の頃だったら、今、「中庸」とか「移行」とか言う私は「日和見主義者」と言われただろう。だから、今さらプレハーノフではないのかもしれないが、当時読みもしなかったこの本の題名は現在でも魅力的である。ヴ・ナロード（人民のなかへ運動）から、マルクス主義に向かい、晩年は社会主義革命には消極的であったそうだ。異国への亡命が長かったが（木原1958の解説）、誠実な人生であったと思う。

マルクス・エンゲルス（1848、マルクス＝レーニン主義研究所訳1952）は『共産党宣言』の最後の文節で、「共産主義者は、自分の見解や意図をかくすことを恥とする。共産主義者は、彼らの目的は、既存の全社会組織を暴力的に転覆することによってのみ達成できることを、公然と宣言する。支配階級をして共産主義革命のまえに戦慄せしめよ！プロレタリアートはこの革命によって鉄鎖のほかにうしなうなにものもない。彼らの得るものは全世界である。万国のプロレタリア団結せよ！」と記している。このように暴力を宣言しているので、この点においてだけでも、私は共産主義には賛同できないことを改めて確認する。

私は学生の時、全学闘争委員会側（いわゆる三派系全学連）の暴力に対抗する自治会側（いわゆる民青系全学連）の暴力的対応を回避させたことがあった。バリケード封鎖解除で両派が「ゲバ棒」を持って対峙、まさに衝突寸前の数千人を前にして、ラグビーの練習着のままでの一世一代の演説をし、素手で非暴力の封鎖解除を提案した。封鎖された校舎の屋上から石が降ってきたが、よくも負傷もせずに封鎖解除をしたものだ。私は学生時代、ついにどの党派にも属せず、おおよそ“全学共闘会議”ノンセクトから“ベトナムに平和を市民連合”シンパサイザーの位置にとどまった。三島由紀夫（後出）が陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で、演説、自決したのはこの頃だった。その後は、政治的な学生運動から離れて、“水俣病学生行動委員会”に参加し患者支援をしたが、1970年前後の体験を中心に、第一の人生を別稿でいずれ反省してみたい。

2）身土不二

雑穀研究の初歩を踏み入れた山梨県上野原市桐原（ゆずりはら）には、敬愛する古守豊甫（こもりとよすけ）医師が若い頃から関わってこられていた。学徒動員軍医としてラバウルでの戦時体験をふまえて、健康長寿への予防医学を現場で実践し、穀菜食の有効性を広く普及啓発してこられた。古守（1963）『南雲詩』より引用しておきたい。補給を絶たれたラバウルの10万人の日本軍がいかにして死線を乗り越えたかを、医師の立場から現場で調査し、深く考察している。玉砕を覚悟してでもなお、暖かく、冷静に、自分を失わず、先住民や兵士への気遣いを持ち続けた、本当に敬愛する、豪放磊落な人柄が本書の記述からわかる。桐原研究を契機として、親身にご指導、ご厚誼をいただいた。私は環境教育学を義務として構築し

たが、その本質は古守医師に揮毫していただいた「身土不二」にあると考えている。

いわんや国運を賭しての国家と国家との戦争、民族相互の戦闘において、敵陣に突入する兵隊たちの体力乃至気力の根源ともなるべき栄養の重要性については、ここに改めて述べる要はあるまい。今次の南方戦線で、あの惨状目を蔽わしめた戦争栄養失調症で、次々と斃れてゆく戦友たちの姿を、この目で、医師の立場で、目撃してきた私は、心の底からこみ上げて来る悲憤をどうする術もなかった。この点について親友の笠井武一氏（現在陸上自衛隊二佐）は、「それは糧を敵に求むるという、日本古来の旧い戦術思想に基く弊害である。」と私に語った。…科学性を無視した作戦ほど恐ろしいものはない。しかもそれは、人間がものを食べることなしには生命を維持し得ないという、もっとも原始的な本能を、余りにも過少に見積もったかと思われる点において、まったく科学性を伴わぬ南方作戦であったと評されても、仕方がないのではあるまいか。…要するにガ島生存者一万名は、糧秣を得ても運搬に堪え得る兵がいず、これを人体にたとえれば、その中枢神経にも比すべき軍の首脳部は、進攻、撤退、両作戦に対する思考能力を喪失するに到ったほどの飢餓状態にあったのが、その実情であったといっても過言ではあるまい。…ある日当番となった私は、その日の所感として、「現在内地との補給がまったく断たれ、薬剤は減少する一方であるラバウルの現況にかんがみ、われわれ軍医は、今後草根木皮の研究の必要性を痛感した。」というような主旨のものを書いて持って行った。と同時にわれわれは西洋医学、特にドイツ医学を習い、東洋医学の講座がなかったため、全然その知識がないのを残念に感じたと記した。…いずれにせよ、戦争―敗戦という厳然たる一つの事実に対して、いたずらに感情にとらわれることなく、史家によるあくまでも、純客観的、学問的立場に立った敗因の究明こそは、われわれが将来の国民に対して残すべき当然の責務ではあるまいか。過去といい、現在といい、未来というも、これは悠久なる「時」についての便宜上の表現であって、これら三者は一貫して流れるものである。過去の敗戦の歴史を正しく理解することは、やがてこれが現在及び将来の国民にとって、戦争防止への最もよき教訓として役立つことになるであろう。…「ピカドン」と称せられた「きのこ雲」が天空高く上がったと思う間もなく、人類がかつてその身に感じたこともない烈しい熱風と異様な閃光とは、たちまち地球を裂かんばかりとなり、一瞬にして二十万に及ぶ無辜の民衆の生命を奪い去った。これこそは人間の知能が生み出した原子物理学の悪魔的所産であることは、程経てそれと知らされたとはいえ、当時において果たしていくばくの人々がこれを想像し得たであろうか。…すでにここまで日本を窮地に追い込んだアメリカが、どうしてこの蛮行をあえてしたのであろうか。忘れんとして永久に日本民族の脳裡から、忘れ去ることはできないであろう。否忘れるべきに非ず。

これから日本国憲法の一部について引用して検討する。現在までに考えたことを１）私見主文、私見を支える所論を引用して、考察したことを２）補論として整理する。

この随想は市民として学習会などで議論する私の素材であるので、今後多くの方々との議論によって修正することになるのだろう。過去の歴史を知る者が、過去を論難することはできるが、その時空に生きていた当事者でない限り、複雑なこの世の状況判断と、行動の決定については、容易に論評などできない。歴史の事実を探求し、まずは私的に学び、それを現在と将来について参考にすることなのだろう。現今の政治家も行政官も、目先の私的名利に走るばかりで、将来も理想も見ようとはしていない。ただし、もちろんいつの時代、場所でも少数の立派な政治家や行政官、市民がいることを忘れることはないが、100年先を見据えた政策展望を提示することは、専攻研究によってなすべき学者の仕事（思想・哲学）であるはずだ。

1．建国の理念―敗戦日本のあり方について―前文

①日本国民は、正当に選挙された国会における代表者を通じて行動し、われらとわれらの子孫のために、諸国民との協和による成果と、わが国全土にわたつて自由のもたらす恵沢を確保し、政府の行為によつて再び戦争の惨禍が起こることのないやうにすることを決意し、ここに主権が国民に存することを宣言し、この憲法を確定する。そもそも国政は、国民の厳粛な信託によるものであつて、その権威は国民に由来し、その権力は国民の代表者がこれを行使し、その福利は国民がこれを享受する。これは人類普遍の原理であり、この憲法は、かかる原理に基づくものである。われらは、これに反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除する。
②日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、平和を維持し、専制と隷従、圧迫と偏狭を地上から永遠に排除しようと努めてゐる国際社会において、名誉ある地位を占めたいと思ふ。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。
③われらは、いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであつて、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従ふことは、自国の主権を維持し、他国と敵対関係に立たうとする各国の責務であると信ずる。
④日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ。

1）私見主文

憲法前文には、美しい言葉が散りばめられている。「自由のもたらす恵沢を確保、政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないように決意、主権が国民にあることを宣言、人類普遍の原理に反する一切の憲法、法令及び詔勅を排除、諸国民の公正と信義に信頼、…日本国民は・・崇高な理想と目的を達成することを誓う」などである（下線は著者による）。前文の文章の語尾は、確保、決意、宣言、確定、自覚、確認、誓うなどの動詞で力強く括られている。

日本国憲法が現政権与党やそのお先棒を担ぐ評論家たちが言うように、たとえ、敗戦による連合国側からの押し付け憲法であったとしても、日本人は武力による戦争を放棄し、平和は外交によって維持することを原則として、この70年間、他国を侵略するための国家による戦争はせずに、この憲法も変えようとはしなかった。

憲法の文言を字義通りに読めば、最近までの法解釈でも、「集団的自衛」戦闘行為は憲法に違反する。日本国民のマイナンバー、道徳の教科化、NHK受信料の支払い義務化、…「ママさんたちが『子どもを産みたい』という形で国家に貢献してくれればいいな」のような発言など、戦後70年を経て、今すでに戦前が準備されているに違いない。1053兆円を超える破産状態の中央政府の債務（「国の借金」の残高）を「チャラ（差し引きゼロ）」にするには、為政者たちにはいよいよマスメディアを誘導して国際的な危機を煽り、国民の目耳口を塞ぎ、国家主義から戦時体制へと向かうしか政治戦略がないのだろうか。

アメリカの歴史学者ジョン・ダワー（MIT名誉教授）は「現憲法下で、国民が反軍事的政策を守り、反軍事の精神を育ててきたことこそ誇りにしてよい。…郷土を愛するということpatriotismは狭量で不寛容なnationalismとは異なる」と言っている（朝日新聞2015年8月4日）。また、歴史社会学者の小熊英二は「日本は戦後に建国された国であり、この国の骨格は憲法前文に示されている国民主権と平和主義である。この意味で、天皇を国民統合の象徴と位

置づけた第1条、戦力放棄をうたった第9条が国民主権と平和主義という国の形を具体化している」と言っている（朝日新聞2015年8月27日）。

また、この随想には数十冊の本を引用したが、戦争の惨たらしい実態、人間の皮をかぶった悪魔の所業と、これらに抗って生死した常民、市民の生きざまが記録されており、読んでは、息（生き）苦しい思いをした。心の強い人でなくてはお勧めできない。こうした惨い体験をし、野に打ち捨てられた個々人の人生を受け止めて、これからの歴史では再びこのようなことが起こらないように、あまりにつらい事実を知り、戦争に強く反対、抵抗せねばならない。戦時でも美しく生死した人々はいた。また、何とか生き残り、強い怨念を抱きながらも、忍耐して強く生きている人々もいる。経験から学び、想像力で、彼らの心情に共感したい。

私は上記二人の発言に賛同したうえで、これから引用する著作から学び、憲法改定・補足に関する現在の暫定的な私見をとりあえず、「前文、象徴天皇、戦争放棄、思想・信条・信教の自由」に限定して検討する。これまでの歴史の結果的事実については、全共闘のようにことさらに全否定はせずに、部分肯定あるいは部分否定してもよいと考える。憲法についても、頑なに「護憲論」を唱えるのではなく、私はよい点を一層推進するように、必要な課題があれば改定・補足するのがよいと考える。自由・平等・友愛の民主主義、憲法に依拠する法治主義の下で、国家と市民の構図は上意下達であってはならないはずだ。市民の側から市民社会組織CSOはこの国のあり方、社会的共通資本重視へと政策転換するように提案すべきだ。このためにも、市民は自治の意志と能力を高めなくてはならない。

したがって、憲法改定・補足の方向は、中央政府の権限を縮小して、地方自治を拡充する、日本国民ではあるが臣民的ではなく、市民的な主権を一層重視する。中央政府の権限を制限して、地域自治体の権限を拡充する。小規模行政体での直接民主制による自治の可能性を描く。自由、平等、友愛という平和の精神と行動を前進させるように明示する、などを巷間に広く論議を起こして、検討したい。

2）補論

ソビエト連邦が崩壊したのち、ロシアや東ヨーロッパの国々では自殺者が急増した。当時これら諸国に続く自殺者数を示していたのは日本であった。国（くに、國）とは何かを考える参考に、国家が崩壊する現実を受け止められなかった人々の証言集を次に引用しておく。

アレクシェーヴィッチ（1998、松本妙子訳2005）『死に魅入られた人々』には、ソビエト連邦崩壊にかかわると思われる自殺者または近縁者の証言（インタビュー）が集められ、記録されている。彼女は私と同年齢であるが、別の場所で生を受けて、別の生き方をしながら、私とも近い思想的位置にいる。彼女が今年（2015）のノーベル文学賞を受けたとは、今までまったく知らなかった。

著者は序文において次のように述べている。気になる文節を書き出しておく。

> …一人の人間の声です。そのひびきはさまざまで、ひとつひとつの声に自分だけの秘密があります。こわい。そう、私は自分のこの本がこわい。…だまされているほうが楽なのです。この本を書く必要があったのだろうかという自分のためらいについて。おそろしくて、無防備なこの本を。私たちの歴史とはなんでしょうか。ふりかえってみると、見覚えのある死の王国に行きあたります。神聖で暗い神殿です。私たちはいったいなに者なのか。実は、私たちは戦争人間なのです。戦争するか、その準備をするかのどちらかで、ほかの生き方は一度もしてきませんでした。
>
> …そして、それが私に聞こえた。まさにその失望した人々、適応する力がない人々の声です。この人たちには何があったのでしょうか。それは明るい未来への信念だけでしたが、いまはそれもありません。この人たちはすべてをささげることができ、いつもなにか取りあげられることになれています。ところが、いたたまれないほど不思議なことに、最後の一切れのパンをささげよう、命をささげよう、

でも信念を自分たちに返してくれというのです。この人たちはふたたび幻想のなかへもどろうとしているのであって、現実社会にもどりたくないのです。ユートピアの誘惑。偉大なうその理解しがたい黒い魔力です。

…歴史的に遠く離れることは、それはそれで危険なのです。いま、すぐそこにあるのに信じられないような評価が、細部が、肖像が消えていきます。…私たちが今日の自分を恥じて過去をでっちあげ、修正をほどこし、忘れはじめることがないと、だれに断言できるでしょうか。

…人は、愛や孤独を理由に、自ら命を絶つこともあるのですから。それでもすべてに時代というものが係わっています。ましてや私たちは「全員が参加」する人間で、いままで一度も自分の孤独とむきあって生きたためしがないのです。私たちは思想とともに、国家とともに、時代とともに生きてきました。国家が私たちの全世界であり、宇宙であり、宗教でした。…そこに「政治的」自殺もつけくわえましょう。これこそが私の分析の対象だったのです。思想に生きていた人々、この空気、この文化のなかで育ち、その崩壊にたえきれなかった人々です。…思想というものは痛みを感じません。痛ましいのは人間です。…神話がおそれるものはただひとつ、まだ生きている人間の声です。証言です。もっともおどおどした証言さえも、おそれます。

…自由の身になれば、自分でものを考え、いっさいの責任を負うのは自分です。居心地がわるい。途方にくれる。フロムはこの状態を「自由からの逃走」と定義しました。…目撃者と参加者、迫害者と犠牲者が、ひとりの人物のなかに共存しているのです。そして、これがまた私たちの生きていた現実でした。私たちの時代でした。だから、誠実になりましょう。

…数世代の信仰が消されることになっても(それはおそろしいことですが)、長いあいだ、あまりにも長いあいだ私たちを支配してきたのは、死亡論、死の学問としか呼びようのない思想だったことを認めざるをえません。私たちが教えられていたのは、死ぬこと。私たちがしっかり身につけたのは、死ぬこと。生きることよりはるかにしっかりと。だから、私たちは区別がつかなくなったのです。戦争と平和の、日常と存在の、生と死の。痛みとさけびの。自由と隷属の。ここまではことばで考えたことです。ことばは今日無力なものです。人々の生きてきた道に語ってもらいましょう。

…芸術が私に思い出させ物語ってくれるのは神のことですが、家族のアルバムが語ってくれるのは終わりのない人間の小さな生命のことなのです。…耳をかたむけて記録すればするほど、私は、芸術が人間の内面の多くのことに気づきもしていないことを強く確信するのです。

…なにかのために私たち一人ひとりに自分だけの人生が与えられているのです。自分だけの道も。…この人たちは自分を殺そうとしたのです、妖怪〔注：国家の思想、神話のことか〕が生き残れるように。悪魔に鏡を見せる必要があります。自分の姿が見えないと思わせないように。…すべての問題は、妖怪にあります。この妖怪の息の根をたたなければ、私たちがそれに殺られてしまいます。

アレクシェーヴィッチは現代史の当事者である庶民が語る事実を記録するという手法で、自らの生き方をも表現したが、オーウェルは虚構によって、しかも激越な反語で表現した。

オーウェル，J.（1949）の最後の著作である『一九八四年』は、第二次世界大戦後に書かれた小説であるが、まるで近未来すなわち現代社会を予測するように書かれている。欧米や日本の現代にも残念ながら当てはまりそうな事象も少なからず描かれていた。たとえば、現象的には監視カメラがあちこちにあること、さらにはインターネットの普及は世界規模で情報の共有を可能にした表面に対して、社会を制御する裏面を有している。現代社会の底まで深く洞察すれば二重思考が潜在しつつある。二重思考というのは、簡単に言えば、立派な建前と欲得の本

音が矛盾しているにもかかわらず、同時に受容されることと理解できよう。

私は『カタロニア賛歌』を読んで以来、オーウェルの真摯な公正さ、良心に強く共感してきた。学生のとき、恥ずかしながら、社会主義小国は人びとを大切にすると好意を寄せていた、その結果が現在の北朝鮮の有様である。オーウェルが描いている社会そのものではないのか。それも小説ではなく現実だから、おぞましさを超絶している。核ミサイルを撃ち込むと脅迫している隣国に対して、私たちはどのように家族を守るのか。現実離れしたことが現実に起こる。映像で見るのも嫌悪する狂気の権力者が命令すれば、核ミサイルは日本に向かって飛ぶ。少し本文から引用しておく。

> …党は家族の団結を組織的なやり方で壊しておきながら、党のリーダーには、家族に対する忠誠心に直接訴えかけるような呼び名を与える。われわれを統治している四つの省の名前もが、厚かましくも、意図的に現実に反する名前となっている。平和省は戦争に関わり、真理省は虚偽に、愛情省は拷問に、そして潤沢省は飢餓と関わっている。こうした矛盾は偶然でもなければ、一般的な偽善から生じたわけでもない。それらは二重思考の計画的な実践である。というのも、相容れない矛盾を両立させることによってのみ、権力は無限に保持されるからだ。…権力を放棄するつもりで権力を握るものなど一人としていないことをわれわれは知っている。権力は手段ではない、目的なのだ。誰も革命を保障するために独裁制を敷いたりはしない。独裁制を打ち立てるためにこそ、革命を起こすのだ。迫害の目的は迫害、拷問の目的は拷問、権力の目的は権力、それ以外に何がある。…権力は相手に苦痛と屈辱を与えることのうちにある。権力とは人間の精神をずたずたにし、その後で改めて、こちらの思うがままの形に作り直すことなのだ。

ヨーロッパには生命を賭して、その時代の諸悪を明示して、望ましい「国の在り方」を提示した教養人が次々と出て、「国」とはなにか、どうあるべきかを、プラトン（375BC 頃）の『国家』など、先哲の思索をふまえながら、連綿と継承発展させてきている。毒杯を仰いだソクラテスの弟子である彼は、国家について幅広く詳述している。古来の文化・文明が達成してきた成果である古典から常に広く学びながら、現代を根底から思索し、全体として蓄積する学問的な態度は優れて高い教養人の在り方だと思う。

モア , T.（1516）の『ユートピア』はフィクションではあるが、彼が生きた不穏な時代に、最善の国家とはなにかを、ユートピア島の物語に仮託して、重厚に論じている。モアや親友であるエラスムスは 16 世紀のヨーロッパを代表する教養人である。大学生の時の英語レポートの課題で読んだことがあったが、改めて読み返してみた。私の原稿は再発見できなかったが、『ゆうとピア』などと題した童話を書いたような記憶がある。興味深い見解を引用する。

> …自分の方から好まない限りおこるはずのない戦争のために、平和な時には邪魔で厄介でどうにも始末の悪いああいう連中｛注：常備軍｝を、むやみやたらに養っておくということは、けっして国家のために当をえたものではないと私は思うのです。われわれは戦争についてよりも、もっと多く、千倍も多く、平和について考慮を払うべきではないでしょうか。…プラトンが巧みな比喩を用いて、賢人は国家のことに関わるべきではないといっておりますのも、以上のような理由からでありましょう。つまり、群衆が街頭に集って、毎日雨にずぶ濡れになっているのを見た賢人は、群衆に雨をよけて早く家に帰るようにというのですがなかなか相手は聞こうとしない。…ユートピアでは国民全部が子供の時には学問を学ばなければならないのだ。しかもその上、国民の大半が男も女も、肉体労働の余暇を利用して学問の勉強を一生涯続けようというのである。彼らは学問を母国語で教わる。言葉が豊富で、耳に快いし、それに考えを表現するのに最も完全で危気がないからで

ある。

…戦争や戦闘は野獣的な行為として、そのくせそれを好んで用いる点にかけては人間にかなう野獣は一匹もいないのだが、彼らは大いに嫌い呪っている。そして他の国々の習慣とはちがって、戦争で得られた名誉ほど不名誉なものはないと考えている。だから、たとえ彼らが危急の際に武器の取扱いにまごつかないように毎日軍事訓練に励んでいても、それも単に男ばかりでなく女までが日を決めてやっていても、それは自分の国を守るためか、友邦に侵入してきた敵軍を撃退するためか、圧政に苦しめられている友邦国民を武力に訴えてでも、その虐政の桎梏から解放してやるためか、そのいずれかでない限り戦争をするということはない。」

本書を訳した平井正穂（1957）は次のように解説している。

そこ｛注：オックスフォード大学｝には『新しい学芸』があった。文芸復興の祖国ともいうべきイタリアに新しい知識を求めに行ってきたヒューマニストたちがそこにいた。ここでモアはギリシャ語を学び、新しい文化・学問・人間観、総じてヒューマニズムといわれるものの洗礼をうけたのである。…エラスムスは年少のモアの中に終生の友を見いだし、二人の交わりはモアの死まで続いた。…エラスムス、このコスモポリタンは国から国へ放浪し、平和とヒューマニズムを説いて廻っていたが効果はないようであった。…モアの著『ユートピア』が近代的精神のマニフェストであることが、そこでは殆ど前提条件として了解されていよう。中世的な絶対主義から自らを解放しようとする近代人の、いわば自由の宣言であると考えられている。ユートピア国は人類の目標とすべき自由の天地であり、まさしく理想国家であり、進歩の極限とされている。…モアは宗教改革とともに起こりつつあった国家主義のかわりに、カトリック的信仰によるヨーロッパの連帯性を求めているのである。モアはルター的な暴力による革命を否定し、エラスムス的な理性による改革を求めているのである。

エラスムスの住居と薬草園

エラスムス（1511）『痴愚礼賛』では次のように述べられている。

さらに、キリスト教会が血によって設立され、血によって強化され、血によって数を増しております現在、ご自分の流儀でご自分に従う人々を守っておられるキリストがまるで姿を消してしまわれたかのように、教皇たちは剣でもって物事を支配されております。そして戦いというのは、人間ではなく野獣にふさわしいほど怪物的で、詩人たちもそれがフリアたちから送られてきたと想像するほど気狂いじみており、どこの習俗にも同時に疫病をもちこむほど有害で、最悪の盗賊たちによっても最善に処理されるのがつねであるほど不正であり、なにごともキリストと結びつかぬほどに不敬な事柄でありますにもかかわらず、彼ら教皇たちはすべてを捨てておいてもこの戦争だけはやりとげるのです。…プラトン的イメージに似ていると私に思われる事柄が生じます。実際、真実を知った後者はこれほど多くの誤りに取りつかれつづけている人たちの狂気を憐れみ、そして嘆きます。逆に、前者の人たちは彼をまるで錯乱している人物のように笑ったあげくに追放してしまいます。…多くの人たちは魂は目では見分けられないのだから存在していないと信じております。それとは反対に、敬虔な人びとは皆自

分の内の最初のものをすべての事物の中でもっとも単純である神に向かう努力に費やします。そのつぎではありますが、できるかぎり神に近く現れるもの、つまり魂、へと努力を向けます。彼らは肉体への配慮は無視し、富はまさしく切りつめ可能なものとしてほとんど軽蔑し避けるのでございます。

スイフト(1726)『ガリヴァ旅行記』は、小人国、大人国、ラピュタから日本、そしてフウイヌム国への渡航が記録されている。国の在り方を考えるに、大いに参考となる事例が多く示唆されている。とりわけ、フウイヌム国の有様からは学ぶこと多大である。ガリヴァは次のように記述している。

なるほどフウイヌムならば、戦争などという彼らにとって全く無縁の技術、ことに飛道具などに対しては、たいして用意のあるはずはない。しかしながら、もし我輩が国務大臣であるとしたならば、決して彼らの国を攻略せよなどという進言はしないと思うのだ。彼らの聡明、団結、怖いもの知らず、愛国心、そういったものは、戦争技術の欠陥くらいは優に償って余りあるだろう。…我輩の希望はこの高潔な国民を征服しようなどと考える代わりに、むしろ彼らの国からこそ相当数の使節の派遣を乞い、われわれのために名誉、正義、真実、節制、公共精神、克己、貞節、友情、善意、忠誠と、そういった諸徳の第一原理を教え、もってヨーロッパ大陸の文化を進めてもらうというようなことができれば、そして彼らの方でも、そのつもりになってくれればたいへん結構だと思うのである。

2．国民国家の形―象徴天皇について―第一章第一条～第八条

[天皇の象徴的地位、国民主権：第一条　天皇は、日本国の象徴であり、日本国民統合の象徴であって、この地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく。]
[地位の世襲と継承：第二条]、[天皇の国事行為に対する内閣の助言・承認と責任：第三条]、[天皇の権能、国事行為の委任：第四条]、[摂政：第五条]、[天皇の任命権：第六条]、[天皇の国事行為：第七条]、[皇室の財産授受：第八条]

1）私見主文

神話からの祭祀を信仰する人々にとってはいまだに天皇は拠り所となっている。天皇のために第二次世界大戦を戦ったと信仰している人々は、現人神ではなくともこの象徴によって救われたのかもしれない。三島由紀夫は万世一系の国体こそが文化だといっている。しかし、このような信仰は個人的には自由だが、信教の自由を保障する国家として強要するべきではない。民主共和主義の立場からすれば、たとえ象徴ではあれ、立憲君主と言っても天皇制は論理的に整合しない。市民社会においては、歴史的な差別を温存する天皇制は望まない。

天皇制は権力の二重構造としてあり、権力者の失政への責任逃れ、虚偽への権威づけに使われてきた。とりわけ、明治維新前後には、新たに権力を求めた人々によって、祭政一致と称する「国体」論によって、天皇は著しく政治的利用がなされ、国家神道の現人神にまで祭り上げられた。

天皇を利用して、責任の所在を明確にせず、責任を取らない政治体制はやめるべきだ。したがって、天皇の国事行為はなくすように改定するのがよい。ただし、天皇家が日本の上層文化の伝統を保存・継承することへの敬意はあってもよいので、天皇家の役割は歴史的な遺産としての上層文化の雅な伝統を宮中儀礼として継承される役割を担っていただくとよい。歴史的に見れば、武士が権力を握ってから、天皇家は長らく政治にはあまり関与されてこなかった。したがって、これは日本国憲法条文の規定でなくとも、祭政を明確に切り離し、別の法令で制度として位置づけることはできよう。

また、天皇家の役割には異国の立憲君主と同じように「日本民族」を代表しての表敬、儀礼

的訪問が今後も期待されざるをえない。なぜならば、第二次世界大戦での異国・異民族を侵略した結果の罪業を政治家・軍人、行政官たちは「明治維新」以来の手法を繰り返して、天皇制を傘にして帝国権力の責任を取ることなく、曖昧にして逃亡してしまったからである。したがって、彼らがとらなかった戦争責任を天皇家が祭事によって慰撫・慰霊しておられるのだろう。政治家には権力保持の意図がありすぎて、忘れることのできない戦争被害を受けた異国民、民族、市民には政治家の言舌ではその謝罪も慰撫も受け入れられにくい。

職業を失って社会的義務から大きく解き放たれ、やっと興味に任せて積み上げていた本を読み、郷土出版社の本に異なる視線からの史実が見える気がして、近現代史を私なりに学び、集中的に考えてきた｛注2：木俣 2014,2015 ほか｝。いつの頃か定かではないが次第に、あるいはユーラシア各地のフィールドワークの困難な経験によってか、明治維新前後の史実に対して、直観的にではあるが大きな疑問を抱くようになり、さらに第二次世界大戦前後の史実にも、論理的に納得がいかなくなってきた。

日本人は、他者の幸福を「お祈りします」あるいは「願います」と言うが、何に対して祈り、願っているのだろうか。主語を明瞭にしないのが日本語の奥ゆかしい言い回しだが、誰が誰に、の関係が不明瞭になる。「私個人」が神仏か、地祇に祈願しているのだろうか。こうした宗教的ではない、アニミスティックな信仰表現を、私も日本人も嫌いではないのだろう。天皇制に関わる信仰の在り方、信教の自由についても検討が必要だ。

天皇の象徴的地位は、雅の伝統文化を継承する点で尊敬されればよく、内閣総理大臣や最高裁判所長を任命するほかの国事行為に関することは象徴的地位の範囲を越えたことではないのか。無責任な二重権力の構造を秘匿・温存していると思われ、再検討を望みたい。皇位の継承や皇室財産授受については、新たな象徴的地位の範囲で、皇室典範を改定すればよい。しかし、前文に記されているように国民に主権があるのなら、将来は象徴天皇制あるいは立憲君主制ではなく、民主共和制に移行するように条項を補足することを検討してほしい。

2）補論

原田伊織（2015）『明治維新という過ち』は、金沢旅行の際に書店で見つけた。旅行すると、地元の書店に立ち寄り郷土出版社の歴史民俗書を探す。首都東京とは異なる歴史認識に出合いたいからである。私は中･高校生の頃､高杉晋作、坂本龍馬に敬意をもってきた。植物学の阪本寧男老師からは勝海舟の『氷川清話』を拝領した。原田の著作は明治維新の欺瞞・虚飾を暴こうとしており、共感する文節をまず引用しておく。

> …私たちの社会が危険な芽を孕んでいるのは、「近代」といわれる時代に入ってからの日本人が過去に遡って長い時間軸を引くという作業をしなくなったことが深刻に関わっていると、私はかねてより考えている。…日本人自身に自国が外国軍に占領され、独立を失っていたという“自覚”がほとんどないのである。従って、敗戦に至る過ちを「総括」するということもやっていないのだ。ただ単純に、昨日までは軍国主義、今日からは民主主義などと囃し立て、大きく軸をぶらしたに過ぎなかった。実は、俗にいう「明治維新」のときが全く同じであった。あの時も、それまでの時代を全否定し、ひたすら欧化主義に没頭した。没頭した挙句に、吉田松陰の主張した対外政策に忠実に従って大陸侵略に乗り出したのである。…明治以降とは、長州・薩摩の世であり、このことは根っこのところで大正、昭和を経て平成の今も引き継がれているということなのだ。即ち、私たちが子供のころから教えられ、学んできた幕末維新に関わる歴史とは、「長州・薩摩の書いた歴史」であるということだ。
>
> …坂本龍馬という男は長崎・グラバー商会の“営業マン”的な存在であったようだ。薩摩藩に武器弾薬を買わせ、それを長州に転売することができれば、彼にとってもメリットがある。グラバー商会とは、清国でアヘン戦

争を推進して中国侵略を展開した中心勢力ジャーディン・マセソン社の長崎（日本）代理店である。…グラバー商会の利益を図る龍馬が「薩長同盟」に立ち会うようになったのは極めて自然な経緯ではなかったか。…坂本龍馬とは、日本侵略を企図していた国の手先・グラバー商会の、そのまた手先であったということだ。

…勝海舟という俄か御家人は、徳川慶喜（十五代将軍）とともに長州・薩摩に幕府を売った張本人であるが、御一新後の勝の“思い出話”ほど信用できないものはないのだ。

…京都・八坂通りの夕靄の中に佇めば、会津藩士や新撰組隊士が腰をかがめて、長州のテロリストを求めて疾駆する姿が眼前に浮かび上がるだろう。二条城周辺の闇は、京都見廻組の幕臣に暗澹たる思いを強いたことであろう。そして、蛤御門に残る弾痕は、無防備な御所が紛れもなく天皇に殺意をもつ者によって砲撃されたことを訴えている。…歴史を皮膚感覚で理解するとは、その場の空気を感じとることだ。歴史を学ぶとは年号を暗記することではなく、往時を生きた生身の人間の息吹を己の皮膚で感じることである。資料や伝聞は、その助けに過ぎない。そういう地道な作業の果てに、「明治維新」という無条件の正義が崩壊しない限り、この社会に真っ当な倫理と論理が価値をもつ時代が再び訪れることはないであろう。

…「廃仏毀釈」とは、俗にいう「明治維新」の動乱の中で、明治元年に長州・薩摩を中心とする新政権の打ち出した思想政策によって惹き起こされた仏教施設への無差別な、また無分別な攻撃、破壊活動のことを指す。これによって、日本全国で奈良朝以来の夥しい数の貴重な仏像、寺院が破壊され、僧侶は激しい弾圧を受け、還俗を強制されたりした。…私ども大和民族は、それまで千年以上にわたって「神仏習合」という形で穏やかな宗教秩序を維持してきた。平たくいえば、神社には仏様も祀って別け隔てなく敬ってきたのである。これは極めて濃厚にアジア的多元主義を具現する習俗であったといえる。

…ところが、長州・薩摩の下層階級が最初にかぶれた思想とは実に浅薄なもので、単純な平田は国学を旗印に掲げ、神道国教・祭政一致を唱えたのである。これは大和民族にとっては明白に反自然的な一元主義である。ここへ国学の亜流のような「水戸学」が重なり、もともと潜在的に討幕の意思をもち続けてきた長州・薩摩勢力がこれにかぶれ、ことの成就する段階に差しかかって高揚する気分のままに気狂い状態に陥ってしまったのだ。…こういう手法は実に知性、品性にかける下劣な手法といわざるを得ない。

…ベルツは日記に曰く、『日本人は、自分たちの過去＝歴史を恥じている。また、日本には歴史なんかありません、これから始まるのです、という』・・ベルツ自身は、日本女性と結婚し、二十一年間も日本に滞在した知日家・親日家であるが、そういうヨーロッパ人が驚くほど日本人が日本的なるものを根底から否定し、自らを卑下していたのである。…ベルツが接した日本人の多くは、「成り上がり」といっていい当時の新しい上流階級、即ち長州・薩摩人や長州・薩摩に組した勢力の新興階級である。豊かな教養環境とはほど遠い下層階級から政治闘争（実際には過激なテロ活動）に身を投じた彼らは、俄か仕立ての水戸学だけを頼りに「大和への復古」を唱えて「廃仏毀釈」という徹底した日本文化の破壊を行った挙句に、今度は一転して「脱亜入欧」に精魂を傾けたのである。これほど激しい豹変を、それも昨日と今日の価値観が逆転するといった具合に短期間に行った民族というものも珍しい。どちらの態度も、己のアイデンティティを破壊することに益するだけであることに、彼ら自身が気づいていなかったのである。

…彼らは、これらを『天誅』と称した。天の裁きだというのである。これは、もともと「水戸学」の思想に由来する。そして、自分たちが天に代わってそれを行うのだという。もはや狂気と断じるしかない。…中でも吉田

松陰は、その扇動者であり、その義弟となる久坂玄瑞は、超過激テロリストとしか表現のしようがない存在であった。…高杉晋作という男は、吉田松陰直系の四天王の一人とされるほどの過激派であるが、私は実は肝の小さな男だったという印象をもっている。‥結局、高杉という「幕末稀代の英雄」像も、生き残り組の創った虚像とみるべきである。

…この事件 ｛注：相馬大作事件｝ が水戸藩藤田東湖と長州藩吉田松陰に強い影響を与えた、とはよくいわれるところである。藤田東湖とは、・・テロを肯定する狂信的な水戸学の大家であり、水戸学そのものが長州テロリストの理論的支柱となったことは否定しようがない。…恐ろしいことは、長州・薩摩の世になったその後の日本が、長州閥の支配する帝国陸軍を中核勢力として、松陰の主張した通り朝鮮半島から満州を侵略し、カムチャッカから南方に至る広大なエリアに軍事進出して国家を滅ぼしたという、紛れもない事実を私たちが体験したことである。

…昭和四十三（1968）年に燃え盛った七十年安保騒動とは、どこまで行っても単なる“騒動”に過ぎないが、彼らがいうようにそれが「闘争」だとすれば、・・動乱の渦中にも倫理を求めたい。それが、歴史についてものをいう私の「感情」の軸である。つまり、私がテロリズムを如何なる場合でも肯定することは断じてないのだ。

…「明治維新」については厳粛な史実が埋もれ、空論が幅を利かせてきたともいえる。空論というものは、容易に観念論へと発展し、善悪二元論へ行き着くのが常である。「明治維新」だ、「平成維新」だ、「第三の開国」だと喚き始めると、人はつい「歴史」という生身の人間の刻んできた小さな、ささやかな「命の足跡」の集積に鈍感になっていくものである。

…もともと、「維新」という言葉そのものが、水戸学（藤田幽谷）が生み出した言葉である。「攘夷」という言葉も藤田幽谷の“発明”であり、戦前の陸軍お得意の「国体」もやはり水戸学から生まれた（会沢正志「新論」）。つまり、右翼テロリズムに直結する言葉は、その多くが水戸学から生まれている。

…惨劇にあって百四十余年が過ぎた時、再び会津は東京電力という一企業によって惨劇を味わうことになった。大震災と原発事故からすでに三年半が経過したが、東京電力が今も“しゃあしゃあ”と営業していることが不思議であり、なぜこの犯罪企業を放置しておくのか、私には理解不能である。津波の襲来を受けてのこととはいえ、放射性物質の大量散逸は明白にこの企業の「重大な失態」であり、…事故の収拾とは、狭義に限定しても、放射能の排出をまず停止させることから、被害者への一義的な保障まですべてを含む。

…実は日本人ほど自国の歴史に疎い民族というのも珍しいのだが、この特性も御一新以降成立したものと考えられる。御一新以降現在に至るまで、昭和前期の一時期を除いて自国の歴史より西洋の歴史のほうに価値があったのである。

…昨夜まで「復古」「攘夷」を旗印にしておきながら、夜が明けたら途端に百八十度転換し、卑しいほどの西欧崇拝を新しい「お上」が押しつけたのであるから無理もない。明治の欧化主義は平成の今日まで続いているが、『西南の役』の五年後に浮世絵に憧れて来日したフランス人ジョルジュ・ピゴーでさえ、十五年以上の滞在の後、嫌気がさして離婚までして日本を去っている。

原田は、高杉晋作、坂本龍馬、勝海舟を良くは描いていない。私は今まで彼らに敬意を抱いてきた。少年時代に、鞍馬天狗や赤胴鈴之助を映画館で観た。初期青年時代には、奇兵隊を率いた高杉晋作の神出鬼没の活躍、「動けば雷電のごとく、発すれば風雨のごとし」はテレビプログラムで見た。颯爽たる勤王の志士が志半ばで病に倒れた姿が刷り込まれたのだろう。海援隊を率いてやはり志半ばで暗殺された坂本龍馬もテレビプログラムで見て、また同時に司馬遼太郎（1963 ～ 1966）の『竜馬がゆく』を読んで、

強固な結束と悲壮感をもった新撰組とは異なったおおらかで、楽天的な海援隊に憧憬を抱いたのだろう。江戸城無血開城を果たし、江戸の町を戦火から救ったといわれる勝海舟には、幕府権力の重役ながら、海軍操練所に多様な若者を受け入れた、その大様さが気に入っていた。しかし、原田に率直に疑問を呈されたので、もう一度、蔵書を再読して〔注：平尾1966、勝海舟1898頃（勝部編1972）、奈良本1965〕、事績をたどり直してみた。

私はガンディーやトルストイと同じく、不殺生、非暴力を是としているので、この反意として、高杉晋作、坂本龍馬らは、原田や小島（後出）が言うように確かにテロリストに違いない。もう一人、敬愛しているエルネスト・チェ・ゲバラも、原田やチョムスキー（後出）が言うとおり、確かにテロリストの係累に入るだろう。しかし、いくらかの歴史の結果を知った現代に生きる人々が、彼らの生き死んだ時代における彼らの行為に対して論評などはできないことだ。私が望むことは、歴史的事実を知り、そこから学び、自分の人生を律することだ。

私が尊敬してきた高杉、坂本、そしてゲバラには共通点がある。彼らは歴史を大きく動かし、巨大な旧権力に対する「革命」を成功させたが、新たな権力者の地位には自分の意思で留まることがなかった。結果としての病死・暗殺・戦死によって、名利を得られなかったわけではなく、自らの意思によって辞退したのだ。社会的に志を達しても、その後の名利から自由であろうとする生き方が好きだ。一方、勝海舟や西郷隆盛も自分がしたことの責任をそれぞれに取ったのだから、政治家としては尊敬できる。生き残った元勲らは、勝海舟が言うように、その多くは名利に取りつかれた、成り上がり権力者の屈折した虚偽・虚飾の「政治家・企業家」だ。とはいえ、この国をある意味で近代化し、西欧列強に対抗できるまでにしたのだから、歴史的には功罪ともにある。複雑な歴史において、一面的、部分的な毀誉褒貶の論評はともにあってはならないと考える。

徳川光圀の修史事業に始まった水戸学の系譜（とりわけ藤田東湖の思想、あるいは儒教・陽明学）や山鹿素行ほかの国学を思想的背景として、国家神道に向けて集約されたテロリズムによって、いわゆる「明治維新」が遂行された。勝海舟は藤田東湖を毛嫌いしている。その後も、明治天皇、乃木希典（松下村塾最後の塾生）、北一輝（二・二六事件の思想的指導者）、三島由紀夫から、最近では石原慎太郎、小泉純一郎や安倍晋三にまで辿ることができるようだ。小島毅（2006、2014）は、陽明学が「心情の純粋性」を至上の価値としてテロリズムを正当化する思想であり、宗教的熱狂を伴う魔力を有しているという。

幕末から明治維新にかけて欧米を訪れた新政府の高官候補者たちは、ヨーロッパの物質文明ばかりでなく、あるいはより以上に精神文化・文明、すなわちキリスト教に脅威をいだいたのだろう。何百年もかけて建設しつづける天にいたるような大聖堂、その内陣の荘厳さに圧倒されたのだろう。明治維新政府はキリスト教に対抗するために、天皇を現人神とする国教（国家神道）を創作することにした。薩長の「田舎侍」が田舎の天神地祇を踏みにじり、神仏習合した仏教を廃仏毀釈して、神仏分離を図った。宗教界には抵抗勢力も少しはあったものの、勢いのある権力の企みに再び屈して、国家神道の創作に加担していった。したがって、これは深い信仰を求めた宗教改革ではなく、最初から政治的な権力を補完する創作権威として、虚偽、虚構、不公正、まったくアンフェアな新興宗教、水戸学を援用して薩長藩閥政府がつくりあげた一神教であった。

さらに、柳田国男の稲作単一民族説は、この一神教を補完すべく阿ったのではなかったのか。遠野物語のような山人研究を捨てて、縄文文化の系譜である山間地の畑作農耕を卑下して貶めた。薩長藩閥政府の系譜は今日まで、自己の出自に劣等意識をぬぐえずに、キリスト教徒がエデンの園から追放され、農耕をせざるを得なかったことを卑下しているように、明治維新以後にはとりわけ農耕文化は、天皇一神教の強要と相まって、一層、低い仕事として軽蔑され

てきた。TPP参加はその最終結論ではないのか。

私が直観した「明治維新前後」と「第二次世界大戦の敗戦」への歴史的な疑問というのは、なぜ日本が歴史的に営々と刻んできた基層文化のよい伝統まで捨てて、過剰に西欧化しようとしたのか。なぜ、第二次世界大戦で敗北して、ことさらにアメリカ化したのか。明治維新以後の戦勝により尊大になった国が、敗戦によって誇りを失ったのか。「大和魂」が物量に負けたとして、アメリカ文明の物や金だけに拝跪し、アメリカのよい面である多様な精神性を学ばず、受け入れずに、浅はかな上辺の流行に翻弄されていてよいのだろうか。自然と対峙して営まれてきた日々の基層文化、常民の素のままの美しい暮らし、これを失うことをよしとするのか。本質的な、根底的な「啓示」につながる疑問である。

中国哲学者である小島毅（2006）は、この疑問について明快に論じている。彼の文脈の中では、靖国神社が天皇家のために戦死したテロリストを鎮魂する神社だという。新撰組や会津藩、彰義隊はもとより、西郷隆盛らも賊軍として祀られず、吉田松陰、高杉晋作、坂本龍馬らを英雄として祀り、しかし、蛤御門を攻撃した久坂玄瑞も合祀されているのは矛盾があり、「勝てば官軍」のご都合主義だということは明白だ。靖国神社は薩長の元勲が明治維新前後に戦死した同僚らの恨みを恐れて創った鎮魂施設のように考えられる。偉い人の神社は少なからずあるが、人が神として祀られるのは、後続権力者の権威づけのための虚偽あるいは増上慢はではないのか。天皇家の神社は伊勢神宮や熱田神宮であって、靖国神社ではないはずだ。小島の文節を次に一部引用しておく。

> プロローグ…靖国神社の起源が、「神道」にはないことに由来する。この神社は、実は「儒教教義に基づく社」なのである。…靖国神社―天皇制国家のために一命をささげた武人を祭る施設―の発想の大きな基礎は、彼｛注：藤田東湖｝がになった水戸学によって提供された。…天皇につきしたがった者のみが正しいとする、戊辰戦争のなかで確立したこの独善的な論理は、・・動機が正しい「大義」の戦いであったことだけを根拠に、いまだに「聖戦」を称揚し、「なぜ負けたのか」を問おうとしないその思考停止ぶりは、水戸学の大義名分論と日本陽明学の純粋動機主義とが結合した産物なのだ。…水戸学と陽明学が、政治的・思想的にはそれぞれ立場を異にしながらも、ある種の心性を共有する人たちを指す総称である・・。靖国に参拝する人たちも、靖国を批判する人たちも、同じこの心性を持つことの不幸。私が一番訴えたいのは、そのことなのである。

京都御所の蛤御門に弾痕の跡がある

さらに、小島毅（2014）の文節を次に一部引用しておく。

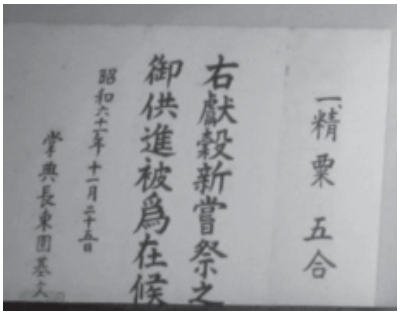
> はじめに…「国家神道」なるものが明治初期に創設されるにあたって、最も豊富な思想資源を提供したのが、ほかならぬ水戸学だった。
>
> …古代日本には籍田も先蚕もなかった。・・天皇みずから田植えをしたり、皇后みずから蚕を育てたりなどといったことを、朝廷では行っていなかった。・・中国儒教が説く王権祭祀は、日本には根づかなかった。ただ、江戸時代になると、儒教にかぶれた一部の大名たちが、自分のところで籍田・先蚕のまねごとを始める。水戸藩もそうであった。・・皇居で、私たちが現在目にする宮中儀礼は、正志斎らの流れを汲む儒教風神道学者たちが明治になってからこしらえた「創られた伝統」

にすぎない。「古式ゆかしく」というのは、神道という宗教言説のなかでのみ使うことの許される修飾語であって、学術的には完全に誤りである。靖国神社もこれと同じなのだ。

…北畠親房の『神皇正統記』は、天命思想の基調に乗りつつも万世一系の血の論理を前面に押し立てて王朝交替を未然に防ごうとしているし、本居宣長の『古事記伝』ともなると、完全に儒教の天命論を否定して、神の国日本を寿いでいる。日本に「革命」はありえず、したがって明治は「維新」であったという言説もこうした背景から生まれたのであった。おわりに…本来あるべき正しい「国体」の回復。それが「維新」の事業であった。その過程で命を落としたのが「英霊」である。…三島由紀夫が比喩的にいった「三種の神器」は、「モダンな人」たちがいかに笑い飛ばそうと、今なお多くの人の心に住み着いている。それこそが「問題」なのだ。…靖国神社は勤王の志士たちを顕彰・慰撫するために創建されたのだ。そこにこそ靖国の本質がある。…その勝者である薩摩藩や長州藩の系譜を引く平成の御代の首相たちが、近隣諸国の批判をよそに参拝するのは彼らの勝手だが、私は中国や韓国が批判するからではなく、一人の日本国民として個人的感情・怨念からこの施設への「参拝」はできない。・・靖国神社は、徳川政権に対する反体制テロリストたちを祭るために始まった施設なのだ。・・長州藩は京都御所に向かって発砲したことを謝罪したか？薩摩藩は江戸市中に放火したことを謝罪したか？…日本人は執念深くないな、とつくづく思う。でも、だったら一人くらい偏屈がいてもよいではないか。幕末のテロリスト許すまじ、という人間が。

私の遠い祖先はもちろん定かではないが、一説によると、楠木正成（橘氏）の三男正儀の子正勝（または正秀）、その子守清の系譜という。私の家紋は橘、祖父金之亟は岐阜県羽島市八神の出身、生母森昌子は近隣の桑名出身である。遠い先祖は南朝（吉野）に組して敗走し、伊勢から桑名に逃れ、さらに流転した。世をはばかり、また拗ねて、木から生まれた私生児「木俣」と改姓したようだ。「俣」は国字、『古事記』にあるように、大穴牟遅命（後の大国主命）の長男木俣神コノマタノカミ（御井神）は先妻、八上比売命ヤガミヒメとの間に生まれた。現在でも数か所で祀られている。しかし、須佐乃男命スサノオノミコトの娘で、本妻である須勢毘売スセリビメの嫉妬を恐れて、コノマタノカミを木の俣に置き去りにしたという。

新嘗祭は新穀を祖霊に供える儀式で（村上1977、中澤2010）、この催行のために、皇居ではイネとアワが栽培されているらしい。雑穀を研究している私は、農林水産省の担当者から、



献上粟（アワ）の栽培（写真上）と、栽培者たちへの天皇の謝辞（写真下）

アワの生育状況について相談を受けた際に、都内某所で栽培とだけ言われたので、私は皇居と拝察し、新嘗祭に興味をもった。その後、全国の何か所かで、3代前までの身元を確認され、選ばれた農家がアワを栽培して、天皇家に献上していたことを知った。山梨県小菅村でも2名が献上している。弥生文化のイネ（水田）のみではなく、縄文文化のアワ（畑）にも、表敬してくださっていると理解し、雑穀研究者として天皇家にはありがたく尊敬の念を抱いた。

しかし、上記（小島 2014）の第2段落の、大嘗祭（新嘗祭）の一部にある農耕儀礼が歴史的に古くはないとの記述が事実なら、私はとても残念に思う。なぜなら、律令制度の下ではイネのほかアワも租税として貢納されており、7世紀以前から天皇ご自身がイネやアワを手ずから栽培されておいでになっていた可能性に期待していたからである。しかし、たとえ江戸時代頃から始められた儀礼とはいえ、畑作雑穀も日本文化の象徴の一つとして大事に伝えてくださることは天皇家の重要な祭事の役割である。国事行為としてではなく、民族あるいは家族の祭事として、政治からは切り離して、伝統的な、雅の上層文化を継承していただきたい。

3．非戦の在り方―戦争放棄について―第九条

> **日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する。**
> **②前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。**

（1）侵略戦争と国家

1）私見主文

カントが言ったことに近似するが、現在に生きる私たちには非暴力、不殺生、つまり殺さない自由と殺されない自由が原則的にあるべきである。しかし、戦争時の異常な心身への強いストレスは、上記に引用した古守がラバウルで記録したとおり、人間を野蛮の中の暗闇に連れ戻す。恐怖の闇に隠れた妄想バーチャルが現に変化するのかもしれない。ありえない残虐が平然と行われてしまう。心の崩壊、壊死をとどめ、自律できる人はいるが、とても少ないのかもしれない。だからこそ、極限を超える恐怖の戦争はどうしても回避せねばならない。原初野蛮には素のままの美しいところもあるかもしれないが、そこには恐怖の暗闇に隠れている妄想が沈潜しており、人は文化的進化によって恐怖を減らす努力をして、妄想を自律制御するように、心の構造を洗練してきたのだろう。しかし、戦争は際限のない恐怖ストレスを及ぼし、悪魔的妄想を蘇らせて、現実と見紛う狂気に到らせてしまうのだろう。だからこそ、悪魔の所業にいたる戦争を決してしてはいけない。

文化的進化は生物的進化と離れないで、相伴って、そのままの美しい暮らしを追及するべきだ。人生は美しくありたい。美しく生きて、美しく死にたい。といえば、現実は今でも悲惨で、そんなの空想だと一蹴したい人もいるに違いない。だが、理想と空想は異なる。しっかり歴史から学び、時間をかけて地道に、粘り強く、よりよい個人、家族、地域社会、くに、あるいは世界を、話し合い、非暴力によって築いていくのがよい。洋の東西を問わず、先哲らが思索して教示したことから深く学ぶべきである。

第九条は戦争放棄のすばらしい宣言である。これまでの歴史では、軍隊は時の権力に従い、不服従の市民に暴力を振るってきた。だから、警察や消防などだけで十分で、できることなら正規の常備軍はないほうがよい。ところが、現実には、世界中に狂気の権力者やテロリストが存在しているので、話し合いによる外交交渉の努力を最大限度にすることは当然であるとしても、残念ながらすばらしい原則を唱えるだけでは、彼らから家族や市民社会を守ることはできない。日本国憲法では軍隊を持たないと述べているのに、強大な自衛隊があり、また一方で、在日アメリカ軍は日本国軍ではないという偽善

的解釈をやめて、第九条戦争放棄の原則を厳守するとしても、自衛隊を認知するように何らかの条項を付記するように改定・補足すべきだと思う。

ただし、今までどおり自衛隊は異国侵略のための戦闘はしないが、市民を異国侵略軍の狂気から守るため、カント（後述）の言のように、必要最小限の自衛戦力を有するものとするのがよい。また非常時には任意志願の市民自衛隊を訓練する指導者の役目を求めたい。しかし、憲法前文の理想に近づく努力を怠らず、将来には、世界的に軍縮を進めて、いずれ軍備は消滅させるべきものであることを第九条の条文の記述に加えておく。

自衛隊を憲法に位置づけるに際しては、その役割を第一が災害支援（後述）、第二に異国からの侵略への自衛に制限するなど、設置目的と責任、最高指揮系統を明確に限定する。とにかく、解釈改憲などという姑息な手法はアンフェアであり、日本の品位を損ねることである。

2）補論

①戦争と平和

高校を卒業する時、私たち生徒は古文の先生石原庸吉から、贈る言葉として「平和の戦士たれ」と言われた。そのせいか、カント（1795、高坂正顕訳 1949）の著書の題名『永遠平和の為に』に魅かれて求めはしたが、やはり小難しくて、結局、積読にしてしまったようだ。悲惨な現代史の世界を直視してみたい。私の経験は乏しいので、優れた観察眼と思考力をもった人たちの意見を聞いてみようと、改めて、著しく劣化変色したページをめくってみた。共感した文節を一部引用しておく（引用のため旧仮名遣いのまま、漢字は新字体にした）。

> …3『常備軍は時を追うて全廃されるべきである』　なぜかと言ふならば、常備軍は常に武器をとつて立ち得る用意が出来ているから、他国をして常に戦争の危惧を感ぜしめ、このやうにして互いに他を刺戟して無際限に兵備の優秀を競ふやうにさせるのである。その極、遂にはそれに費やされる戦費のため、平和のほうがむしろ短期の戦争よりも一層重荷になつてくる。かくてその重荷から脱するため、常備軍そのものが攻撃戦の原因となるからである。それのみではない。人を殺すため、或は人に殺されるために雇われるといふやうなことは、人間を単なる機械や道具として他のもの（他の国）の手に於て使用することを含意すると思はれる。これは我々自身の人格に於ける人間性の権利に恐らく合致し得ない。尤も国民が自発的に定期に武器に習練し、以つて自己と祖国とを他国の攻撃に備へんとするのは、これと全く趣を異にするのである。
>
> …しかしこのやうな内部闘争がまだ決定しないうちに、外国がこれに干渉するのは、自己内部の疾患と争つてゐる一個独立せる国民の権利を毀損せるものといふべく、それ自ら立派な暴動であり、あらゆる国家の自律を危ふくするものとみるべきであらう。
>
> …6.『いかなる国家も他国との戦争に於て、将来の平和に際し、相互の信頼を不可能にせざるを得ないやうな敵対行為は、決して為してはならない。例へば暗殺者や毒殺者の使用、降服条約の破棄、また敵国における暴動の扇動等々。』・・このやうなことは卑劣な戦略である。何故かと言へば、戦争中にも敵国の心情に関してなほ何らかの信頼が残存しなければならない。けだしそれは、このやうな信頼を欠いては、いかなる平和も締結するを得ず、敵対行為は結局殲滅戦になるかもしれないからである。けだし戦争は何と言つても自然状態における悲しむべき非常手段に過ぎず、暴力によつて自己の正当さを主張しようとするものだからである。且つ自然状態にあつては、どちらの国も不正な敵として宣告されることは出来ず、どちらに正当さがあるかは、戦の結果のみが決定し得るからである。
>
> …もしこれ｛注:世界公民的体制｝に対して、我が大陸の開化せる、特に商業を営む諸国家の残酷な態度を比較してみるならば、彼等が他の土地と他の諸民族を訪問する場合、彼等の示す不正は恐るべき程度に及んでいる。彼

等にとつては、アメリカ、黒奴諸国、香料諸島、喜望峰等々が発見された際、それらは何人にも属さない土地と見做された、けだし彼等はそこの住民を無に等しいと考へたからである。東インドに於ては、単に商業的植民を意図するのであるとの口実の下に外国の軍隊を移入し、それによつて住民を圧迫し、その諸国家を広汎な戦争に扇動し、飢餓、内乱、裏切、その他、人類を悩ますあらゆる禍悪の嘆きのあらん限りを齎らしたのである。

…自然は諸民族の混淆を避けしめ、諸民族を分離させておくために、二つの手段、即ち言語及び宗教の相違を利用してゐる。言語及び宗教の相違は、相互的な憎悪への傾向と戦争への口実を伴ふものであるけれど、しかし文化の向上と、原理上のより大なる合致へ人間が徐々に接近することとにより、平和の理解に導くのである。しかもその平和は、かの専制政治のやうにすべての力を弱めることによつて齎されるのではなく、しからずして力の活発な競争におけるその均衡を通じて齎されるのである。

②チョムスキーの自由論

チョムスキー, N.（2001）は「テロリズム」という言葉を米国の正式文書に定義されているとおり、「政治的、宗教的、あるいはイデオロギー的な目的を達成するため、暴力あるいは暴力の威嚇を、計算して使用すること。これは、脅迫、強制、恐怖を染み込ませることによって行われる」と理解していると言っている。この上で、「ニカラグアに関して、国際司法裁判所が国際的テロで有罪を宣告した唯一の国が米国であり、米国だけが国々に国際法の順守を求める決議案を拒否したことを、彼は特に思い起こす価値がある」と述べている。

また、テロリズムの政治的使用の定義を問われて、低集中度の戦争行為、「テロリズムは政治、宗教その他の目的を達成するため一般市民を狙って高圧的な手段を用いることである」と答えている。さらに、「国が攻撃された場合、防ごうと努める、可能ならば。この教義に従うなら、…。際限がない。そうした教義によって数百年の殺し合いの果てにヨーロッパが事実上、自ら絶滅を招く事態に到ったため、第二次世界大戦後、世界の国々は違う盟約を作り―少なくとも形式的には―武力の行使は、武力攻撃に対する自衛の場合を除いて禁じられ、安全保障理事会が国際平和と安全保障を守るために行動するという原則を立てた」と述べている。

チョムスキー（2001）『9・11 アメリカに報復する資格はない！』の訳者である山崎淳（2001）は解説で、チョムスキーの人となりを次のように紹介している。

後年チョムスキーは、ベトナム戦争反対などで盛んに活動するのだが、何らかの政党や団体に加盟することはしていない。自分は「加わる人」ではない、と言っている。チョムスキーが最も共感しているのは無政府主義、すなわち、真の自由主義者リベルテアリアンの世界を目標としているように思われる。この場合の自由とは、抽象的な哲学概念ではなく、あらゆる人間がその能力や才能をフルに開発できる具体的な可能性を示す。人間の歴史はこの方向に向かって進んできた。

チョムスキー（2005）『チョムスキーのアナキズム論』では、さらに的確な記述があるので、気になった文節を次に少し引用する。

…自由のために闘う民衆の献身と勇気は、そして恐るべき国家のテロや暴力に直面することをいとわないかれらのそれは、多くの場合すばらしいものである。意識は長い時間をかけてゆっくりと成長し、そしてかつてはユートピアとみなされ、せいぜい思いをめぐらすにすぎなかった目標が達成されてきた。根っからの楽天家ならば、この歩みを指して、今後十年、そして来るべき新世紀には希望がある。人間性は忌まわしい社会の病癖をある程度克服することができる、と言うかもしれない。‥自由の本性を否定することによって、人間は成熟に至る前に死に至ること、進化は行き詰まったこと、それだけが証明される。自由の本性を育むことによって、それが実在

するとすれば、われわれは恐るべき人間の悲劇と、そして同じくらいすばらしいことに取り組む方法を見いだすに違いないのである。

…思考や言語の根本要素が、不変の知的認識、着想のしくみ、そして経験や解釈、判断や認識の枠組みを規定する原理から引き出されるということは学べば学ぶほど明らかになります。こうした問題について学べば学ぶほどに、周辺的なことを別にすれば、規律は無意味であって、作為的につくられたものであることがわかるように思われるのです。心のしくみは、精神のなかで、自然に、内在的に決定づけられた経路に沿って成長します。経験に誘発され部分的には修正されるものの、しかしそれは明らかに表面的なものにすぎないのです。・・心のしくみは体のしくみと同じということになります―厳密にいえば体のしくみと同じようなべつの身体組織ということになります。私たちは、経験主義者や行動主義者の因習的定説をものともせず、精神や頭脳が他の自然界にあるものと同じであることを冷静に理解すべきなのです。それはいかなる確定的経験の範囲をもはるかに超えて、精神が、知識や認識、判断の豊かで明確な体系を発達させ、おおよそが他者と共有されていることに同意するということなのです。…そして直観と希望的観測にもとづいて行動する、逃れがたい必要性に私たちは迫られています。大切なのは、古典的自由主義者の教義はおそらく正しいであろうこと、そして、人民統制委員や企業や文化支配者、あるいは例によってみせかけの根拠で、私たちを操作し支配の権利を要求する者には正統性がないということです。

…アナキズムは生活のあらゆる側面での権威、ヒエラルキー、支配の仕組みを探求し、特定し、それに挑戦することにおいてのみ、意味があると思っています。これらは正当とする理由が与えられない限りは不当なものであり、人間の自由の領域を広げるために廃絶されるべきものです。これらには政治権力、所有や管理、男女や親子の関係、そして将来世代の運命に及ぼす私たちの支配（環境運動を支える原則的な道徳規範）等々が含まれます。これは言うまでもなく、国家や、国内・国際的経済の大部分を支配する、説明責任を負わない私的専制権力のような、強制や支配をおこなう強大な機構に対して挑戦することを意味します。・・権力には立証責任があり、それが果たせないのであれば、廃絶されるべきであるという信念、これが、私のアナキズムの本質についての変わらぬ理解です。

…同じ方法で生活のあらゆる側面を制御するということです。人間が生活全般でロボット化したっていいじゃないか、というわけです。そしてロボットになるということは、うわべだけの生活といわれることに関心が振り向けられることを意味します。つまり、流行にあわせた消費をすること、そして、他人に配慮しないこと、よりよい環境を作るために一緒に活動したりしないこと、世界が子供たちにとってよりよいものになることを省みないこと、などです。受動的な消費者に転じ、二年に一度の投票が民主主義だということを教えられます。命令に従い、ものを考えないのです。人間的な価値が無益な消費をどれだけやったかということと同一視されます。

…それ｛注：原始回帰主義｝を唱える人には共感しますが、かれらが、自分たちの訴えていることが数百万の人びとを大量殺戮するのに等しいことを認識しているとは思えません。というのも、現在の社会は、都市型の生活に構造化され、組織化されているんですから。こうした構造をなくしてしまうとみんな死んでしまいます。たとえば自給自足では生きていけません。結構な理想ではありますが、現在の世界では機能しません。そして実際のところ、誰も狩猟採集民の生活などやりたくありません。現代世界が私たちに提供する生活は実に多種多様なのです。サバイバルというわかりやすい言葉でかれらが訴えているということは、歴史上最悪の大量殺戮なのです。こうしたことを念頭におくとたいした話ではありません。

チョムスキーが「原始回帰主義」として、狩猟採集や自給農耕に強く反発しているのは、また、自分は「加わる人」ではない、と言っているのは、彼が多様で複雑な社会を単純化してみることを危惧し、一方で、都市の書斎人として、また「キリスト教的」な農業蔑視を潜在させていることを示しているのかもしれない。自然を忌避し、畏敬せず、支配しようとしてきた「ヨーロッパ文明」の範囲内にいるのだろうか。

この点では、私はチョムスキーに異議を申し上げたい。ヨーロッパの個人主義や自由主義、あるいは民主主義を学び、深く共感しているが、しかし、自然を科学技術で支配しようとするキリスト教的伝統は反省すべきであって、絶対的信教すなわち狂信をもって科学技術にはもう依拠しないほうがよい。チョムスキーが言うように、もちろん、人間社会はますます複雑であり、これをわかりやすく単純化して理解させようとすることには賛同できない。複雑な系は、複雑なものとして直観する修業が必要だ。学校教育では教えない学びの手法（環境学習原論）が必要だ。

③社会進化論

日本では、アナキズムというと、ひどい誤解のうえで、とても恐ろしい思想のように言われてきた。私は生物の進化を研究してきたので、日本人でダーウィンの進化論を（批判的に）紹介したのが、無政府主義者として知られる石川三四郎や大杉栄であり、彼らの議論には関心があった。無政府主義者は時の政府からひどい目にあわされ、幸徳秋水は大逆事件で死刑になり、大杉栄は妻女と甥とともに憲兵に暗殺された。

廣井・富樫（2010）は丘浅次郎を例証として「日本における進化論の受容と展開」について論じている。丘（1904）が『進化論講話』を書いた時代の背景は日露戦争の前夜にあり、内村鑑三や幸徳秋水らが非戦・反戦論を唱えて、激論が交わされていたという。

ここで、丘は「社会改良策を論ずるにあたっては、「競争は進歩の唯一の原因であり、」「力のあらん限り競争に勝つことを心がけるよりほかには致し方ない」のであり、人種維持の点からすると、「雑草を刈り取らねば庭園の花が枯れて仕舞ふ通り、有害な分子を除くことは人種の進歩改良に必要なことで」、尚一層死刑を盛にして、悪人は容赦なく除いて仕舞うた方が遙かに利益がある。」と述べている。また、「世の中には戦争を全廃したいとか、文明が進めば世界中が一国になって仕舞ふとか云ふやうな考を持つている人もあるが、此等は生物学上到底出来ぬことで、利害の相反する団体が並び存している以上は其間に或る種類の戦争が起こるのは決して避けることが出来ぬ。全世界が一団となって戦争が絶えるといふ様なことの望むべからざるはむろんである。」と記している

この論文（廣井・富樫）では、これらの見解に対して、同時代の幾人かからの批判を紹介している。北一輝（前出）が批判するのは、1）「最後の暗黒なる頁を以って社会進化論の宣伝を阻害し、社会主義に対する誤妄を伝播する力」があるから、2）「凡て獣類教の生物進化論と個人主義の生存競争説を遺憾なく発揮したる」点である。石川三四郎（無政府主義）は、1）生存競争だけでなく相互扶助も機能している、2）退化は同時に進化であり、生存競争も無競争も進化の原因となる、3）競技本能の闘争は生存競争と同じではなく、むろん自然淘汰の原因にはならない、などと激しく批判しているという。

小澤（1994）は、石川三四郎が進化論を全面的に拒否して、次のように言っていることを、農本主義的な実体験を持たない石川の観念的、審美的な自然観に過ぎないとにべもなく批判している。私は子どもの頃から60年余、農耕の実体験を続け、植物進化学の研究者で進化論を否定してはいないが、ここで批判されている石川の自然観にむしろ同調・共感する。すなわち、「…仰も吾等は地の子である。吾等は地から離れ得ぬものである。・・吾等の知慧は此地を耕して得たるもので無くてはならぬ。吾等の幸福は此地を耕すにあらねばならぬ。吾等の生活は地より出で、地を耕し、地に還る、是のみである。之を土民生活と言ふ。真の意味のデモクラシイである。」といっている。まさに、身土不二と

相通じる自然観である。

アナキズム（無政府主義）と言っても時代と思想家・実践者により大きく内容と行動が異なり、一括はできない。チョムスキーの引用で理解できるように、彼はテロリズムには真っ向から反対している。

ウドコック，J.（1962、白井厚訳 1968）によれば、クロポトキン（1842）も、本人はアナキストとは言わなかったトルストイも、非暴力の思想を提示し、小規模農耕の重要さを強く推奨している。人類の求める自由は非暴力による。以下、ウドコックの著作から引用する。

> …トルストイは、アナキズムを暴力と結びつけてアナキズムの名を退けたが、しかし国家および他の〈権威主義的〉形態に対する彼の徹底的な反対は、彼の思想を、はっきりとアナキスティックな思想の軌道に乗せる。彼の信奉者たちと現代の平和主義アナキストたちはトルストイが退けた呼び名を認め、“行動による宣伝”の平和化の一種として、現在の社会の中に〈自由意思を強調する〉社会―特に農業社会―を創ることに主として彼らの注意を集中する傾向があった。・・トルストイは無抵抗を説き、彼の最も偉大な弟子ガンディは、この教義を実践によって現そうとした。
>
> …マルクス主義者は、素朴な人びとを、すでに過ぎ去った社会進化の一段階を表すものとして、拒絶する。彼にとって、種族民、農民、小職人などのすべては、ブルジョアジーや貴族とともに、歴史の残物の上につみ重ねられる。共産主義者の現実政策は、現在の極東におけるように、時には農民との接近を求めるだろう。しかし、そのような政策の目的は、常に農民を、農業のプロレタリアに変えることである。他方、アナキストたちは、農民のなかに、非常に大きな望みを託してきた。農民は、大地に親しみ、自然に親しみ、それゆえに、彼の反応のしかたはより“アナーキック”である。
>
> …クロポトキンを知る者は、しばしば、今日われわれの時代にガンディーやシュヴァイツアーのような人びとのために用意された神聖な口調で、彼について語るのだった。…クロポトキンは一九世紀の半ばに生まれ、多くの面をもった進化主義を彼の思想の構造そのものの中に吸収し、それゆえに、彼にとって自然の過程としての革命という概念は、天啓としての革命というバクーニン主義の概念よりも、必然的にもっと共感のもてるものであった。
>
> …彼はまず科学に方向を転じ、東シベリアと満州辺境地域を探検旅行する機会が続いて与えられたのを喜んだ。ここで、コザック兵や土地の狩人と共にあって、単純な腐敗していない生活を発見した。その生活の魅力は、彼の後半生の著作を通してみられる、原始的なものへの礼賛に疑いもなく影響している。素朴な人びとの生まれながらの温厚さを信頼して、彼は常に武器を持たずにでかけたが、人間の敵意からする危険には一度も出会わなかった。
>
> …彼は、社会変革の進化的側面をますます強調し、それに、急激な革命的大動乱よりも、むしろ社会における平和な進歩を結びつけるようになった。彼は、暴力的手段をますます支持しなくなり、一八九一年にはすでに、ある演説のなかで、アナキズムは、“世論の成熟により、混乱ができるだけ少なく”到来するだろうと述べた。
>
> …トルストイのアナキズムは、彼の合理的キリスト教信仰と同じように、一連の精神的な高揚の経験によって発展した。彼が、一士官としてコーカサスへ行き、伝統的習慣のなかで生活する山岳部族やコザックたちと接触した数年間は、自然に即し都市の腐敗からほど遠い素朴な社会の美点の数々を彼に教えた。彼がその経験の中から導いた教訓は、クロポトキンがシベリアで同じような体験から得たものと非常に似かよったものであった。
>
> …もし、人間がこれ以上人工的な文明が現れるのを斥け、自然界と根本的なつながりをもってみずから自然な存在として生きるならば、人間は最もすばらしいものであり、少なくとも現在よりは良いものだという意味を持っている。このようなものは、トルストイ

が「戦争と平和」の中で賛美した“真実の生活”という概念につながる。・・ガンディーが何人かの偉大な〈自由意思を強調する〉思想家の影響を受けたことは、記憶に値する。彼の非暴力という方法は、トルストイおよびソローの影響の下に主として発展し、そして彼はクロポトキンを丹念に読むことによって、村落共同体の国という彼の思想の力を得た。・・彼はアナキストたちに貴重な教訓を与えている。すなわち、自由に生きることを主張する一人の人間の道徳的な力は、沈黙した奴隷的大衆の力よりも大きいのだということを。｛注：H.D. ソローは市民的不服従を実践し、『ウォールデン―森の生活』を書いた｝

クロポトキンは公爵であり、高い地位を得られたにもかかわらず、シベリアへ地理学的な探検に出て、人々の悲惨な暮らしと、幸せな暮らしをともに見比べて、思想形成をしたのだろう。書庫から、クロポトキン（1906、幸徳秋水訳 1960）『麺麭の略取』が出てきたので、一部の文節を引用したい。

…一七九三年に於て、地方州郡は大都市を飢餓せしめて、革命を滅した。…然るに農民等は、領主の荘園を自分等の所有に帰し、其地から収穫をした後で、紙幣なぞでは穀物を分けて呉れないのである。彼等は産物を引込ませて、価の騰貴するか、若くば金貨を持つて来るのを待つたのである。国民議会のきわめて厳酷なる手段も効を奏しなかつた。…左れば農夫が終歳の労苦を、一枚のシヤツさへ買えない一紙片と交換し無つたのは、尤も至極なことである。…孰れにしても、外国からと同様、内地からの寄送も爾く減少するものと見て置く方が確かである。扨て如何にして此減少を防ぎ支ふべき乎。何の事はない、唯だ我々自ら労働を始めるだけだ！。遠方の仙丹を探して頭脳を労することはない、求治の方は手元に在るのだ！。大都市も田舎地方の如く、土地の耕作に掛からねばならぬ。

…斯くして老巧の人から園芸耕作の術を学ぶ、其為に取てある小さな畑で、夫々異なつた栽培方法の試験する、互ひに好結果を得ようと相競ふ、過労で疲れ果てるやうなことはなく、身躯の運動の為に、都会では衰え勝ちなる健康と体力とを増して来る―そこで男も女も小児も喜んで田野の労働者に転ずることになる、其は最早や奴隷の賤業では無くて、一種の快楽、一種の祝祭、而して健康と愉快の更新となつて居るのである。

…知れもせぬ買人を宛にする生産を止めて、其満足せしむべき欲求と嗜好とを観察するの社会は、優に各員に生活と安楽とを保証するのみならず、更に其仕事を随意に選択して随意に成遂げたる時の道徳的満足や、並びに他の生活を侵すことなくして生活し得ることの楽しさを享有せしむるに至るのである。新たなる勇気に鼓舞せられて―協同団結の感情に多謝す―万人は更に相共に智識及び芸術的創作の高尚なる娯楽の占領に向かつて進むのである。

訳者の幸徳秋水（1908.7）は訳者引で、「予は社会運動家として聊か自ら期する所がある。而も儒生学者としての予は、世の政治家・法律家の如く、世人をして強いて自己の意見に服従せしめんとする者ではない。先進の著作を紹介するも、自己の研究を発表するも、唯だ之を以て自己と世人と倶に真理に一歩を近づくの資料とするに外ならぬ。而して予は世界第一流の学者の手に成り、近世屈指の大作と称せらるる本書の如きは、必ず我日本の朝野に向つて多少の新智識を供し得べきを思ふが故に此翻訳を企てたのである。若し夫れ其所説の是非当否に至つては、読者宜しく自ら研究し批評し判断すれば良いのである。予が著者クロポトキン翁より本書翻訳に関する承諾を得たのは、去年七月の初めであつた。…」と言っている。

彼は大逆事件（1910）に関与したとして大日本帝国憲法下の刑法によって刑死させられた。しかし、彼がこの暴力事件に関与していなかったことは後に明らかにされ、多くの社会主義者や無政府主義者が捏造された罪により、死に追いやられた。不当な法廷にあっても、彼は毅然

として、反論したとの伝聞がある。たまたま、獄舎にいた人たちは連座しなかったが、その後しばらくして起こった関東大震災（1923）の際に、アナキスト大杉栄と伊藤野枝、たまたま一緒にいただけの甥橘宗一少年（6歳）も憲兵大尉甘粕正彦らに殺された（瀬戸内1972）。黒幕は不明とされ、直接の犯人らの一部は軍法会議で刑罰を受けたが、すぐに恩赦減刑された。この時機には、デマにより多くの朝鮮族の人々、また社会活動をしている人々が闇の中で虐殺された。当時の藩閥政府の要人であった山縣有朋が暗闇で弾圧政策をとっていたとの一説もあり、いつまでも陰険な薩長テロリストの権力犯罪のようだ。

大杉栄の座右には、「ボルシェビキ革命は、革命はどんな風にやつてはいけないかと云ふ事を吾々に教えてくれた。クロポトキン」とあった。大杉の一文を引用しておく。

> …個人主義はいわゆる利己主義とはまったく違う。利己主義は、自己および他人の何ものを犠牲にしても、ただ世の中に押し出ようとする、きわめて卑俗な成り上がり主義である。…個人主義的感情は必ずしも愛他心を斥けない。
>
> …しかし無政府主義は、かくのごとき能動型の人物によって創始せされたのであるが、さらにクロポトキンやルクリュ等の鋭感能動性の人物によって改造せられ、また政府と社会との獰猛なる迫害のためにしばしば無為を余儀なくせられつつある間に、内省の機会を与えられて、その色彩にはなはだしき変化を生じた。さらに換言すれば、無政府主義はその社会的学説の系統において社会的個人主義に属するものであるが、その個人的感性の上に著しく心理的個人主義の色彩を帯びて来た。…再び第一期個人主義の人道主義を復活せんとしている。ロマン・ローランのごときはそのもっとも明白なる代表者ではあるまいか。
>
> …生命の一般法則は、攻撃に対する防御ということである。しかもこの防御は、きわめてしばしば、反撃すなわち防御的攻撃となって現れる。‥生命とは、要するに、復讐である。生きて行くことを妨げる邪魔者に対する不断の復讐である。…道徳とは、本然的に言えば、この生命必須の力の肯定である。自己に対するおよび他人に対するこの生活本能の尊重である。そしてこの尊重が、動物および人類の社会生活の根底であり、かつ正義の、自由平等友愛の、根本義である。
>
> …僕は精神が好きだ。…社会主義も大嫌いだ。無政府主義もどうかすると少々嫌になる。ぼくの一番好きなのは人間の盲目的行為だ。精神そのままの爆発だ。・・思想に自由あれ。しかしまた行為にも自由あれ。そしてさらにはまた動機にも自由あれ。

④市民への戦時暴力

私は30歳頃に、フランクル（1947）『夜と霧』を読んで、第二次世界大戦で日本の同盟国であったドイツ・ファシズムによる、ホロコーストの理不尽、不条理、ヨーロッパの野蛮に著しい怖れを抱いた。しかも、写真を見て、まったく直視できない情景、戦時下とはいえ、こうしたことを行った人間へのおぞましさ、底なしの不信、…。

それから30余年生きて、戦争によって人間が動物とは異なる野蛮な魑魅魍魎、悪魔的代物になるおぞましさに心身をさいなまれながらも、それでも美しく生きようとした人々がいたことを、アレクシェーヴィッチ（1985）『ボタン穴から見た戦争』を読んで知った。翻訳者の三浦みどり（2000）は彼女の著作に関して、「具体的な個人個人を取材するという方法で、樹木や小鳥、草花や踏みつけられた大地の痛みを書き留め、その時その時に可能な限りのことをやってきた。具体的な個人個人を知ること、ひとまとめに括られることを拒んで、具体的な個人個人であり続けること、…私たちにも大きな可能性が残されていることを示してはいないだろうか？…次々に新しいテーマを通して、自分が生きている時代を理解しようとその試みを続けている。…こちらが臆病風を吹かせなければ手を出されない。この二十年間の著作活動で、自分をごまかすことなく、定まらない居心地の

悪さを持ちこたえ、解答の得られない疑問を持続すること、これが彼女の強みだ」と評している。

アレクシェーヴィッチの著作はインタビューによって当事者に語らせているので、彼女の見解は「はじめに」で、次のように濃縮して述べられているだけだ。

> …戦争の惨禍を経験した幼児は幼児と言えるでしょうか？　子供の日々を誰が返してくれるでしょうか？　かつて、ドストエフスキーは、たった一人の子供といえども、その子の苦しみを代償にして社会全体の幸せを得ていいのだろうか？　と問いました。
>
> …彼らが憶えていることとは何でしょうか？何を語ることができるでしょうか？
> 語ってもらわなければなりません。なぜなら、今でもどこかで爆弾が炸裂し、弾丸がうなりをあげ、家々が木っ端みじんに爆破され、吹き飛ばされた子供用ベッドが破片と一緒に空から落ちてくるのですから。なぜなら、大戦争を起こしたい、広島の惨劇を世界中で起こしたいと望む者が、原子力の炎の中で、子供たちを水滴のように蒸発させ、花のように無残に干からびさせることをまたもや欲する者がいるのですから。
>
> …今日ではこの子供たちがあの悲劇の日々の最後の目撃者です。この子たちで終わりです！　しかもその人たちは子供の記憶より四十年以上年上なのです。…すっかり髪の白くなってしまった女の人の中で、「お母ちゃんを穴に埋めないで。きっと目を覚ますから、また一緒に先へ行くんだから」（当時四歳）と兵士に懇願している小さな女の子が突然顔をのぞかせました。幸いなことに、こういう記憶力から身を守るすべはないのです。そうでなかったら、私たちはどういう人間になってしまうでしょうか？　過去を忘れてしまう人は悪を生みます。そして悪意以外の何も生みだしません。
>
> …変わったのは記憶していることを伝える形式であって体験の内容そのものではありません。だからこそすでに大人になってしまった人々であっても、その人たちが語ることは真の記録としての意味があるのです。
>
> …地上で一番すばらしい人たちは子供たちです。不安に満ちた二十世紀に子供たちをどう守ってやったらいいのでしょう？　その心や命をどう守ってやったらいいのでしょう？
>
> その子供たちばかりでなく、私たちの過去や未来を？　人々の住むこの惑星をどうやって守ったらいいのでしょう？　女の子たちがちゃんと自分の寝床で朝を迎え、ざんばら髪のまま道端に死んでいたりしないように。そして、子供時代を二度と再び「戦争中」と呼ばないために。

第二次世界大戦中のドイツでも『夜と霧』（フランク 1947）に記述されたように、悪魔の所業がユダヤ民族の市民に対してなされ、中国でも日本軍が南京ほかで行った。戦争は心の闇にしまい込まれた妄想を制御できなくして、残虐非道な行為を臆面もなくさせてしまった。それでも、品性を失わなかった気高い人もいた。「自由、平等、友愛」は、戦時といえども、尊重すべきだ。殺し合いは極力避けるべきであり、ましてや戦闘員以外の市民を巻き込むべきではない。

私は何度もアメリカに行ったし、多くのアメリカ人をもちろん好もしく思っている。だがしかし、なぜ、原爆を投下して多くの日本人（非戦闘員）を殺したのかと、アメリカ軍の戦争犯罪を問わないのか？　最も戦争被害を受けた沖縄にいつまでもアメリカ軍の基地を許容しているのか？　対等な平和協定・同盟ならまだしも、敗戦、言い換えれば建国70年を経ても、いまだに敗北後のままアメリカの属国ではないのか。

属国から脱するためには、北朝鮮やイスラミック・ステートのような異常な国家がある限り、現段階では、侵略に対する自助防衛の武力を備えねばならないようだ。武力として自衛隊の存在を憲法改定で認め、さらにはカントの言うように、常備の自衛隊は適当数で維持、侵略や治安には関わらないなどの制限事項を明記し、また、任意志願の市民が侵略から防衛するために、武器使用法の習練をして市民自衛隊を組織し、非常時の備えとする必要の検討をすべ

きだろう。敬愛される自衛隊を侵略軍にしないようにするためには、文民統制が機能するように、市民は立派な政治家と政党を求めることだ。また、市民自らが家族や地域社会を守れるように、災害救助や地域自衛のための訓練をする必要がある。アメリカ軍にお任せであっては、沖縄ほかの在日米軍基地はなくせない。

⑤自給農耕と移行トランジション

私はトルストイやガンディーの系譜に繋がりたい。あえて簡明にして言えば、私は「アジア文明」の側で、自然を信仰し、小規模家族農耕を推奨し、素のままの美しい暮らしを唱道している。いわゆる「先進国」でも、都市のなかでも、すでに工夫が行われて、家庭菜園、市民農園などとして広く実践されているように、主な職業に加えて、小規模家族自給農耕を行うことは、生業として穏やかで豊かな暮らしを支えている。

自給自足とは言わず、「自給知足」と言い換えたい。自足ができるのはいまやごく限られた地域と人々だ。ほとんど自足するとは言いがたいのに、この四文字熟語は使用されている。自足はほとんどできないが、何割かの自給はできるので、その水準を上げるように、「足るを知る」ことだ。「真文明時代」への移行は「足るを知る」ことがキーワードだろう。自由意思により、過剰な欲望をほどほどに知足することだ。個人主義を鍛えて、自律と孤独に耐える力、寛容と友愛の力を高めれば、過剰な名利の奪い合いから解放される｛注：木俣 2014｝。

石油が減少・枯渇するからという理由で移行の準備をするのではなく、自律的に自給知足の暮らしを積極的に練習することだ。私の経験では、中学生の頃（1960 年代初め）から「石油はあと 20 年でなくなる」と、社会科で教わってきた。有限の資源であるからには、いずれはもちろん減少・枯渇するに違いないが、2016 年現在、今しばらく石油は潤沢にあるように見える。

ピークオイルが過ぎたから生活様式を変えようというのでは説得力がない。生活様式を変えるのは、過剰な欲望で争うことのない、「自由・平等・友愛」の世界を求めることで、この社会思想に関しては、ヨーロッパ文明社会から発したとしても、アジア文明社会でもすでに受容してきたことだ。日本的な伝統的内容表現で言えば、「じねん・わかちあい・おもいやり」であろうか。しかし、その出自のヨーロッパ文明社会でも、いまだに戦争が日常化していることが嘆かわしい。

世界でいちばん貧しいウルグアイ元大統領ムヒカは、優しい言葉で若者たちに次のように述べている（くさばよしみ編 2015）。まったく強く同感する金言である。

> …わたしは、自分を貧しいとは思っていない。いまあるもので満足しているだけなんだ。私が質素でいるのは、自由でいたいからなんだ。お金のかかる生活を維持するために働くより、自由を楽しむ時間がほしいんだ。…哲学は大学で学ぶだけじゃない、人生を通して抱き続ける問なんだ。わたしたちはみな哲学者なんだよ。…歴史は化石ではなく、未来のための果実なんだ。古代の社会から寛容さを学ぶことだ。寛容さは、命を守るために大事なことだよ。…多様性が世界を豊かにし、命を尊重することにつながるんだ。…しかしよく生きるために闘い、後の者たちにそれを伝えようとしたならば、その息吹は丘や海を渡り、かすかな記憶となって残るだろう。人生は受け取るままではなく、何より、持っているものを与えるものだから。

（2）災害支援と自衛隊

1）私見主文

名古屋で育ったので、小学 5 年生の頃（1959）、伊勢湾台風の目を見た。旧式の自宅は屋根瓦が数枚飛んだだけですんだが、家族寄り添って恐怖の一夜を明かした。この巨大台風では 5000 人以上が亡くなった。御器所小学校の講堂で被災者の方々は数か月の避難生活を送っていた。桜山中学校は被災者支援のために、一時的に自衛隊の駐屯地になっていた。緊急の救助も復旧も自衛隊なしにはできなかった。したがって、名古屋では自衛隊による自然災害支援に対し

て、感謝の気持ちが強いと思う。最近では、東日本大震災への災害救助、復興支援に果たした自衛隊の役割は大きい。これらに感謝するのなら、憲法において明確に自衛隊を位置づけ、災害支援の職務に対して敬意を示すべきだ。

一方、実際の自衛隊はすでに強力な軍事組織でもある。歴史を見れば、軍隊は強大な権力であり、社会を強力に動かす武力をもっている。日本国憲法は、戦争放棄、侵略のための軍隊はもたないとして、日本の市民社会は70年余の平和を維持してきた。したがって、自衛隊の役割の原則を明確にするように、憲法改定を行うべきだと思う。

職務の第一目的は市民を守るための災害救助・復旧支援である。第二の目的は、他国からの侵略に対して日本の市民を守るための自衛であり、他国を侵略することはない。国際紛争は、非暴力を原則として、外交交渉によって解決すべきである。しかし、自由・平等・友愛を尊重しない、狂気の指導者が強大な軍事力で、日本を脅かしている現状があるからには、軍事行為に範囲制限を加えるとしても、非暴力の信条を曲げたくないが、残念ながら相応の軍備を今はせざるを得ないだろう。近代の歴史から見ても、非武装中立は侵略に対して有効ではなかった。

こうした個々人の戸惑う私見も、大いに発言して、話し合う場を広げよう。すべて代議士・国会議員にお任せではいけない。個々の市民がよく考えたうえで、代議士を選ぶのである。そうでないから、議会制民主主義が機能不全になってしまったのだ。地域社会で直接民主主義があったうえで、間接民主主義・代議制が有意、健全に機能する。このように市民自らも論議に加わり、日本国憲法が改定・補足できれば、「押しつけ敗戦国憲法」などという批判を斥けて、この70年余の平和維持もふまえ、自主憲法として大方の市民が納得するようになる。

さらに人間がより高い知性をもつように文化的進化して、さらに人々が自由を得て、非暴力の社会になるように、少しでも早く、軍事力を縮減する国際協議を進めて、いずれ最終的には軍隊をなくし、殺さない自由と、殺されない自由を確立してほしい。現在から近未来に向けて、国際紛争は、土地や資源の奪い合い、民族、宗教の対立ばかりではなく、より大きな争点として、人口増加、食糧、環境変動が加わるだろう。東日本大震災にみられるように、巨大な自然災害により、原子力発電所崩壊による公害のような容易に解決できない過酷な人為災害が生じるだろう。市民も自ら、身近から地球規模までの環境問題に真摯に対応することが、国際紛争を減らすことだと理解されたい。自衛隊の主要な職務はここにもある。憲法改定・補足の論点として、自由闊達に公開で話し合い、新たな追加条項にすることを望む。

2）補論

アレクシェーヴィッチ（1997）『チェルノブイリの祈り――未来の物語』のなかで、彼女は自分自身に対してインタビューしている。彼女の著述は、市民の個人史をインタビューして、文章化している。心の中に深くしまい込んだ思いを聞き取るのは容易なことではない。当然、辛いことは話したくないが、反面では信頼できる人に聞いてほしい。信頼を得ることは簡単なことではない。

私は、北海道の雑穀をよく保存してきたアイヌの人々に長らくインタビューしてきた。この際に、信頼を得て、お話を聞かせていただくまでには、度重ね訪問して、時間をかけてピリカアイヌ（良い人間）だと認められなければならなかった。日本シャモ（大和民族）に侵略、支配、差別されて、辛い目にあってきた人々と酷いことをしてきた側の者が、心を開き合ってインタビューすることはとても難しい。

あまりに惨すぎる体験をした人から、率直なインタビューをすることができた彼女は素晴らしい人だ。聞き手も話し手も、時の権力者から強い圧力を受けただろうし、それでも市民の体験した事実を記録することは、「ものすごく」大事なことだ。オーウェルが書いたように権力者が創作し、書き直された戦争の歴史は事実ではなく、虚偽が多い。市民個人それぞれに人生はあり、そこに歴史の原点がある。彼女の本は

涙なしに読めなかった。

…｛注：見落とされた歴史について――自分自身へのインタビュー｝あたりまえのことですが、人々は忘れたがっています、もう過去のことだと自分を納得させて。…この本はチェルノブイリについての本じゃありません。チェルノブイリを取りまく世界のこと、私たちが知らなかったこと、ほとんど知らなかったことについての本です。見落とされた歴史とでもいえばいいのかしら。…この未知なるもの、謎にふれた人々がどんな気持ちでいたか、なにを感じていたかということです。チェルノブイリは私たちが解き明かさねばならない謎です。…人は、あそこで自分自身の内になにを知り、なにを見抜き、なにを発見したのでしょうか？　自らの世界観に？この本は人々の気持ちを再現したものです。…私のくらしは事故の一部なのです。私はここに住んでいる。チェルノブイリの大地、ほとんど世界に知られることのなかった小国ベラルーシに。ここはもう大地じゃない、チェルノブイリの実験室だといまいわれているこの国に。ベラルーシ人はチェルノブイリ人になった。

…大参事以上のものです。…チェルノブイリ後、私たちが住んでいるのは別の世界です。前の世界はなくなりました。でも人はこのことを考えたがらない。…削除せずに残したのは、たんに信憑性を期すためだけではなく、（手の加えられていない真実）のほうが起こりつつあることの異常さをよく映しだすように思えたからです。すべてははじめて明らかにされ、声にだして語られたことです。…なにかを理解するためには、人は自分自身の枠からでなくてはなりません。

…一人の人間によって語られるできごとはその人の運命ですが、大勢の人によって語られることはすでに歴史です。…二つの大参事が同時に起きてしまいました。ひとつは、私たちの目の前で巨大な社会主義大陸が水中に没してしまうという社会的な大参事。もうひとつは宇宙的な大参事、チェルノブイリです。・・私たちにより身近で分かりやすいのは前者のほうなんです。・・一方チェルノブイリのことは忘れたがっています。・・自分たちが知らないもの、人類が知らないものから身を守ることはむずかしい。チェルノブイリは、私たちをひとつの時代から別の時代へと移してしまったのです。

…訪れては、語り合い、記録しました。この人々は最初に体験したのです。私たちがうすうす気づきはじめたばかりのことを。みんなにとってはまだ謎であることを。でも、このことは彼ら自身が語ってくれます。何度もこんな気がしました。私は未来のことを書き記している…。

4．自由の在り方―思想、信条、信教、結社、表現、居住、職業、学問の自由について―第一九条～第二三条

［思想・良心の自由：第一九条　思想及び良心の自由は、これを侵してはならない。］
［信教の自由、政教分離：第二〇条　信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。②何人も、宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。③国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない。］
［集会・結社・表現の自由、検閲の禁止、通信の秘密：第二一条　集会、結社及び言論、出版その他一切の表現の自由は、これを保障する。②検閲は、これをしてはならない。通信の秘密は、これを侵してはならない。］
［居住・移転・職業選択の自由：第二二条　何人も、公共の福祉に反しない限り、居住、移転及び職業選択の自由を有する。②何人も、外国に移住し、又は国籍を離脱する自由を侵されない。］
［学問の自由：第二三条　学問の自由は、これを保障する。］

1）私見主文

第一九条思想・良心の自由、第二一条表現の自由は、しっかりと保障されるべきである。個人以上に、マスメディアが報道の自由を保持し、事実を市民に伝えるべきだ。脅しに弱いと言われるように、「自粛」などと言って見てみないふりして事実を歪曲したり、黙殺しないでほしい。ましてや、権力の虚偽を無批判に流さないでほしい。なにごとも事実に基づいて、まずは個人が思想や良心によって判断するべきだ。

第二〇条信教の自由により、政教分離は必須、国家神道は強要されない、廃仏毀釈は不当であると思う。薩摩長州が政治権力的意図で利用するために設置した靖国神社は、第二〇条の国からの特権の行使を実質的に受けている。政教分離にも反する。戦没者慰霊は靖国神社で行わず、国立千鳥ヶ淵戦没者墓苑で行う方がよい。

第二三条学問の自由は、大学人として特に重要条項だ。実利ばかりを追い求めるあまり、科学技術のみを重視するのは間違いだ。人々をより自由にするには、人文社会の教養が必要であり、人生をより楽しくするには芸術がなくてはならない。教育は100年の大計であるのに、日本は教育をあまりにも軽視している。受験重視のため、子どもたちに急いで教え込むばかりでは、ゆっくりと学び考えるような資質は育たない。公教育では偏向はいけないという「正論」で、その実は偏向圧力をかけて、のびやかな教育の自由を奪い、実は特定の偏向に従って教育内容の操作をし、衆愚に育てようとしているのではないのか。

アンフェアな手法で虚偽を刷り込んではいけない。それでは公正な社会正義ある市民には育たない。教育活動の自由によって、しなやかに強い日本人、寛容で勇気をもつ市民が育つだろう。社会は政治によって動いているのだ。国家的な強要をしないように配慮しながら、教養として宗教や政治、経済の概要を伝えておかなければ、若くして「社会人」になった途端に選挙権をもち、政治参加するのに、予備経験がなければ、投票行為にたじろいでしまう。

また、宗教の概念を知らなければ、良心や倫理観、信仰は育まれにくい。基本的知識を得て、体験的な学習で批判的精神を鍛えなければ、怪しげな宗教団体に疑いもなく取り込まれてしまう。今日、社会的地位が高い方々が何かと不正を働いていては、庶民は社会制度に対する信頼を保てなくなるので、偉い方々はその行動の在り方に注意するように、強く心してほしい。

自由の在り方に関するこれらの条文は再確認するとして、補足条項として改定・補足するとしたら、異国からの政治亡命者や戦争難民への対応だろう。日本は、自由や平等を求めた故に迫害された人々をあまり受け入れてこなかった。今後、社会的・政治的に加えて、飢餓や汚染による環境難民の増加が予測される。

2）補論

①信教の自由

高橋和己（1966）『高橋和己エッセイ全集』から、共感する記述を抜き出しておく。大学や読書人の在り方を深く問うた彼のエッセイや小説『邪宗門』などから励まされた若い時が、小説家を志した私には確かにあった。

> とりわけ日本の明治維新いらいの国をあげての欧化の波のなかでは、そうした仏教的両極化すらなお微温的なものとして、新たに輸入されたキリスト教的世界観とその反逆的私生児である進化論やマルクス主義などの強弱あい争う世界観に圧倒されていった。異なった文化が激しく接触する歴史的時間は、全く新たな思想や制度の登場しうる一つの機会だったが、それは残念ながら、従来存在した朱子学と禅宗に代表される上層意識と、日蓮宗から念仏宗にいたる下層意識との二重構造に、今ひとつあらたな上位概念をつけ加えることに終わった。…勝利は人にゆずるにしても、参加すること自体に意義と生甲斐があれば十分なのである。すべての歴史はそのように形成されるのだが、もろもろの社会変動をただ一者に統一された結果からしか見ないために、その存在を意義づけることができないでいる。…思うに、すべて実践的な思想には、その形態と流布に不可欠な三つの段階があ

る。一つは、過去の遺産をまなび継承する過程、一つは、現状にたいするみずからの責任による考察によって、継承したものを変容し伸長させ発展させる過程、いま一つには、みずから確かめえた理念をこの世界に実現するために、何らかの集団にそれを委任する過程である。

さらに古代において洋の東西を問わず、政治性というものが教養人の必須の属性とみなされたのは、仁君や賢者によって統治されるのであるかぎり権力というものは、それ自体＜善＞であるとみなされていたからであって、個々の権力者や指導者の悪行ではなく、権力そのものが一種の悪として感じられるようになった以上は、政治性というものは、実は自然や美や倫理のようには直接的に人間の名誉ある属性としては定立されえなくなっている。にもかかわらず、現在においてもなお、政治は一体なんの権利があって、他のもろもろの人間の作業を中断させうるのか。おそらくは何の権利もないのである。ただ、国家権力はむきだしの形態において人を殺しうることを極限とするもろもろの力によって、人間の尊厳をけがし、人を貧弱化させ、その自尊心をこっぱみじんに破壊することができる、というだけのことにすぎないのである。…原爆の存在は、平和共存を正当化するものではなく、双方の体制のかかげる理念というものが虚偽であることを暴露するものだ、といった視点は、いまや孤立無援の非政治的思想としてしかありえなくなっている。

…とはいえ総体としての人間は、第一の環境である自然に、そして、第二の自然である人間社会に、それぞれ手を加えつつ順応してゆくであろう。変革という意志的形態も、みずから変えた情勢にはやはり大勢として順応せねばならない。威勢のいい修飾はいかようにも加えうるけれども、それが本当のところである。しかし、限りある生の時間のうちに生き、一回性という動かしえない制限をもつ個別者は、無限の順応体として自分を訓練する必要はない。蝉脱や転進の意味を認めないわけではないけれども、たった一つか二つの役割をみずから裏切ることなき態度の上に果たすことができれば、おそらくはそれで十分なのであり、役割が終わったと思えば、静かに退場してゆけばいいのである。

「平民新聞」は、自由・平等・博愛をスローガンに社会主義の立場から非戦論をかかげて、世論に抵抗した。…トルストイの非戦論を紙上に紹介した。・・とトルストイはいう、「戦争は又もや起れり、何人にも無用無益なる疾苦此に再びし、譎詐此に再びし、而して人類一般の愚妄残忍亦た茲に再びす」うんぬん。次の号に幸徳秋水は、トルストイのキリスト教的道徳論は、生産手段の私有と矛盾を克服する社会主義によって、補われねばならぬと批評した。もちろん北一輝はそれを読んでいたのだが、彼の考えは違っていた。…山路愛山らが「国家社会党」を創立し「独立評論」に「国家社会主義梗概」をかいた。それは「日本国民の総体は一家族なり、家人父子の関係を以って国体の本義とす」という家族主義的な国家観にたち、関税政策によって民族資本を育成する必要をとき、また、政府は労働者階級と呼応して富豪階級の権力乱用を矯正すべきであると説いていた。それは北の興味をそそったが、その天皇を首長とする家族主義的国家観や、生産権の奉還を考える尊王主義は全く同意できないものであった。北は自分の胸にいだく社会主義を、それと区別するために、やがて純正社会主義とよぶこととする。

…北一輝が天皇を国民と同等の位置に引き下ろすために考えた手段は、愛国心であった。…天皇という絶対者を必要としたのは、この後者の勢力だったわけである。万世一系論はその藩閥の御用イデオロギーであり、｛注：天皇｝機関説はブルジョアジーの志向を代表するものであったといえる。

…戦争とはなにか。それは、まず政治的には、国家的規模においてなされる持続的な確信犯罪行為である。…確信犯罪であるから、それは国家によって否定しえない。・・それを否定しようとする志向は論理的に二つの方

向に同時に向かわねばならない。すなわち国家そのものを否定するか、すくなくとも国家構造内において戦争の直接的機縁となる矛盾、および国民の攻撃衝動を助成する制度と文化の形態を分析し排除し変革すること。そして同時にいま一つの国家的規模においても、確信犯罪が破廉恥罪や過失罪とはまったく異なるのであることを冷静に確認し、古き一つの確信にかえるにあらたなる一つの確信を構築することである。

個人を一切の価値の源泉とみなせば、無限の自我解放と自己権力が善と意識され、政治的には温和なかたちではリベラリズム、極端型としては急進的アナーキズムが生まれる。家族を人間存在の基本的形態とみれば、肉親愛が人間関係のモデルとなり、その信頼感を、人間の感情の自然に従ってある段階をともないながら、つまり遠く広くなるほどやや薄れながらも世界に及ぼすのが、善と意識される。…地域共同体の尊重からは、郷党意識や土俗的な信仰が生まれ、・・。誓約共同体つまり宗教や思想的結社に依存すれば、それぞれの教義に従って、神のもとに平等な人間のヒューマニズムや一切衆生の一体視などが。更にその近代的形態として、もっとも合理的な精神の誓約体である科学精神にもとづく普遍主義が生まれる。

その国のことは、生涯の喜怒哀楽をその国でしかなすことのできない人々の手にゆだねるべきだという原則的な考えのほかには、具体的建策は残念ながらなにもないのである。…その画家 {注：芥川龍之介の『地獄変』} の心は、意外な形で一般化していて、列車や船が転覆しても火事が起こっても、素人写真家までが救助するよりはまずシャッターを切るのが今の日本人の習性である。・・焼け死ぬ当の娘がどういうつもりで父を睨みかえしていたかということを私たちは常に考えおとしがちなのである。これは文学における私小説的な発想にも見られる、抜き難い日本人の精神構造の一面性・平面性ともおそらくは無縁ではないのであって、やがてそれは、＜事実＞と＜真実＞との混同ともなって、私たちの価値基準を曖昧化する。

永井荷風が、ヨーロッパ近代の知性を身につけながら、やがて江戸戯作者流の伝統へ回帰していったきっかけは、幸徳秋水の「大逆事件」の際に、自己の限界をさとったことにあると、ふつういわれている。荷風自身が書いているのだから事実にちがいないけれども、もう一つきっすいの江戸っ子だった彼の感覚に、薩長の田舎武士に指導された荒けずりな明治文化のあり方が、どうしても我慢のならないものに思われたこともあるだろうと、私は考えている。

ヤースパスは人類がこれまでになしとげてきた業績を三つの劃期にくぎっている。一つははるかな古代、人間がさまざまな道具の発明により他の動物と区別される人間的生活をきずいたこと。一つは紀元前数百年から紀元のはじめにかけて、各地域別個に、しかし基本的には共通する人間の道徳をつくりあげたこと。いま一つは紀元十七・八世紀以来の急激な科学の発達。非暴力の観念は、第二のエポックに、基本的な人間の徳義として築かれたものである。…ただ残念ながら人間が人間関係を調整する手段として、政治を用い、政治を権力によって運営しつづけることにより、たてまえとしての最低の道徳を、考えうるかぎりの幅と深みをもって歴史はふみ破ってきたのである。科学の進歩も一方では医学が懸命に人命を救いつつ、他方では厖大な殺戮武器を生産するという結果をまねいている。非暴力の観念は政治からも科学からも、宗教からすら見放されつつある。

私は大学院生の頃であっただろうか、今となっては、記憶は定かではないが、おそらく渋谷の飲み屋の座敷で研究仲間と飲食していた時に、隣席の老齢グループから二・二六事件の生き証人大森軍曹を紹介され、酒を酌み交わしたことがある。日本史の授業で習った事件の当事者が現存していることに驚いた。歴史は過去に断絶するのではなく、消そうとしても未来へと

つながっているのだ。「天皇」を虚構の現人神として暗示し、その畏怖心を利用して、日本人の心を操る悪意の権力者が、明治維新以来、いまだに存続しているようだ。第二次世界大戦後に、戦争責任の追及を曖昧にしたので、亡霊は未だにまつわっているようだ。ムラ社会の相互監視、イエとしての世間体、近代社会の個人主義を基盤とできない、全体主義的な「雰囲気」を感じさせ、空気を読ませ、均一的な集団に押し込む悪意がある。端的な事例はリクルートスーツである。なぜ、学生たちは男女ともに黒ずくめにして没個性にするのか。自己のセンスをファッションで表現しないのか。自他が入力したエントリーシートの経歴データで評価されていてよいのか。

国や地方行政の税金をあてにする「公共」のみに依存していてはいけない。個人を基盤とした家族や地域社会に、市民の自主的任意な寄付による「新たな公共」の発達を望みたい。歴史的な敗戦を反省するのなら、よき伝統は失わず、悪い慣習は捨て、家族や地域社会の人々との相互関係の再創造を求めて、地道に移行（トランジション）して、さらに自由で楽しい人生が過ごせるように、社会の文化的進化を希望したい。

安丸良夫（1979）の『神々の明治維新』から、少し引用しておく。

> …ところが、新政府が成立すると、彼らは、新政府の中枢をにぎった薩長討幕派によってそのイデオローグとして登用され、歴史の表舞台に立つことになったのであった。薩長討幕派は、幼い天子を擁して政権を壟断するものと非難されており、この非難に対抗して新政権の権威を確立するためには、天皇の神権的絶対性が何よりも強調されねばならなかったが、国体神学にわりあてられたのは、その理論的な根拠づけであった。…新政府の開国和親政策のもとでは、キリスト教の浸透は不可避だと考えられ、これに対抗するためには、民族的規模で意識統合をはからねばならず、そのためには神道国教主義的な体制が必要だと考えられた。…さらに、「皇国内宗門復古神道」に改め、産土社で氏子改めをおこなって宗門改め制にかえる、というような方向につながっていた。頂点に宮中祭祀と伊勢神宮をおき、中間に各地の官・国弊社を配し、底辺に村々の産土社をすえ、こうした国家的規模での神社祭祀の統一的体系に日本人の宗教生活の全体を編成し帰属させるという神道国教体制が、その究極目標であった。
>
> …のちにのべるように、真宗はその宗教としての独自性をもっともよく守り、真宗の存在こそが神道国教主義的な宗教政策を失敗させる根拠となったのだが、しかし、その真宗でさえ、国家のさしだす神々の体系にほとんど破廉恥に身をすりよせていったこともあったのである。あらたに樹立されていった神々の体系は、水戸学や後期国学に由来する国体神学がつくりだしたもので、明治以前の大部分の日本人にとっては、思いもかけないような性格のものだった。伊勢信仰でさえ、江戸時代のそれは農業神としての外宮に重点があり、天照大神信仰も、民衆信仰の次元では、皇祖神崇拝としてのそれではなかった。だが、天皇の神権的絶対性を押しだすことで、近代民族国家形成の課題をになおうとする明治維新という社会変革のなかで、皇統と国家の功臣こそが神だと指定されたとき、誰も公然とはそれに反対することができなかった。
>
> …しかし、仏教よりもさらにきびしく抑圧されたり否定されたりされねばならないのは、民俗信仰であった。…だが、日本のばあい、近代的民族国家の形成過程は、人々の生活や意識の様式をとりわけ過剰同調型のものにつくりかえていったように思われる。…これらの宗教的行為がふかい宗教性なしになされるのは、その由来からしても当然のことなのである。ふかい内省なしに、雑多な宗教的なものがほとんど習俗化して受容されている、といえよう。

②知性と民主主義

J. センプルン（2013）は『人間という仕事』という講演で、エルムント・フッサール、マル

ク・ブロック、およびジョージ・オーウェル（エリック・ブレア）の3人の仕事を紹介している。若い頃にオーウェルの『カタロニア賛歌』を読んで以来、彼に関心があり、彼の著作をあらためて読みたくなったので、検索していたらセンプルンの本に出合った。彼は2002年にフランス国立図書館の講演会で、フッサールを取り上げてヨーロッパの危機について、ブロックを取り上げて理性の勇敢さを、オーウェルを取り上げて民主主義的祖国愛の在り方を論じている。

まず、フッサール（1935）について気になった文節を引用する。

> …知性による抵抗はそこでどのような働きをしたのか、その核心はどこにあったのか、そこでどのようなことが考えられたのか、一つ一つ確かめたいのです。…ヨーロッパの三〇年代の歴史的状況と今日の状況との間にある重要な違いについて指摘したいと考えています。…「｛注：フッサールの講演引用｝ヨーロッパの存続の危機には二つしか出口はありません。ヨーロッパがそれ本来の理性的生の意味から遠のいて没落し、精神に対する憎悪と野蛮の中に失墜するか、それとも理性の勇敢さによって自然主義を最終的に超克し、そこから哲学の精神を通して再生するかです。…このニヒリズムの猛火、人間性に対し西洋が使命を帯びていることを疑わせる絶望の逆巻く炎、巨大な倦怠の灰燼から、新たな内的生新たな精神的活力に満ちた不死鳥が、人間の遠大な未来の保証として蘇るのを。なぜならば、精神の実は不滅なのですから。
>
> …ヨーロッパの危機とは、…第一に、ヴェルサイユ条約およびヴェルサイユ体制によって打ち立てられた平和が決定的に挫折したこと、そして国際連盟が挫折したことです。…第二の要因、それは言うまでもなく一九二九年の世界恐慌です。…つまり、もし危機が資本主義システムの運動の一部を成しており、それゆえ資本主義においては危機に決して終わりがないと断言できるなら、資本主義体制を崩壊させ、社会革命という輝かしい未来を黙示録的かつ奇跡的なやり方で到来させるような最後の危機が起こることもまたないだろう、ということです。…経済危機に伴う第三の要素、計画主義という知的、イデオロギー的な発展…。第四の点、それはあらゆる政治現象を通じて目につくようになったことですが、大衆化が飛躍的に拡大したことです。社会学的意味でも政治的な意味でも大衆化が生じ、大衆が公的生活の中に決定的な仕方で出現したのです。
>
> …しばしば忘れがちなことではありますが、こうした状況を分析した先駆者は、おそらくジークムント・フロイトであります。…そこでフロイトは、進歩の観念と野蛮との同盟―これこそ当時起きていた決定的に重要な現象でした―を強調しています。フロイトはその例をいくつか挙げて次のように述べています。ソ連では、より良い生活を生み出すために一億人の人々が服従させられ、強制され、抑圧されている。自由の全面的な廃止と引き換えに、彼らはいくばくかの性的自由と、反宗教的で建設的な労働を享受しているが、その代償として考えることの自由をことごとく失っている。…つまり、歴史の条件次第では、社会を変革し進歩させるための多少のテロルや―フランス革命のときもそう言われていたことでしょう―強制、専制は避けられないという考え方です。それからとりわけ、ここにはあの観念、未来という幻想が認められます。未来が犠牲を正当化するだろう、未来が強制を正当化するだろうという幻想です。
>
> …フッサールがどのように客観主義に偏った合理主義を批判し、どのように批判的合理性の擁護を行ったかを見ることです。「私｛注：フッサール｝をいわゆる反動主義者と見なす人もいるでしょう。しかし私は、今日言葉のうえで、自分を非常にラディカルに見せている人よりも、反動主義者と言われている自分のほうがはるかにラディカルで、はるかに革命的であるとさえ思っています」。なぜなら、フッサールにとって、批判的合理性、理性の批判的精神以上にラディカルなものはなく、それ以上に革命的なものはないからです。そ

して、この批判的合理性こそヨーロッパの精神的形成物の基盤であり、ヨーロッパ的基盤である、と考えるのです。

次に、ブロック（1940）について気になった文節を引用する。

｛注:ヤン・パトチカは（現象学者であり、フッサールの弟子)｝…フッサールを批判的に継承しながら、今日の世界の技術的現代性について入念な思考を展開しています—、彼は商品社会の資本主義的現代性や、技術批判、現代という技術の時代に対する批判についても多くのことを書いています。…「｛注：ベンヤミンは｝私たちと言えば、左翼政治の根本的な悪徳がつかんで離さない信念から立ち去ろう。私たちはこれら悪徳のうちなにより三つを告発する。すなわち、進歩への盲目的な信頼、それから力への、正義への、大衆のただなかで形成される拙速な反応への盲目的な信頼、そして政党への盲目的信頼である。」

私の考えでは、この三冊のうち最も的確なもの、もっとも衝撃的なもの、最も素晴らしいものこそ、マルク・ブロックの『奇妙な敗北』です。…そこには偉大な書物を書くのに必要なすべての材料が揃えられています。怒りと愛、明晰な分析、フランスを導くことに失敗したエリートたちに対する憤激、この失敗の犠牲となったフランス人民と兵士たちへの擁護などです。…この本は放っておかれ、そのまま埋もれてしまいました。…この本を書いたのち、彼は大学人の生活と次第に激しさを増す抵抗運動に専心していきました。そして、抵抗運動は、ゲシュタポによって彼が逮捕され、一九四四年六月に処刑されるときまで、彼の人生のすべてを覆い尽しました。

…｛注：ブロックは書いている｝「ある特異な歴史の法則が、国家と軍事指導者の関係を規定しているように思われる。指導者たちは勝利すると、ほとんどつねに権力から遠ざけられる。だが彼らが敗北すると、勝利に導けなかった国自らの手で、彼らは権力の座に迎えられる」。…私にとってこの本で最も美しい二ページがやってきます。おそらくそれは、レジスタンスに参加した人たちの思い出の中でも、またそこで亡くなったすべての人やまだ存命の人の記憶のなかでも、そしてあれら偉大な知識人たち、あれら偉大なフランスの大学人たちの記憶のなかでも、最も美しいページであろうと思います。…そのページでは、戦う必要性、危険に立ち向かう必要性が問題になっています。…その考えとは、今日のような社会において、生きることは最も重要な価値ではないということです。…「なぜなら、何も犠牲にせず得られる救済はないからである。自らそれを勝ち取ろうとつとめない限り、国民の自由が十全であることはないからである。」

…彼ら｛注：ブロック、ブロム、マリタン｝の間で一致していたのは、民主主義に対する—絶対不変の—信であったと私は思います。民主主義のことを、ある人たちは形式的と呼び、別の人たちはリベラルと呼び、また別の人たちはユダヤ的と呼び、さらに別の人たちは無機的と呼びます。民主主義は二〇世紀を通じて最も中傷された政治システムであり、あらゆる過激派から最も攻撃されたシステムです。しかし民主主義こそが、三人の人間に—そしてとりわけマルク・ブロックに—あの途方もない力、三人をその例証たらしめる勇気を与えたのです。

…三人の人物の間に、何か共通する一筋の糸が走っているとするなら、それは全体主義的野蛮に抵抗するという同じ信念であります。…彼らには、批判的理性、民主的理性に対する同じ信念があります。…普遍主義的な見方と愛国的な見方を総合することの必要性を思い出させるからです。そして、これら二つの見方の唯一の総合、唯一の道こそ、まさしく民主的理性なのです。そこにおいてこそ、ここに選ばれた三人の登場人物は一致しているのです。

…私たちはもはや進歩神話を信じていません。二〇世紀のうちに殺戮と恐怖の一世紀を見るべきだと思われるかもしれませんし、そ

れ以外の何かを見ることは不可能かもしれません。…二〇世紀は女性や植民地の人々、科学的発展といったものが花開いた世紀でもあります。…戦争の解決は、ヨーロッパ連邦、あるいはヨーロッパの連邦性にある、ということでした。

さらに、オーウェル（1940～1941）について賛同する文節を引用する。

…オーウェルが何を糧にして『カタロニア賛歌』の考察を行ったのかを理解することですから。スペイン戦争でオーウェルをすっかり魅了したのは…戦争の最初の数か月間にスペインの労働者である庶民たちが見せたあの躍進の姿、その思い出、その現実でした。たとえ軍隊を作るためであろうと、軍隊編成に不可欠な規律によるものであろうと、そこに生み出された秩序の記憶に、彼は最後まで絶対的に心を打たれ続けました。彼は歴史の真実に魅了されたのです。…民衆が反動的な強制に対して自発的に起こした反応は、新たな種類の民主主義の創造であり、発明であった、という真実です。この民主主義は、もはや議会制の民主主義ではなく、さまざまな協議会からなる民主主義です。…こうした協議会では、わたしたち民主主義諸国に馴染みの議会制民主主義よりも、より直接的で社会的な民主主義が表現されています。…祖国愛は必ずしも保守的ではないということ、民主主義的祖国愛や、革命主義的祖国愛があるということです。彼が参照し、自分がその一部でありたいと願うのはそうした祖国愛なのです。…言葉の広い意味の文明、つまり礼節と市民社会という意味の文明です。…その後も変わることがなかったものは、「スターリニズム」というどこでも通用するがらくた入れのような名で呼び交わされているものすべてに対する、彼の憎しみ、怒り、嫌悪です。…彼は変わらぬ倫理観をもって、POUM主義者たちのもとへ、何人かのアナキストたちのもとへ、そしてスペイン戦争でコミュニズムの政治戦略によって直接、間接の犠牲となった人たちのもとへと、身を投じたのです。

この講演録の訳者、小林康夫のあとがきを引用しておく。

{注：小林} …センプルンにとって重要なことは、それぞれが、「危機」に対して発言し、書こうとしたとき、いったい何の名においてそれを行ったのか、ということである。それは、「理性」であり、「民主主義」であり、「表現と精神の全面的な誠実さ」であり、最終的には、「ヨーロッパ」という「精神」であった。…そう、もし「哲学」というものがあるのなら、それは、どのようなかたちであれ、「人間（性）」の「極限」において、それでも「人間」であることを引き受け「人間」という「仕事」には、終わりはないのだ。

③図書の保存

ますます、（国籍）日本人は本を読まない傾向にあるようで、著しい出版不況、多くの書店が廃業に追い込まれている。デジタル化された本（電子出版）では体系的に著者の思想を理解しにくい。繰り返してページをめくり、理解を深めることができない。売れる通俗本が無数に出版されるようになって、専門書は駆逐されて、あるいは本にすらならない。また、学会誌なども、公正な審査をするとして形式的には査読によって採否が振るい分けられ、掲載されるとは限らない。審査者の責任はとても重い。審査自体が論文の評価である一面で、審査者当人は思いもしないようであるが、実は審査そのものも評価されるのである。評価する能力に満たない審査員に当たったら、とても不幸だ。査読者はまるで「神」にでもなったように、傲慢に振る舞う。メンデルの研究を評価しなかった審査者は遺伝学の発展を30年遅らせたと、科学史で記述されている。

この同人誌のような『民族植物学ノオト』を発行することにした発端は、インドの研究仲間が私に委託した論文が農薬に関しての内容であったので、環境関係の研究報告に掲載したくないといわれたからである。内容が気に入らな

ければ掲載しない、すなわちこれは検閲だと思った。最近では、東日本大震災に関わって、放射性物質による汚染に関しての記述を自粛するように、インフォーマントと編集責任者から求められた。自粛せよというのは検閲ということだ。私は審査されるのもするのも嫌になった。また、雑穀や民族植物学などという自然科学に収まらない統合学の領域、経済価値のないと思われる微細分野の論文は書く雑誌もない。こうした状況によって、個人でも発行できる、自由度の高い電子出版の意義は認められる。しかし、できれば紙媒体も必要で、また望まれると考えたので、本誌の発行を続けているのである。

私は子どもの頃から今に至るまで読書が好きだ。探検に憧れていたので、井上靖の西域物は特に好んだ。なかでも、『敦煌』(井上靖 1959)は、西夏文字に魅入られた趙行徳が科挙の試験を逸して後、数奇な運命に操られて、敦煌の莫高窟に多数の経典を戦火から護るために隠すストーリーであり、著しい影響を被った。また、イギリスのカンタベリー大聖堂付属図書館で見た光景、市民が古書を閲する姿、知的好奇心のすばらしさを見て、いよいよ図書を大切にしたいと思った。現在、森とむらの図書室づくりにこだわっているのは、すべてをデジタル化して良しとするのではなく、重みのある原本の保存こそ、重要だと考えているからである。著者の思想を知るには原本の重みが必要だ。ページを前後に繰りながら、学び考える知識は本の重みにあり、決して軽いものではない。

海外旅行の帰途には、新作映画を機内で見ることにしている。予告編のようなものをいずこかで見て、『図書館戦争』の奇抜な展開に興味を持ち、見たいと思っていた。運よく一覧にあり、時差で居眠り半分に鑑賞したので、ストーリーに脈絡がない。そこで、図書館戦争シリーズ全6巻を購入した。『図書館戦争』(有川浩 2006)に出て来る図書館員たちの心情にはいたく共感した。検閲、焚書への抵抗を武力を以って、まさに命がけでするのである。一部を引用しておく。

…公序良俗を乱し、人権を侵害する表現を取り締まる法律として「メディア良化法」が成立・施行されたのは昭和最終年度である。検閲の合法化自体が違憲であるとする反対派を押し切る形で成立した同法は、検閲に関する権限が曖昧で拡大解釈の余地が広く、検閲の基準が執行者の恣意で左右される可能性を意図的に含んだかのごとき内容であった。…メディア良化法の検閲権に対抗する勢力となることを期待されて成立したのが通称「図書館の自由法」―既存の図書館法全三章に付け加える形で成立した図書館法第四章である。

…図書館法第四章　図書館の自由

第三十条　図書館は資料収集の自由を有する。

第三十一条　図書館は資料提供の自由を有する。

第三十二条　図書館は利用者の秘密を守る。

第三十三条　図書館はすべての不当な検閲に反対する。

第三十四条　図書館の自由が侵される時、我々は団結して、あくまで自由を守る。

…しかし、それなら批判する人々は蹂躙される図書を守ってくれるのか。貧弱な装備で図書を守る館員に代わって血を流してくれるのか。図書と図書館員を守るには武装強化するほかはないと稲嶺はすべての批判を押し切った。公序良俗を謳って人を殺すのか。あの日、日野の襲撃者たちを弾劾した言葉はそのまま稲嶺を弾劾する。本を守ることを謳って人を殺すのか。殺すとも、と言い切れるほど割り切ることはできないが、やはり稲嶺は無抵抗を却下する。「図書館はすべての不当な検閲に反対する」図書館の自由法に保障されたその権利は、無抵抗では維持できないことが既に証明されている。

④学問の自由

羽仁五郎(1976)『自伝的戦後史』から、関心をもった論述を抜き出してみた。この本は日本人民への遺書として書いたという。彼のダンディズムには若干辟易し、苦手ではあるが、大学や学生に対する情熱には深く共感している。

私が東京学芸大学教授を退職して、やっと教員養成の義務から解放され、改めて、大学とは何かを反省し、大学の原初を求めて、日本村塾 Nihonnmura College for Environmental Studies を始めたのは、羽仁五郎の大学論の影響によるところが大きい。

> 日本の国民はオーストリア｛注：永世中立1955｝の国民と同じように、平和憲法を守ろうとしてきたのだ。ただ一部の支配者が、押しつけられた憲法だとか、あるいは日米安保条約は憲法と矛盾しないとか、勝手に解釈しているだけで、国民がその誓いを守ろうとする態度は、そんなに違うものではない。…治安維持法を議会で通した時の担当内務大臣の若槻礼次郎が、治安維持法は決して思想を弾圧するものではない、国体を変革し、つまり天皇制を倒して私有財産を廃止するといった行動を対象としているのだと約束したにもかかわらず、これを最初に学生に向かって適用したことは、大きな衝撃を与えた。…クレメントのその本に僕が敬意をいだいたのは、明治時代までをちゃんと書いていることだ。当時の日本の歴史の本といえば、明治維新さえ書いていない。幕末で終わりだ。つまり現代史を問題にしていない。・・彼は、日本の政党というのは政治的原則を中心にした近代的政党ではなくて、有力な人物を中心にした派閥だ、公の利益についての意見の相違ではなく、私的利益の対立の産物だ、と批判している。・・なぜ、日本で政治的原則を中心にした政党ができないかといえば、天皇制というものがあって、政治的原則においてはいずれも天皇制護持よりほか許されない。だからイギリスの場合には、陛下に対する反対党、労働党などがありえても、日本では天皇に反対する政党はありえない。そこには政治上の原則の対立は成り立たないのだ。…農民の一人である大木ヨネは、六つか七つの頃から子守をさせられ、小学校へも行けず、楽しかった日は一日もなかったが、三里塚闘争が始まって、はじめて人間の幸福を知った、と語っている。これは日本の明治以来の文部省の教育というものが、いかに人間をだめにするか、むしろ小学校へも行かなかった人のほうに、世界に誇るに足る人格が形成されるという、おどろくべき事実である。…日本の戦後の学生運動が大学改革を要求したのに対して、政府も大学当局も、なにひとつ改革していないどころか、彼らは大学改革を要求した学生を多数逮捕し、法廷に立たせ、刑務所に送っている。…ケンナン｛プリンストン大学教授｝のフレッシュな感覚を失わない学者としての良心、自信、自分の知らないことはすなおに質問する態度に、尊敬と親愛とを感じて、ヒトラーのアウシュビッツそのほかの強制収容所における大量虐殺が、いかに人類の歴史上空前の極度に残虐な人間差別すなわち人間性否定による、計画的すなわち官僚主義的行政的な、大量的すなわち大企業的な殺人であるか、また独占資本の時代としての現代にはじめてあらわれたこの大量虐殺は、人類の現代史の終末的恐怖を意味し、この現代における人類の絶望からの解放なくして、人類の未来の希望はありえないので、したがって、現代のすべての学問また芸術また宗教などの思想は、アウシュビッツから出発しなければ、現代の思想ということはできず、ナンセンスといわなければならない、というぼくの現代史の理論をうったえた。

三里塚の農地共有之印

5．今後の補足条項：環境保全―自然、生命と生活に関わる倫理

（1）環境保全

1）私見主文

私たちの生活はユーラシア極東の日本列島の豊かな天恵のもとにある。ここは大八洲、秋津

島、ヤポネシアともよばれ、長い花綵列島を成している。気候温暖、生物相は多様性に富んでいるが、古来、台風、地震、津波、火山爆発などの自然災害にたびたび脅かされてきた。とりわけ近年は異常気象が多く、環境変動が著しくなっているようだ。自然災害はさらに人為災害を誘発することもあり、現代では科学技術の発達で過酷な人為災害も多くなり、水俣病などの公害にまで達してもいる。
もちろんこれまでにも、環境変動や社会変動による飢饉は人類史において各地でたびたび起こり、最も人口減少（制御）に大きな影響を与えてきた。さらに、戦争や病気も人口減少に強く関与したが、これらの事象は科学技術が発達した現代においてもなんら変わることがなく、いずれ起こることである。そのうえ現代では、環境変動が自然によるものに加えて、その発達した現代科学技術の結果による人工によるものが増大しているので、地球規模の環境破壊の結果や影響は予断を許さない。

したがって、中央政府はオリンピックなど目をくらますような経済政策は転換して、東日本大震災の復興や農山村地域の再生に経済政策を重点化すべきだ。年金基金の株式投資で７兆円余りの損益が出たとか、オリンピックの準備費用があまりにも膨大、軍事費の膨張などを見聞するにつけて、税金の使い方が違うと考える。まずは、福島の原子力発電所の安全措置を、被災地住民の移住や日々の生活補償を最優先すべきだ。ここにこそ経済政策を有効に機能させるべきだ。本文を書いているうちに、熊本・大分の地震が起こり、いまだに収束していない。火山列島の危うさを忘れることなく、美しい日本の風土を活かして、楽しく暮らしたいと願うのなら、災害対応に関して誰がどのように対応するのか、などの検討も加えて、条項に追加してほしい。

自然環境をさらに破壊し、地域社会を分断するような虚偽・虚構の地方創生など不要だ。自然、生業、第一次産業、生活文化などを重視せずに、しっかりした建造物を造りメンテナンスをするよりも、短期間で壊しては再開発や再建造を繰り返して行っている。土木建築業や自動車産業にばかり国家予算が投入され、その負債は重なるばかりで、国家財政が自己破産するのではないのかと、地道に暮らす市民としてはとても心配だ。

人口増加と環境変動により、また、輸入依存の食糧政策により、将来必然的に起こる気候変動、飢饉や飢餓に対する備える政策を充分に行っていない。他国の侵略に対する予防的自衛も食糧も、他国に依存する非独立的な、対内植民地化政策をとっているように見える。「地方自治体」、地域社会は自治を拡大して、住民の安全や幸福を、伝統的な技能や知識の継承を、素のままの美しい暮らしを求めるべきだろう。

さらに、個人の生命や環境にも多大な影響を及ぼすと想像される科学技術、とりわけ臓器移植や遺伝子組み換え、万能細胞など生命科学技術の過剰な操作には賛成できない。科学技術はほどほどの便利さでとどめ（モラトリアム）、使用前に安全確認と適正かどうかの検討を十分にすべきだ。事実に基づかない科学的言説は虚偽であり、科学とは言わない。生命倫理や環境倫理を重視して、人間がどこまで機械文明の便利さを求めるか、その結果、生き物個体として退化し続けるのか、どこで限界線を厳格に引くのか、考えなければなるまい。

憲法改定・補足にあたっては、環境保全、科学技術の在り方、第一次産業の持続、伝統的知識体系の学習継承のための機会に関する条項を強調して追加するように検討がほしい。環境権の保障のもとに、企業の責任と政府の責務を明確に規定すべきで、公害対応や被害者への補償を条項に加える必要がある。

2）補論

上記に引用したアレクシェーヴィッチ（1997）『チェルノブイリの祈り』には、事故に関する歴史的情報が次のように付録されている。

> …ベラルーシの領土には原子力発電所は一基もない。・・一九八六年四月二六日午前一時二三分五八秒、爆発が起こり、チェルノブイリ原発第四号炉の原子炉と建屋が崩壊した。チェルノブイリの事故は科学技術がもたらし

> た二〇世紀最大の惨事となった。…事故の結果、大気中に五〇〇〇万キュリーの放射性核種が放出されたが、その七〇パーセントはベラルーシに降ってきた。…長期にわたる低線量放射線の影響の結果、わが国では、がん疾患、知的障害、神経・精神障害、遺伝的突然変異を持つ患者の数が毎年増加しつつある（『チェルノブイリ』集、ベラルーシ百科事典社、1996）。

福島原子力発電所の崩壊後の経過措置は、アレクシェーヴィッチが聞き取った証言と比較すれば、チェルノブイリの事後措置の過程と酷似しているところが少なくない。発電所近隣の住民に事実が早く十分に知らされずに（隠され）、即応した措置がなかったために、被爆した人々が多い。最優先は当事者による現場での対処、即応した支援体制であったが、当時の対処経過を時系列で再構成した資料を見ると、会社や政府の混乱が対応を遅らせ、被害を広げたようだ[注3]。これとて、水俣病での対応措置と酷似していて、事実隠しから被害が拡大した公害の歴史から学んでいないといえる。福島原子力発電所の崩壊はチェルノブイリの事例に勝るとも劣らない、「過酷事故」レベル7だったことが追認された。

福島の事後措置はチェルノブイリから学び、まず被災者の救援で、移住を含めて全面的に速やかに生活や健康被害の補償をすべきだ。チェルノブイリでの居住禁止区域や移住必要地区と比較して、福島の場合は同放射能汚染地区に居住し、また中央政府が近い時期に帰還させようとさえしている。東京電力と中央政府の責任において、少しでも早く被災地域住民への移住を含めた補償を最優先すべきだ。

一時は、5000万人の避難まで想定された福島原子力発電所の過酷事故にも懲りずに、また現在も事故処理が進まずに、多くのことが隠されていると疑われ、後追いで公表されているだけでも多量の放射性物質を海にも流している。事実を隠すことが風評被害と現実被害を拡大する。長期的には福島原子力発電所の廃棄処理を、期日を決めて行わねばならない。

しかし、チェルノブイリによって世界が変わったとまで、アレクシェーヴィッチが言ったのと同レベルのフクシマがあったにもかかわらず、一旦停止した全国の原子力発電所は中央政府の政策で再稼働に向かって進み始めた。被害者を救済もせずに、東京もそれなりに汚染され、今後も汚染の恐れがあるのに、それも忘れてしまおうと、東京オリンピックに資金（税金を含め）や建築資材など、いろいろなものが流されていく。オリンピックで一部の方々に「夢」を与えても、現実に福島から拡散した放射性物質による環境汚染は現在進行形で少しも解決に向かわない。その上に熊本でも地震被害が続いている。中央政府も東京都も、ぜひともオリンピック開催を速やかに返上して、フクシマ原子力発電所への対処、地震被災地への復旧・復興支援に全力をかたむけるべきだ。

企業も政府機関も利潤と税金はとるが、社会的責任を取って、被災者への緊急補償を充分にはしていない。多くのアメリカ映画やテレビプログラムが描いてきたように、実際には、国（中央政府）は世界企業コングロマリットに、制御されているのではないのかと疑われる。市民にはもちろん行政機関にさえ、高い秘密性をもったTPPに関わる協定はその典型ではないだろうか。極度に中央集権化した代議制民主主義を再検討して、地方分権・地域自治にもっと委ね、小規模直接民主制を基盤にするように、政治システムの改善を検討すべきではないのか。

（2）食料危機、飢饉、環境難民への対策

1）私見主文

環境も農林水産業も100年先を見て、常に教育・学習の中に組み込んでおかねばならない。環境でいえば、地球規模の気候変動、エネルギー、ごみ問題ばかりではなく、生物多様性および日常生活や伝統的生活文化の保全、このための教育・学習機会の重視が必要だ。この国の政策は、近代「明治維新」以降、第一次産業を軽視してきた。食糧自給率はあまりに低く、TPP（環太平洋戦略的経済連携協定）が実行さ

れれば、さらに農家の食糧生産意欲は衰えるだろう。大規模専業農家を助成するほかに、市民自らが小規模家族自給農耕や市民農園を拡大して、潜在自給率を高めるべきだ。農家・林家・漁家などの生産意欲や誇りを失わせる政策ではなく、減反など生産調整に後ろ向きの補助金を出すのではなく、適度な生産量に落としても安全な質のよい産物をより多く自給するべきで、このためには生産者の意欲と誇りに敬意を示すように、第一次産業政策を実施すべきだ。

日本で少子化、人口減少が進んでいるとはいえ、世界では人口爆発の傾向が進んでいる。当然ながら、食糧は不足し、自然や人為災害に伴い飢饉や飢餓も起こる。100年に1回であっても、家族や地域社会も対策を講じておくべきである。したがって、時間をかけた市民の内発的な議論により、憲法改定・補足に当たって、環境条項を追加して、第一次産業による生産の維持確保の保障、特に食糧生産を保障する条項を加えることを求めたい。

さらに、世界的な自然及び社会環境の悪化に伴い、環境難民が大規模に生じ、人々の大移動が起こるかもしれない。これまで、温和な日本に難民が流入する可能性を推測してきたが、原子力発電所公害が拡大すれば、日本から難民として海外に出ざるを得ない状況も想定せねばならなくなるだろう。したがって、憲法第二十二条の条項も、さらに検討を要することになる。

2）補論

現代中国における飢饉（1958～1962）は、自然災害に加えて、毛沢東が指導する国の政策の過ちによって拡大され、想像をはるかに絶する3600万人が亡くなったと推定されている。この国は有史以前から戦乱に明け暮れ、情けないことに歴史的に人の命があまりにも軽いようだ。チョムスキー（2001）は次のように述べている。

> 一つの犯罪の人間的被害を推定するとき、その場で殺された者だけでなく、結果として死んだ者も数えるということを思い出すのである。われわれが、公的な敵、もっとも極端な例を挙げれば、スターリン、ヒットラー、毛沢東の犯罪を考える場合、われわれが反射的に、しかも正当性をもって採択する道である。同様に、犯罪が意図とは違うもので、因習的イデオロギー的構造の反映であった、などの事実によって罪が緩和されるとは考えない。一つの極端な例を挙げれば、一九五八年から六一年にかけての中国の飢饉がそうだ。それは「過ち」であり、毛沢東には何千万人もの人を殺す「意図」はなかったという理由で、帳消しにはしない。また、飢饉に至った命令の個人的な理由をあれこれ勘案することによって罪は軽減されない。われわれが例えば見せ掛けでも真剣を装うつもりなら、われわれは同様の基準をわれわれ自身にも適用する、しかも、常に。

ソビエト連邦崩壊後について、アレクシェーヴィッチによるインタビューで多くの市民が述べていたように、共産主義が資本主義と内実結果的にはあまり変わらず、権力者が不正に蓄財して市民を貧困の底に置いていた。中国も同断なのだ。食糧は、相応して生命にかかわることで、中央政府はまずもってこの供給を保障せねばならない。日常的に自給率が極端に低く、自然災害や人為災害による非常時には、一層飢餓から餓死する危険がある。気候変動が著しく、人口も着実に許容量に近づけば、歴史から学べば当然ながら、食糧を奪い合うことになるに違いない。この状態に至れば、食べ物は金では買えない。したがって、行政府に全面依存するのではなく、家族や地域社会を守るために、都市民も自給農耕をするべきである。都市農家は実質的に耕作放棄をするくらいなら、近隣市民とともに地域食料自給のためにコミュニティー・ガーデンを共助として進めるべきだ。

3）難民問題

アフリカやアジア諸国からも数多くの難民が欧米を目指して移動してきた。現在は、シリア周辺の戦争による難民が悲惨な状況にある。日本は難民受け入れに閉鎖的であったが、今後の

対応に関しては検討が必要だ。上述したように、難民の受け入れとともに、難民として受け入れてもらう流れもありうる。

難民問題は、自由・平等、とりわけ友愛の課題である。昨今の日本人の精神性の低下、教養の劣化は目に余る。思いやりや譲り合う美徳が衰微し、経済至上主義、利己主義、刹那主義とでもいうのか、幼児・妊婦や老人を押しのけ、電車で席を奪い合い、自転車は逆走、歩行者も信号無視、怒りが暴力に向かう。いわゆるオレオレ詐欺や空き巣、強盗…。社会的に地位が高い方々から下々の庶民に至るまで、人様に迷惑をかけない、何もかもおてんとうさまがお見通しだ、といった個人を律する行動規範が形態も機能も弱めている。道徳・倫理は国家から強要されるものではないので、市民個人が自ら律しないと、憲法前文の理想は絵に描いた餅になってしまう。素のままの美しい暮らしを求めて、教養を豊かに磨き、楽しい人生に目覚めたい。

6．付論：日の丸と君が代

公立初等学校ですっかり刷り込まれて、いまだに歌える数少ない歌は「日の丸」と「君が代」である。これらの歌は日本人にいろいろな感情を引き起こす。当然ながら、憲法に国旗・国歌としての規定条項があると思っていたが、意外なことにない。

日の丸の歌は、「白地に赤く日の丸染めてー、ああ美しいー日本の旗は・・」だったと思う。この赤は血の色である。忠臣蔵の赤穂浪士たちが切腹するときの血の色である。武市半平太瑞山や三島由紀夫（最近では）の切腹の血、高杉晋作の吐血、二・二六事件の反乱軍青年将校たちの銃殺の血、その色である。純白の死装束や雪の上に滴り落ちた血、その色である。少年期には、私はこのような死に憧憬して、何度も切腹のまねをした。自分も含めた日本人のこのような死への心性は何なんだろうか。いわゆる「武士道」というもので、臣下は常に死をもって君主に尽くすこと、これこそが美しい日本人の生死だというのだろうか。しかし、庶民は武士ではなかったので、庶民の自死（あるいは戦死）

早良親王（崇道天皇）を祀った下御霊神社

を強要したのは別の何かかもしれない。

「死！ それは如何に荘重な、しかも親密な重みをもって現代に響き渡ることだろう。死は、青年の胸に甘味な、粗暴な陶酔の歌を奏でる」‥埴谷雄高（1976）は未完の長編『死霊』のなかの登場人物首猛夫に、戦争と革命の時代である現代の痼疾を診断させてこう言っている。

> あっは、少し優れた扇動家の課題は死の理由を正当に見つけることにある！ 死への必当然な理由を保証する発見が〈選ばれた人々〉の緊急課題になっている。誰が最も優れた死を示し得るかが、現代の最大の特色をなしているんです！ それこそ、愚劣で崇高な危機の時代である。生を保証する何物もなくなったのだ。おお、誰が再びそれを決然と表白しうるだろう。

日本の自然は美しいが、血で染め抜いた戦陣の印であった日の丸は決して美しい旗ではない。私の友人の幾人かは、日の丸を国旗として認知したくないという節操のために、職を辞し、あるいは失った。しかし、私は血塗られた歴史の重みを負ったうえで、慣用の国旗として認知するのをよしとして妥協する。ただし、旗を物神化して拝することを強要されたくはない。思想・信条の自由は優先されることだ。

天皇家が万世一系というのは、天皇家の家系統間の皇位継承をめぐる諍いである壬申の乱（672）、早良親王（崇道天皇）の事件（785）や南北朝対立（1336 ～ 1392）などいくつかの史

実によって、否定する議論がある。その程度の万世一系というのなら、天皇家に限らず、庶民といえどもその祖先は苦難を乗り越えて生命をつないできたのであるから、万世一系と同じようなことである。三種の神器が天皇家の正統性を証左するというのも、南北朝の対立の事例を見れば、物神に証を求めるようで、つくられた神話ファンタジーのような稚拙な話ではないか。天皇制が象徴としても、政治に関与する点において、また、とりわけ身分差別を温存する点において、賛同できない。近代から現代の社会はあらゆる差別を逓減する方向に進んできた。三島由紀夫は神話世界に紛れ込んだのだろうか。

日本軍の兵士は、日の丸に武運を誓い、この旗を掲げて異国を侵略し、人々を殺し、かつまた自ら殺されていった。このことから、第二次世界大戦後、多くの日本人は日の丸を嫌悪した。しかし、初等学校では「日の丸」の歌を教え続けた。所詮、国旗というものはどこの国でも、血塗られたもので、こうした歴史を染み込ませている。私は歴史の事実を認めて、消極的ではあるが、何とかこの血染めの日の丸の国旗を受け入れようとしている。日の丸に反対している知人もいないわけではないが、私は、消極的にではあるが、何とか受忍しようとしている。

第二次世界大戦における日本軍による南京虐殺、強制連行・労働、従軍慰安婦など、あるいはアメリカ軍による原子爆弾による虐殺や都市の空爆は、非戦闘員である市民への無差別な殺人的暴力であった。こうしたことは、国家の責任義務として、時代を越えて市民に補償をすべきことだ。戦時といえ許しても、忘れてもならない。アウシュビッツと同断である故、戦勝国アメリカの戦時行為を告発すべきである。同盟国だとか安全保障を受けているだとかに関わらず、近現代の戦争犯罪は記憶に残し、告発し続けるべきである。

しかしながら、もう一つの、君が代の歌は、「君がア代オは、千代にイーイ八千代にイー、細石のオー、巌となりイーて、苔むすまアアーで」だったと思う。いろいろな偽善的解釈をする似非文化人もいるが、「君」はあくまでも「天皇」であって、「あなた」ではない。自由、平等、友愛を求めて、いわゆる「戦後民主主義」をたとえ形式的なおざなり（黒塗り）に教えられたとしても、この民主主義の論理からは「天皇制」に賛同することはできない。だから、いまだに初等学校で「君（天皇）」の万世一系を寿ぐ歌の強要には納得がいかない。薩長閥の靖国神社の国家主義を引きずる初等学校の強制・規則の教育と、本来、学問の自由を標榜する大学の自治・自律の教育とが、ベクトルを異にするのは当然のことである。

それでも、今日再び、ほとんど思考停止したまま、反省もしなかった初等教育はもちろんのこと一層、大学さえも「国旗日の丸」の掲揚と「国歌君が代」の斉唱を強要されている。市民個人がそれぞれに良心、信条、信仰の自由によって、振る舞えばよいことで、日本国憲法もこのことは謳っている。自由市民としての私は、国家に強要されるということがいやなのだ。国歌は、天皇家の「君が代」ではなく、庶民の「ふるさと」がよい。「君が代」を歌うように強制されて、起立して歌わなければ処罰されると怯え、思考停止になり、陰鬱になるよりも、「ふるさと」を晴れ晴れと歌って、愛郷の情に心洗われたい。

さて、いまさらながら、この「国家」という訳語は適切なのだろうか。あるいは日本で造語されたのだろうか。「国」というのなら、nation や state の訳語だと思うが、「国」に「家」がつくところが、日本的であるようだ。nationalism は民族主義と訳し、国家主義とは訳さない方がよいのではないか。愛国主義は patriotism であり、どちらかというと愛郷的であって、国家的ではない。旧来の「家イエ」を拡張した「国家」、「家長」としての「天皇」は、明治維新に作為された虚構ではないのか。

近年、若者たちの就職活動におけるリクルートスーツの画一性が恐ろしい。個性をひた隠し、他者との差異を消すことが求められているようだ。心の中から発する自己表現が、その人の個性的なファッションだ。鍛え上げた個人の能力＝個性こそ、社会に問うべきではないのか。

日本の自然は美しい。そこで暮らしてきた人々の多くは礼節を身に着けていて、その立ち振る舞いも美しい。ゴッホは江戸時代に生きた、その日本人をまるで花のように生きていると称賛して、描いてくれたのだ。明治維新に作られた虚偽の歴史を、事実をもとに検証して、薩長閥や水戸学派の「国体論」に脅かされないように、その呪縛から解き放つように、自ら広く深く高く学び、能力満ちあふれた日本人たちが闊達に自由・平等・友愛を基調とする、素のままの美しい暮らしを保障する社会を築いてほしい。

「国旗及び国家に関する法律」は平成11年8月13日に制定、即日施行されている。同年9月17日に出された文部科学省初等中等教育局長・高等教育局長の通知「学校における国旗及び国家に関する指導について」には、「この法律は、長年の慣行により、国民の間に国旗及び国家として定着していた『日章旗』及び『君が代』について、成文法でその根拠を定めたものである。」と記されている。慣行だからというだけで、強い根拠は示されていない。それなのに、国旗掲揚や国歌斉唱が強要され、教員個人がその良心に従って応じなければ、行政処分される。

内閣官房長官が、政府の見解を述べるために、壇上に上がって一礼をする。私は手話通訳者に対して、会釈をしているのだと思っていたが、どうも国旗に対して頭を下げていたようだ。なぜ、物神（呪物）崇拝でもあるまいに、日の丸に一礼するのか、とても違和感が強くある。国旗は国の象徴なのだろうか。国の象徴は天皇ではないのか。天皇に敬意を表すために礼を尽くすのなら、それなりに理解できるが、さほどの歴史的根拠もない日の丸の旗に頭を下げる意味が理解できない。

そこで、「日の丸」と「君が代」の歴史を、対照的な思想から書かれた本を比較して、検討してみることにした。長野県中村村の村長である曽我逸郎（2014）の論調は、私の考察状況にとても近い。他方、石井公一郎・高橋史朗（2000）の論調は中央政府御用達の典型ともいえよう。ちなみに、石井は日本会議副会長で、両人共に臨時教育審議会専門委員であった。両論を比較して考察すると、それぞれの対象的な論理が明瞭になる。

まず、曽我の著作から主な意見を少し長くなるが引用する。

> …ところが、「少数意見は多数をとれない意見で、多数をとることは上意下達で支配することだ」。あるいは「空気や雰囲気を読んでそれに従え、和を尊び国旗に礼をしろ」と言ってしまえば、それで止まってしまう。国旗はどうあるべきか、国家はどうあるべきか、あるいは人の幸せとは何なのか、社会と個人の関係とは・・と考えていくことを、統治するのに不便だからというので踏みにじる。「考えるやつらは面倒臭くてかなわんわ」というのが、「国旗に礼をしろ」「国歌を歌え」というところに発露しているんではないかなと思います。…北朝鮮のミサイルも、おそらく「あんなもの来ないよ」と思っていると思うんですね。だってそうでなければ、日本に五十四基も原発を作って、そのほとんどが日本海側にあるなどという無謀を説明できない。・・結局、原発にせよミサイル・ディフェンスにせよ、利権が動くところがあって、そのためにやるんであって、実際にミサイルが飛んでくるのを防ぐため、あるいは国民の安全を守るためではない。…
>
> …有名な軍歌で「同期の桜」というのがありますが、・・つまり勝つことは全然考えていないんですね、もはや。見事に散ることだけが目的化している。・・死ぬことしかイメージできない、そんな戦争にもかかわらず、止めましょうと言えない。…そもそも戦争とは、一％の人たちが、自分たちの欲望や都合のために、九九％の人たちの命や肉体を利用することではないでしょうか。・・我々は皆、執着ばかりが強い凡夫、弱い人間です。戦争で追い詰められれば、どんなことでもやってしまいかねません。…ところが、戦争に負けるや否や、生き残った一％に属する人たちは、鬼畜米英だったはずのマッカーサーに擦り寄り、媚びへつらい、自分たちの地位の継続を図りました。…戦争で塗炭の苦しみを味わっ

た被害者である一方、他国に怒り、恐れ、他国を見下してはしゃぎ、勝ち戦に万歳を叫び、隣人を非国民と罵ったのも国民です。そういう冷静さを欠いた国民の反応が、戦争の深みへと国を導きました。国の指導者と、歓心を買いたいマスコミに加え、踊らされやすい国民感情も、戦争の原因だったと思います。

…｛注：一ノ瀬2010を引用しながら｝靖国神社に関して、しばしばA級戦犯合祀が一番の問題にされる。しかし、私はそれにはずっと違和感があった。なぜなら、その背後には、A級戦犯にだけ罪を「しょっかぶせ」て、自分たちは罪のない不幸な犠牲者だと考え、それで戦争責任の問いを済んだことにしてしまうずるさを感じるからだ。…日本からも国民からも離れ、日本でなくともどこかで、日本人でなくとも誰かの上に、万世一系の天皇が立っていれば、それで国体の護持になる、と捉えている。異郷の地で異国の民に、天皇が天下った神の子孫であると信じられ崇められれば、それでよいのだろうか。私はそうは思えない。日本人が一億玉砕し、国土が荒廃し、八百万の神々の祠が崩れ燃えても、天皇制さえ維持できればいいのか、日本の民やその暮らし、文化か、天皇制か、どちらが重要か、そういう問いだ。愛国者を自認する人は、どう考えるだろう。

…それぞれの地域ごとに古くから受け継がれてきた文化と、そこに寄り集う人々の暮らしこそ、一番大切にすべきものではないのか。まさに日本を「美しい国」たらしめるものだ。・・目先の経済か、核に絡む何か密約でもあるのか。いずれにせよ真の意味の「美しい国」や人々の平穏な暮らしを犠牲にして、許される理由はない。

市民（庶民・常民）も歴史的な責任は認知し、受忍すべきであろうが、国家や王侯とは異なって現代的に大きな義務を負ことはできない。国家や王侯は現代にも及ぶ責任義務の回避のために、歴史的な事実責任を否認したいのだろう。一ノ瀬（2010）はもう一つの視点で、地域社会（郷土）が兵士、その家族などと国家の間にあって、いかに兵士を死へと追いやったのかを検証している。次に、石井・高橋の編著から主な見解を要約しておく。

…この時、いち早く海上防衛のための大船の建造を願い出たのが、水戸藩主の徳川斉昭と薩摩藩主の島津斉彬です。斉彬は、新しく造った船が外国の船と間違われないように、日本国のものであることを表す船印として、「白帆に朱の丸」印を付けたいと幕府に提案しました。しかし、幕府はながく「朱の丸」を幕府の御用船の船印として使っていたので、・・。それに対して水戸の斉昭は、昔から多くの人々が親しんできた「日の丸」こそが国の総船印にふさわしい、という意見を幕府に力説しました。その結果、幕府も日本の船印を「日の丸」とすることを決定したのです。

…日本の国歌「君が代」に歌われている「君」とは、天皇陛下のことです。…ところが、昭和天皇は、「戦争の一切の責任は自分にある。皇室の財産を差し出すので飢えた国民を救ってほしい」とおっしゃいました。当時の憲法（大日本国憲法）の下では、天皇陛下に法的責任は生じない仕組みになっています。また、戦争に賛成したのは、議会や政府やマスコミで、天皇陛下は最後まで平和的な解決を望まれたのに、このようにおっしゃったのです。

…維新の大業を成就した明治の頃より、国の祝日には家門に国旗が掲げられるようになりました。

さらに、編者である高橋は本書を次のように解説している。気になった点を引用しておく。美しいという情緒的な言葉に、虚偽が潜ませられている。明治維新によって、事実を隠し、虚偽で飾られ、改変された歴史はオーウェルの『一九八四年』よりも奇である。曽我の論理とよく対比して、考えてみていただきたい｛注：特に、私が下線を付した語句｝。第二次世界大戦から何を批判的に学んだのだろうか。教科書を黒塗りしただけで、ほとんど反省もせずに、全体主義の「国体」そのままを保身しようとし

ていると考えられる（下線は著者による）。

国旗・国歌の法制化をめぐっての論議の中で気になった言葉に「強制」があります。入学式や卒業式での国旗掲揚や国歌斉唱を「強制」と捉え、憲法で定められた「思想・信条の自由」に反するというのです。どうも日本人は「強制」や「自由」という言葉に弱いようで、これらの言葉を出されたら黙りこくってしまいます。しかし、式典の式次第に国旗掲揚や国歌斉唱を取り入れることは個人の権利の侵害になるどころか、明らかにいい意味での教育作用なのです。…国旗掲揚や国歌斉唱に際して起立を求めたり、国家を歌うのを求めるのを「強制」と捉える向きがありますが、これらは儀礼の問題であって、国際的な慣行・マナーなのです。従って、起立や斉唱を「強制」と捉えること自体が間違っています。…思想・信条の自由とは、内心の自由について国家が制限、禁止したり、自らの思想・信条の表明を強制したりすることは許されないという意味であり、式典の一部である国旗掲揚や国歌斉唱は子どもの内心の自由を制限・禁止したり、思想・信条の表明を強制したりするものではありません。…教師にも「内心の自由」はありますが、心の中で反対することと具体的行動を起こすことは別問題なのです。…つまり“反対の「強制」”は、子どもの教育を受ける権利を侵害することにつながり、何人といえども、学校行事を私的な思想や信条で私物化することは許されないと思うのです。…自国の歴史に対して「誇りある反省」をすることは大事ですが、このことと国旗・国歌問題とはまったく別問題なのです。敗戦国ほど国旗や国歌を大切にし、決意を新たに国民的連帯を強めて新国家建設に邁進し、民族の名誉と誇りを守ってきた事実を忘れてはなりません。…戦後日本の教育は、「国民」として身につけるべき基礎的・基本的な教育内容を十分に教えてきませんでした。国旗・国歌の法制化を機に、国民を育成するという義務教育の原点にぜひとも立ち返ってほしいと思います。…戦後五十数年間続いてきた教育現場の不毛な政治的・イデオロギー的対立に終止符を打ち、公教育に美しい日本人の心、感性を取り戻し、世界に向かって美しい日本の文化を発信していく契機としたいと思います。

おわりに

人はどこで、いつ生まれるかによって、人生の大半が決まってしまう。

私をかわいがってくれた祖父は虫も殺せぬ人だった。陸軍に徴兵されシベリアに行き、この時に戦闘はなかったが、上等兵になって小さな勲章をもらったそうだ。しかし、シベリア出兵では「ロシア革命軍」との戦闘で、数千人の死者が出ているのだから、おそらく祖父も参戦したのかもしれない。小学１年生の時に他界したのだが、その遠因は敗戦直後アメリカ軍で働いていて、アメリカの子どものいたずらか、トラックの荷台のロックが外されていたことを知らずに、乗ろうとして転落し、頭を打ったせいだったと聞かされた。彼は和菓子屋を開業していたのに、なぜか、幼児の私は当時実に珍しいアメリカ製の足漕ぎ自動車（乗用玩具）を持っていた記憶がある。さらに、父は海軍に徴兵されたが、戦争末期の３か月だけ軍港呉で松根油を掘っていたと言っていた。

私にとって、ありがたいことには、二人とも戦死を免れた。私は第二次世界大戦後に生まれて、これまでに兵士として徴兵されずに戦争に行くことがなかった。このような真に幸運な時代に生まれ合わせるのは人類史上まれなのかもしれない。しかし、私個人はどうであれ、現実の歴史は今でも各地で戦争が起こり、兵隊は殺傷し合い、市民も巻き込まれて死傷し、また、逃げまどい難民となっている。資源や権力争いの利害による戦争、このような不条理によって、個人、家族、地域社会が悲惨な不幸に陥ることはもうたくさんだからこそ、戦争を回避し、非暴力で、「自由、平等、友愛」の文化的進化が世界各地の社会に定着することを切に望むのである。

人は欲望に煽られ、恐怖に縛られて、喧伝に

「環境教育推進法」が可決承認された時の参議院本会議の傍聴券

騙され、自ら学び、考えもせず、容易に支配され、自縄自縛に陥る。学び考えることから逃走し、自由からも逃走し、無知（無恥）に溺れて、戦争に我を失う。自分で歴史を学び直し、体験から直観し、人生を美しく、しなやかに自由に素のままに暮らそう。

ここに引用した先人の書籍を参考に考えるだけでも、海洋の東西、大陸の南北を問わず、また時代の新旧を問わず、現世の欲望と悪意に満ちた人ばかりではなく、その中でも、名利を求めず、純朴、誠実な、聡明で、勇気ある、心の広大な人々は少なからずいたことがわかる。古今の古典書を読めばそれは確信できる。原初以来の暗闇の中の妄想を隠し持った人間でも、環境ストレスがそれを呼び覚ましさえしなければ、大方は良心的な市民として信頼の社会を維持できるはずだ。自然災害に備え、人為災害を予防すれば、環境ストレスは大きくならないように制御でき、さらにいっそう「自由、平等、友愛」の市民社会に、「じねん、わかちあい、おもいやり」の心をもって近づくことができよう。他者に依存し、外発的に託すのではなく、自らの希望を内発的に創ろうと、今から始めてゆっくりと日々の暮らしの中で実行するのである。革命 revolution の悲惨と、改革 reformation の虚妄に拠らない、非暴力的な移行 transition の方法を自ら学び、深めて、知性を磨き、普及啓発しよう。

このためにこそ、憲法には最良の理念や規範を描いておいてほしいのである。国民主権であるからには、この国の市民が地域で憲法学習会を度重ねてもち、憲法をまず学び、民間で「五日市憲法」が検討されたように、改定・補足の必要性の課題を、年月をかけてじっくりと検討すべきである。憲法改正の手続きについては第九十六条にあるように、国会議員の三分の二以上の賛成で国会が発議する上に、さらに国民の過半数が賛成せねば改正はできない。敗戦後、異国に押しつけられたのだと、いつまでも言われないように、市民はしっかりと学び、考えて、意見を述べ、改定・補足が必要ならその骨子を国会議員に対して提案すべきである。

私には、「環境教育推進法」の必要性を 2002 年に提案し、NPO 環境文明 21 と愛知和夫議員とともに学習会やシンポジウムを開催し、さらに全政党の協力を得て、議員立法していただいた経験がある。これが立法府国会での民主主義的な立法の手順ではなかろうか。憲法改定・補足の内容は、市民から国会議員にその骨子を提案して、国会で審議するという手順であってほしい。

日本では流行学問も商品として、食品のようにすぐに賞味期限が来て、捨てられる。不易学問は時間をかけて、過去（先人）から学び、現在（生活）を体験して、考え、さらに行為し、未来に向けて蓄積するものだ。一層深い不易を求めて学問は常に動いているのだから、いつも新鮮なのだ。賞味期限切れ等あるのは、名利のために、浮世に迎合した似非学問だ。

しかし、若さの熱情は素晴らしいが、やはりそこには不十分な体験によって、優柔か性急に流されるところがある。青少年、若者たちの将来世代は批判的にでよいから、先人が重ねた年齢の経験知は大切に吟味したほうがよい。

私は第２の社会的人生から、第３の個人的人生に移行したので、「賞味期限切れ」をこれ幸いに、出家・隠遁するのがよいだろう。余生のある限り、第１の学校的人生以来の体験と学びを振り返り、自らの思惟と行為の責任を深く反省して、自律責任、自給知足する人生の最大遺物をアーカイヴしておこうと思う。企んで作為に諂い、他から操られるのではなく、自ずと素朴に依り、自ら律する人生であったことを証しておきたい。

引用・参考文献

アレクシェーヴィッチ , S. 1985（三浦みどり訳 2005）、ボタン穴から見た戦争――白ロシアの子供たちの証言、群像社、東京。
アレクシェーヴィッチ , S. 1997（松本妙子訳 2011）、チェルノブイリの祈り――未来の物語、岩波書店、東京。
アレクシェーヴィッチ , S. 1998（松本妙子訳 2005）、死に魅入られた人々――ソ連崩壊と自殺者の記録、群像社、東京。
有川浩 2006、図書館戦争、角川書店、東京。
チョムスキー , N. 2001（山崎淳訳 2001）、9・11 アメリカに報復する資格はない！、文芸春秋、東京。
チョムスキー, N. 2005（木下ちがや訳 2009）、チョムスキーの「アナキズム論」、明石書店、東京。
エラスムス , D. 1511（大出晁訳 2004）、痴愚礼賛、慶応大学出版会、東京。
フランクル ,V. E. 1947（霜山徳爾 1979）、フランクル著作集 1 、夜と霧――ドイツ強制収容所の体験記録、みすず書房、東京。
羽仁五郎 1976、自伝的戦後史、講談社、東京。
埴谷雄高 1976、死霊、講談社、東京。
原田伊織 2015、明治維新という過ち―日本を滅ぼした吉田松陰と長州テロリスト、毎日ワンズ、東京。
平尾道雄 1966、龍馬のすべて、久保書店、東京。
廣井敏男・富樫裕 2010、日本における進化論の受容と展開―丘浅次郎の場合、東京経済大学人文自然科学論集　第 129 号：173-195.
一ノ瀬俊也 2010、故郷はなぜ兵士を殺したか、角川学芸出版、東京。
井上靖 1959、敦煌、新潮社、東京。
解説教育六法編集委員会 2003、解説教育六法 2003、三省堂、東京。
勝海舟 1898 頃（勝部真長編 1972）、氷川清話、角川書店、東京。
カント ,I.1795（高坂正顕訳 1949）、永遠平和の為に、岩波書店、東京。
小島毅 2006、近代日本の陽明学、講談社、東京。
小島毅 2014、増補　靖国史観――日本の思想を読みなおす、筑摩書房、東京。
古守豊甫 1963、南雲詩―ラバウル従軍軍医の手記、金剛出版、東京。
くさばよしみ編 2015、世界でいちばん貧しい大統領からきみへ、汐文社、東京。
クロポトキン, P.A. 1842（幸徳秋水訳 1960）、麺麭の略取、岩波書店、東京。
マルクス , K. ＝エンゲルス ,F.1848（マルクス・レーニン主義研究所訳 1952）、共産党宣言・共産主義の原理、大月書店、東京。
モア, T. 1516（平井正穂訳 1957）、ユートピア、岩波書店、東京。
村上重良 1977、天皇の祭祀、岩波書店、東京。
中澤伸弘 2010、宮中祭祀―連綿と続く天皇の祈り、展転社、東京。
奈良本辰也 1965、高杉晋作――維新前夜の群像 1 、中央公論社、東京。
大杉栄 1971、反逆への情熱―我が人生観 21―、大和書房、東京。
オーウェル, J. 1949（高橋和久訳 2009）、1984 年、早川書房、東京。
小澤萬記 1994、石川三四郎の反進化論、高知大学学術研究報告・人文科学　第 43 巻：185-172.
プレハーノフ , Г . В . 1898（木原正雄訳 1958）、『歴史における個人の役割』、岩波書店、東京。
プラトン , 375BC 頃（藤沢令夫訳 1979）、国家（上・下）、岩波書店、東京。
センプルン , J. 2013（小林康夫・大池惣太郎訳 2015）、人間という仕事―フッサール、ブロック、オーウェルの抵抗のモラル、未来社、東京。
瀬戸内晴美 1972、余白の春、中央公論社、東京。
司馬遼太郎 1963 ～ 1966、竜馬がゆく、第 1 巻～第 5 巻、文芸春秋、東京。
スイフト , J. 1726（中野好夫訳 1951）、ガリヴァ旅行記、新潮社、東京。
高橋和己 1966、孤立無援の思想、河出書房新社、東京。
ウッドコック , J.（1962、白井厚訳 1968）、アナキズム I 思想編、紀伊国屋書店、東京。
安丸良夫 1979、神々の明治維新―神仏分離と廃仏毀釈、岩波書店、東京。

注

注 1：フォックス ,W. 1990（星川淳訳 1994）『トランスパーソナルエコロジー　―環境主義を越えて』（平凡社、東京）から引用。

注 2：河原宏、フロム、トルストイ、津野幸人の引用による考察については、次のエッセイを参照。木俣美樹男 2014、『先真文明時代』への覚書、民族植物学ノオト第 7 号：29-37. 木俣美樹男 2015、生きるという任意・自律的な営為を動かす心情の省察、民族植物学ノオト第 8 号：23-66.

注 3：一部の言葉に整合性がないが、これは引用原文をそのままにしたからである。

注 4：吉田証言

http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A6&8F%E5%B3%B6%E7%AC%AC%E4%B8%2%6/01/12

［付録 1］自然文化誌研究会が担当した雑穀関連シンポジウム・研究会の小史

Appendix 1: A Short History of Millet Research Meetings conducted by Institute of Natural and Cultural History

自然文化誌研究会は創立当初から、雑穀に関するフィールド調査研究を主な課題の一つにしてきた。雑穀研究会の創立と事務局を担当したため、『雑穀研究』の発行、雑穀関連シンポジウム・研究会などの開催を何度か担当してきたので、記録しておく。独自の雑穀栽培講習会などは改めて個別に記録する。

第 1 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：1988 年 2 月 4 日～ 5 日
会場：つくば市
発表題目（発表者）：岩手県における雑穀の栽培（佐藤佳岳、東京学芸大学）／南西諸島の雑穀栽培（竹井恵美子、大阪学院大学）／ユーラシアにおけるアワの遺伝的分化（河瀬真琴、農水省生物資源研究所）

第 3 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：1989 年 11 月 22 日～ 23 日
会場：山梨県上野原町
発表題目（発表者）：関東山地の雑穀について（木俣美樹男、東京学芸大学）／インド亜大陸の雑穀調査の概要（阪本寧男、京都大学）／長寿村の食生活（古守豊甫、古守病院）／シコクビエといもち病の起源（加藤肇、農水省農研センター）／遺跡出土雑穀種子について（松谷暁子、東京大学）／プラントオパール分析による古代のイネ科植生について（外山秀一、山梨県文化財研究所）（降矢静夫、西原農家）

第 6 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：1992 年 11 月 28 日
会場：東京学芸大学
発表題目（発表者）：偽禾穀類アマランサス・キノアの紹介（冨永達、信州大学）／シコクビエの生育と利用、岩手県の雑穀と食生活について（大野康雄、岩手県立農業短期大学校）／ワイルドライスとネイティヴ・ピープルとのかかわり（和田富吉、名古屋大学）／キビの栽培・加工・調理について（多田正純、房総萬花園）

家庭栄養研究会・雑穀シンポジウム

期日：1992 年 11 月 29 日
会場：東京学芸大学
内容（発表者）：世界の雑穀とその食文化（阪本寧男、京都大学）／長寿村の食生活調査から見た雑穀（古守豊甫、古守病院）
分科会：生産・流通、栄養・健康、料理・食文化
＊雑穀標本・料理、村の紹介

第 9 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：1995 年 9 月 15 日～ 17 日
会場：北海道平取町二風谷
発表題目（発表者）：アイヌと雑穀（萱野茂、参議院議員）／アイヌの農耕文化と雑穀（吉崎昌一、北海道大学）／北タイ山地民の雑穀（落合雪野、京都大学）／アハーヤブが生んだマメ（井上直人、信州大学）／ヒエの精白法（大野康雄、岩手県立農業短期大学校）／現代子に受け入れられる雑穀料理（大谷ゆみこ、未来食アトリエ・風）
＊二風谷アイヌ文化博物館、シシリムカ二風谷アイヌ資料館など見学

第 14 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：2000 年 10 月 27 日～ 28 日
会場：群馬県六合村
発表題目（発表者）：六合村の雑穀について（叶田真規子、東京学芸大学）／ソバのアミロース

含量の地理的変異（井上直人・中田美穂、信州大学）／*Paspalum scrobiculatum* L. の栽培化過程における形質変化について（石川裕子・木俣美樹男、東京学芸大学）／転換畑の青刈りヒエ導入の農家事例調査（大野康雄・畠山貞雄、佐藤政行種苗育種研究所・岩手県種苗センター）／東南アジア大陸部における雑穀栽培と利用―ラオスの現地調査から（落合雪野）／ネパールのチェンパン族によるアマランサスの利用（根本和洋、信州大学）／系統保存雑穀のデータベース作成（1）キビについて（木俣美樹男、東京学芸大学）

第 2 回 雑穀研究会春の勉強会

期日：2002 年 4 月 27 日
会場：東京学芸大学
発表題目（発表者）：雑穀に関するイントロダクション（落合雪野、鹿児島大学）／ラオスの風土と人々の暮らし（虫明悦生、京都大学）／ラオス北部山地の焼畑農耕（縄田栄治、京都大学）

第 16 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：2002 年 9 月 27 日～ 29 日
会場：山梨県小菅村
発表題目（発表者）：山梨県丹波山村の雑穀栽培（石川裕子、京都大学）／山梨県小菅村の雑穀（井村礼恵、多摩川源流研究所）／山梨県上野原町の雑穀（井上典昭、都留高校）／南インドにおけるコラリのサマイおよびコドラへの擬態と混作（木俣美樹男、東京学芸大学）／機械収穫用ヒエ品種「ダルマ」（大野康雄、佐藤政行種苗育種研究所）／インドネシア、スラヤル島の雑穀栽培（竹井恵美子、大阪学院短期大学）／五穀の語り―雑穀の伝承について―『雑穀の社会史』以後の問題意識（増田昭子、立教大学）／最近の雑穀栽培の概況（井上斎、農林水産技術情報協会）

第 8 回 雑穀研究会　春の勉強会

期日：2008 年 5 月 17 日
会場：東京学芸大学 環境教育実践施設
テーマ：考古学における雑穀研究の現状
会長挨拶：竹井恵美子（大阪学院短期大学）
趣旨説明・司会：安孫子昭二（大成エンジニアリン K.K）
発表題目（発表者）：フローテーションによる雑穀の抽出（黒尾和久、あきる野市前原遺跡調査会）／レプリカ法による種子鑑定（丑野毅、東京国際大学）／縄文時代のマメ利用（中山誠二、山梨県立博物館）／縄文時代のイネ科雑穀の利用（高瀬克範、明治大学文学部）／弥生～古墳時代の雑穀研究の現状（浜田晋介、川崎市市民ミュージアム）／全体討議

第 26 回 雑穀研究会シンポジウム

期日：2012 年 9 月 1 日～ 3 日
会場：山梨県小菅村「人々と植物の博物館」
内容（発表者）：植物と人々の博物館の展示解説（木俣美樹男、植物と人々の博物館）／エコミュージアム日本村と雑穀（黒澤友彦・井村礼恵（自然文化誌研究会／植物と人々の博物館）／小菅村小永田地区神代神楽の見学／インド亜大陸起源の雑穀の栽培化過程と伝播（木俣美樹男、東京学芸大学）／南アルプス周辺山村の雑穀栽培（川上香、江戸東京博物館）／植物考古学から見た中部日本のアワ・キビ農耕の開始（中山誠二、山梨県立博物館）／雑穀と備荒貯蓄―郷倉について（増田昭子、立教大学）／レプリカ法による縄文時代晩期末土器のアワ・キビ圧痕の評価について（中沢道彦、 長野県考古学会員）／ウガンダにおける陸稲ネリカと在来作物の土地利用に関する実証試験（倉内伸幸、日本大学）／小菅村のコンニャク畑の見学（木下新造、コンニャク栽培者）／アカモロ（モロコシ）のニギリダンゴと豆粉調理見学および試食（守屋秋子、植物と人々の博物館）／雑穀栽培見本園の解説（黒澤友彦、自然文化誌研究会）／丹波山村の篤農家の話（岡部良雄・セツ子夫婦、植物と人々の博物館）／小菅村の古老の今昔物語（木下善晴、植物と人々の博物館長）／上野原市西原の雑穀栽培（中川智）／上野原市桐原の長寿館（長寿食）

［付録 2］植物と人々の博物館の活動　2015 年度の記録

Appendix 2: A Record of Plants and People Museum in 2015

1．日本村塾

Nihonmura College for Environmental Studies
伝統知を学び合うことで、「素のままの美しい暮らし」（Sobibo）を勧める。

１）民族植物学ゼミ 第２回
期日：12 月 19 日（土）　13：00 ～ 17：00
場所：東小金井駅開設記念館 マロンホール会議室
内容（読書会）：推薦図書『シャーマンの弟子になった民族植物学者の話』、マーク・プロトキン著、築地書館

２）自給農耕ゼミ 第３回
期日：11 月 8 日（日）
場所：藤野倶楽部、結びの家（神奈川県相模原市）
内容：収穫した雑穀の料理教室

３）扶桑くにゼミ 第３回
期日：2016 年 2 月
内容（読書会）：推薦図書『銃・病原菌・鉄』、ジャッレド・ダイヤモンド著、草思社

2．民具・標本の整理

3．パネル・民具などの展示

期日：9 月 1 日～ 10 月 30 日
展示テーマ：「雑穀街道」
内容：雑穀をモチーフにしたテキスタイル、種子とその解説、雑穀街道の現代史「古守豊甫医師らによる長寿村桐原調査から、現在のエコミュージアム日本村づくりまで」など。村人からはとても好評で、観光客も見てくださっていた。内容を少し更新して、相模原市緑区牧野「藤野倶楽部百笑の台所」に隣接した「結びの家」で継続している。

4．雑穀見本園

見本園には団子麦（もち性オオムギ）を蒔き、日本で栽培されている雑穀 6 種とアマランサス、キヌアの採種。
１）収穫したオオムギをその後、西原の中川さんに搗精していただいて、丸ムギとして、希望者 25 名ほどに配布した。
２）雑穀栽培見本園のキビは黒澤さんが 9 月初めに収穫、アワは 10 月 14 日に収穫した。収穫物は藤野陶器祭りで、金子さんらがパンを作る予定。
３）オオムギは 10 月 19 日に播種した。
４）「道の駅こすげ」駐車場脇の雑穀見本園の 7 種の雑穀は、道の駅の展示終了に合わせて、10 月 30 日に収穫した。

5．民族植物学ノオト

第 7 号を 2014 年 10 月 31 日に、第 8 号を 2015 年 9 月 30 日に各 300 部発行し、会員や研究者などに配布した。

6．森とむらの図書室

藤野倶楽部の安心農園に藤野分室を置き、原沢文庫を順次移動して、藤野倶楽部、トランジション・タウン藤野／お百姓クラブ他に、日本村塾／自給農耕ゼミに合わせて活用していただく。
この蔵書は、東京学芸大学の故・原沢伊世夫教授のご家族から寄贈されたもので、農林業関係の図書、特に植物病理学、農業教育や日本各地の植物誌が含まれている。藤野倶楽部の桑原敏勝代表のご厚意により書架が完成（ある映画の撮影で舞台になった部屋）。
小菅の書庫には、木俣文庫を順次移動。生物学、

栽培植物起源学、文化人類学、環境教育、農業林業政策、などが主なものである。

7．主な来訪者

3 月：タイからチナタット先生
4 月：大谷さん一家（つぶつぶマザー）
10 月：玉手山クラブ（秀明自然農法の会）
12 月：若林先生夫妻

8．その他

生物多様性アクション大賞 2015 に応募したところ、「審査員賞」を受賞した。

編集後記

筆者のみなさんからは早い時期に原稿をお預かりしていたのに、作業が延び延びになってしまったことを、読者のみなさまにお詫び申し上げたい。私は2010年5月に愛媛県の山奥にある実家にUターンしたが、今号では愛媛出身の西川至さんに出会うことができたし、私の同居人である土井利彦さんもわが山里のことを書いてくれた。また、西村俊さんのジビエ活用のお話や、山下祐介さんの東京と地方との関係性についての分析も思い当たることがあり、とても興味深いものがあった。また、木俣さんの憲法論は氏の書棚を覗くようなところがあり、この国のことを考えさせられた。

2016年4月から地元の「愛媛新聞」に週に一度のコラムを頼まれ、山暮らしのことを書かせてもらっている。これまで、いろんな人を取材して文字にすることはあったが、自分の思いをそれなりの意見として表出することはなかったので、最初は戸惑った。任期は1年で、残り2か月になったが、ここまでくると逆に「もっと伝えたい」という思いが強くなり、新たな表現の場をつくることの必要性を感じるようになっている。

さて、地方ではよく、「うちの地域には何もなくて、つまらないところです」という言葉が聞かれる。それに対して「いやいや、そんなことはないでしょう」と相手の謙遜を受け止め、愛想笑いをしてお茶を濁すような光景に出くわす。なんだかなあ…と思ってしまうが、実際、私の生まれた大洲市大川地区はほんとうに何もないと思っていた。もちろん、肱川というアユのとれる川があり、その川を利用して5月には鯉のぼりの架け渡しなども行われているが、これは多くの地方でも行われている。

ところで、愛媛県に伊予市双海(ふたみ)町という町がある。双海町は松山市や近隣の内子(うちこ)町などと比べて知名度が低い。全国にアピールできるものは何もない。住民は誰もがそう思っていた。しかし、「瀬戸内海に沈む美しい夕日があるじゃないか！」と気づいた人がいる。地域おこしのパイオニアとして、今では全国から声がかかる若松進一さんだ。しかし、若松さん自身が最初に夕日に気づいたのではない。よそからやってきたテレビ局の記者に、その美しさをほめられて「そうか！」と一大決心をしたのだ。何もない海岸を「夕日のミュージアム」というフィールドミュージアムにして道の駅を併設、「しずむ夕日が立ちどまるまち」というキャッチフレーズで、ユニークな地域おこしを行っている。

「何もない町はない。何もしていない人がいるだけだ」と若松さんは言う。そのとおりだと思う。私も地元・大川地区で何かしたいと思っていたが、その一歩を踏み出せなかった。それは地元には仲間がいないと思っていたからだ。ところが数は少ないけれど、どんどん過疎化していく一方であるのをはがゆく思っている同士がいることがわかった。そのときの喜びをどう表現すればよいだろう。昨年から月に一度の会合をつづけるなかで、NPOを立ち上げて、地元にある築80年ほどの古い醤油店の建物を拠点に地域づくりを模索することにした。週末カフェやマルシェ、考えるための講座や映画会など、したいことは山のようにある。しばらくはこの活動で忙しくなりそうだ。

宮本幹江
（2017年1月）

民族植物学ノオト　第 10 号（2017）　ISSN 1880-3881

発行日：2017 年 1 月 3 1 日
発行所：特定非営利活動法人 自然文化誌研究会
発行責任者：植物と人々の博物館　木俣美樹男
所在地：〒 409-0211 山梨県北都留郡小菅村 4115
小菅村中央公民館内 自然文化誌研究会

編集協力 & レイアウト＝宮本幹江［時遊編集舎］　印刷＝有限会社サンプロセス

Ethnobotanical Notes No.10（2017）　ISSN 1880-3881

edited by Mikio Kimata
Plants and People Museum, The Institute of Natural and Cultural History, c/o Community Center , 4115 Kosuge, Kitatsuru-gun, Yamanashi Prefecture 409-0211

PLANTS AND PEOPLE MUSEUM CULTURE AND BIOLOGICAL DIVERSITY

THE INSTITUTE OF NATURAL AND CULTURAL HISTORY. SINCE 1975.

エコミュージアム
日本村